
StrangeVampire's Journey

妖気

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Strange Vampires Journey

【Nコード】

N7065R

【作者名】

妖気

【あらすじ】

吸血鬼は旅をする。理由など特に無い。ただ、旅を続ける。それが吸血鬼の日常なのだから。

プロローグ（前書き）

この小説には二次創作が含まれます。
それが苦手な人は見ないことをおすすめします。
また、グロテスクの表現もあると思うので
それも苦手な人は見ないことをおすすめします。
また、更新は気が向いたら程度です。

プロローグ

今、俺は現状について理解できないでいる。

16歳である俺はいつものように自分の部屋でアニメを見ていたら後ろから刀で貫かれた。

「ごめんなさい。」

そして後ろから声が聞こえた。それは女の子の声だった。

「ごめんなさい。」

また声が聞こえた。声から想像するに絶世の美少女なんだなと、死にかけの思考で下らない事を考えて後ろを見ると、そこにはやっぱり絶世の美少女がいた。

歳は14歳位か。まだ、あどけなさが残る顔は美しいというより可愛いの種類に入るのだろう。背も低めで胸は小さめだろうか。視界はすでに白黒になって色は識別できないが髪は肩に軽く掛かる程度だった。

服装も普通の一般の中学生が着る様な服装だった。

ハッキリ言って見るものを保護欲全開にさせるような女の子だが、今はその子に殺されかけていた。

「ごめんなさい。」

そんな彼女は俺に向かい悲しそうな表情で涙を流しながら謝っていた。だから薄れ逝く意識の中、少女に向かいこう言った。

「ゆ・・・ゆるさ・・・ない。」

それが俺の最後の言葉だった。そして完全に意識が途絶えた。

その様子を見て、少女は両手から刀を放し、力が抜けたように崩れるように床に座り泣き続けた。頭を抱え、ごめんなさいと、ごめんなさいといつまでも・・・

「ここは、どこだ。」

小年は赤黒い水の上を歩き続けていた。赤黒い水は鉄とむせ返る様な甘ったるい匂いがしてくるが、今は何故かそれが心地よい良い香りとなっていた。

「俺は確か殺されたんだよな。ということは、ここは三途の川なのか。」

死んだというのに小年は冷静だった。いや、冷静すぎた。そんな彼にどこからか声かけられる。

『汝、何を望む。』

「誰だ、って言っても意味無いよな。」

『汝、何を望む。』

どうやら声の主は同じ事しか言わないらしい。

『汝、何を望む。』

「はいはい、分かった分かった。望みを言えばいいんだな。」

そして小年は望みを言う。

「力が欲しい、俺を殺した少女を殴れる力を。蘇りたい、俺を殺した少女を殴るために。」

それが小年の望みであった。その言葉を聞き、声の主は応える。

『聞き届けた、汝の願い、叶えよう。汝の思う力、汝に与えよう。』

その言葉と共に今まで歩くたびに波紋しか起こさなかった赤黒い水が動き出し、小年を包み込んでくる。

『汝に授けよう、我が体を。汝に託そう、我が魂を。汝の行く末、我が思いと同じ。汝に願おう、汝の行く先、吉凶があらんことを。』

小年は相手の声を聞く最中、包み込んでくる水が何なのか分かった。血である。赤黒い水全てが血であった。その液体が体を包み込み、浸透していても小年は冷静だった。小年にとってこれは些細な事だと言わんばかりに。そして小年は言葉を紡ぐ。相手に対して、それが礼儀であるかのように。

「あんたの言ってる事、全て理解できないが言わせて貰う。お前は
お前、俺は俺だ。お前の思いや願いは俺に託すな。俺の願いや思いは俺が決めることだ。」

『聞き届けた、ならば祈^{いの}ろつ汝の思いや願い、吉とならんことを。
その言葉を聞き、小年の意識は途絶える。これから先、何が起ころ
のかも知らずに。』

旅の始まりは紅魔館 最初の出会いには悪魔の妹

目が覚めた後、小年は自分の現状を把握しようとした。

「この体が俺なのか。」

目の前には大きな鏡が宙に浮いて、そこから見える小年の姿は異質だった。

顔面には包帯が幾重にも巻かれ、右目だけが布の間から覗いていた。全身も頭部と同じように包帯がきつく巻かれており、まるでミイラ男のようだった。

露出している部分は、せいぜいセミロングを逆立てたような灰色の髪の毛と、首とへその周囲ぐらいしか存在してなかった。

そして、男なのか女なのか全く分からない状態だった。

「これが、俺の望んだ物。」

この姿は、小年が憧れていた吸血鬼そのものだった。

ただし、一つ違う所は包帯の色は黒ではなく灰色だという所である。自分の姿をまじまじと見てみると、急に鏡に文字が浮かび上がった。

【汝、望んだ姿なり。汝、望んだ力は複数なり。汝、我と共に旅をする。汝、この鏡を通るべし。さすれば汝の旅が始まる。】

文字を読み終わると同時、鏡が輝きだした。

「俺は、俺を殺した女性を殴れば良いだけなんだが。」

その呟くと、頭の中に声が響いてきた。

『汝を殺した者、行方知れず。我、汝を殺した者の場所、今は知らぬ。』

「そうですかい。なら行きますか、人捜しの旅へ。」

そう言い、輝く鏡の中を通り抜ける。そういえばと小年は思う。鏡の向こうから爆発音等が聞こえるがその向こうでは一体何が起きているんだ？

Q・鏡の向こうでは何がありましたか？

A・出会いがありました。

「あなたは誰、遊んでくれる人？」

鏡から出た俺の目の前には、薄い黄色の髪をした七色に輝く特徴的な翼を持つゴスロリの女の子がいた。どうやらここは見渡すかぎり部屋の中らしい。

「遊ぶのは別に構わんが、こんな姿のと遊ぶのかい。」

小年はこんな状況でも冷静だった。

「うん、遊んでくれるなら包帯さんでも気にしないよ。」

「そうかい、なら何して遊ぶんだ。おままごとか？」

その言葉に目の前の女の子は首を横に振り答える。

「ううん、弾幕ごっこ。」

その瞬間、大小様々な弾の雨が飛んできた。その弾幕を紙一重で避けながら小年は言う。

「おいおい、危険な遊びだが大丈夫なのか。お家が壊れても知らんぞ。」

そんな冷静な質問に少女は無邪気に笑いながら答える。

「うん、大丈夫。咲夜が後で片付けてくれるから。」

「その咲夜という人は誰なのか分かんが、こんな危険な遊びは家の中でやるもんじゃない。」

そう言う小年は執事しじのようなお辞儀をして、相手に注意をする。

「外でやるものだ、安全を含め気兼ねなくやる為に。」

次の瞬間、壁から床から、様々な場所から蝙蝠こうもりが湧き出て、飛び跳ねていく。中からでは分からないが外から見ると更に圧巻あつかんだった。屋根からも館を囲む塀へいからも蝙蝠が飛び出し、天に向かい飛んでいく。二分後、蝙蝠は出なくなった。館・・・紅魔館は消えてしまったのだから。残っているのは建物あが在った跡ぐらいだった。

小年は空を見て笑う。小年の顔から唯一見える右目が爛々（らんらん）と輝いていた。

「雲一つない良い満月だ、こんな夜は外で遊ぶのが一番だと思わんかね。」

最初、少女は何が起こったか分からなかったみたいだが次第に理解して目を輝かせた。

「すごいよ包帯さん、これなら思いつきり遊べるね。」

「ああ、思いつきり遊べるぞ。さあ始めようか、吸血鬼同士の遊びを。」

「包帯さん、吸血鬼だったんだ。気付かなかったよ。」

「別にそんな事どうでも良いじゃないか、今は楽しく遊ぶ、それだけだ。」

小年の言葉に少女は同意して笑う。小年も笑う。小年はこの遊びを使い自分の力がどの位なのかを確かめようと思う。どこまでも小年は冷静だった。

そして小年はどこからか玩具の拳銃を取り出し、少女に向ける。
おもちゃ S・A・A
それが遊びの合図になった。

紅魔館の図書館で本をいつもの奴に盗まれたパチュリー・ノーレッジはため息をつきながら小悪魔と一緒に散らかった図書館を片付けていると、どこからか蝙蝠が現れた。どこから現れたのか不思議に思っていると小悪魔の悲鳴が聞こえた。

「どうしたの小悪魔、変な声を出して。」

不思議に思い小悪魔の居る向こうの本棚に行こうとして、その必要が無くなった。

蝙蝠が生まれてきているのだ、床から、天上から、本棚から本からも大量の蝙蝠が。いつの間にか蝙蝠は足元からも生まれてきていた。何がなんだか分からなかったが危険が迫ってきてる事は理解できた。
「小悪魔！！、生きてたら返事をして！！。」

蝙蝠の羽ばたきで聞こえなかったのか返事は返ってこなかった。駆け寄ろうとしても蝙蝠が行く手の邪魔をし、前に進めない。パチュリーは焦っていった。そして転びそうになった時、気がついたら館の外にいた。となりにはレミリア・スカーレットと十六夜咲夜、そして蝙蝠を手に乗せて撫でている小悪魔がいた。

「パチュリー様、お怪我は在りませんか。」

「・・・。」

咲夜の問いかけを無視して小悪魔の後ろまで歩き一発殴った。

「あいた？！、酷いですよパチュリー様、いきなり殴るなんて。」

「返事をしなかった罰よ、次に返事をしなかったらロイヤルフレアだから。」

小悪魔は反論を述べようとしたが、パチュリーの顔を見て何も言えなくなつた。パチュリーは泣いていた。小悪魔はパチュリーによって心配させた事を理解して、素直に謝るしかできなくなつた。

レミリアはどんどん消えていく我が家を見ながら呟く。

「咲夜、フランはどうしたの。」

「すみませんお嬢様、フランお嬢様の部屋の周囲の蝙蝠の量が一番多すぎて私でも近づくことができませんでした。」

そして館が消えて蝙蝠が全て天に昇ると、残った跡地にはフランドール・スカーレットとミイラが居た。

何か会話をするようだがミイラの方が拳銃らしきものをフランに向けた。その瞬間、戦いは始まった。

「咲夜、あのミイラが私の館を消してパチエを泣かせたので間違いないわよね。」

「はい、十中八九、間違いないかと。」

その言葉を聞き、永遠に紅い幼き月は天を見る。

「雲一つない・・・良い満月ね。」

雲一つない良い満月だった、こんな夜なら全力であのミイラを殺せる。

旅の始まりは紅魔館 最初の出会いとは悪魔の妹（後書き）

妖気「やつちやつたねミイラ、紅魔館を敵に回しちゃって。」

ミイラ「大丈夫だ、俺の思ってる力がそのまま使えるなら俺は誰にも負けない。」

妖気「いやいや、人の繋がりを大事にしようよ。」

ミイラ「そんなの死んだ人間には必要ない。」

妖気「・・・。」

ミイラは吸血鬼を墮とす

小年は弾幕を避けながら玩具おもちゃの拳銃から弾丸をばら撒いた。

「包帯さん、なんで玩具から弾が出るの？」

目の前の少女は不思議そうに聞いてきた。隠す理由も無いので小年は少女の弾幕を避けかしながら答える。

「弾丸は蝙蝠こうもりなんだ、自分の体から分離させて作った蝙蝠を高速回転させて銃弾として打ち込む。だから弾切れも装填の心配もない。」

「なら、貴方を殺せば弾は出なくなるということね。」

唐突に小年の真上から声が聞こえた。見上げると真上で槍のような何かを振りかぶってる女の子がいた。

「神槍『スピア・ザ・グングニル』！！」

「うおっと。」

真上から来た攻撃にすぐに避けようとしたがギリギリの所でまた別の攻撃がきた。

「幻幽『ジャック・ザ・ルビドレ』」

突然、大量の弾幕とナイフが現れた。更にナイフはこちらに向かって飛んできている。

そして二人の攻撃によって巻き起こった土煙によって小年は見えなくなった。

「お姉さま、今始まったばかりなのになんで止めるの。」

フランドール・スカーレットは不満そうに言った。他の人と遊んでいる時にお姉さまが来ると遊びはそこで終わってしまうから。だからフランは不満を漏らした。ただ、今回は違った。

「違うわ、フラン。私も混ざりにきたの。今日ばかりは本気で遊んでいいわよ。」

予想外の言葉にフランは目を輝かせる。本気で遊べるのは久しぶり

なのだから。

「ほんとに、ほんとにおもいつきり遊んで遊んでいいの。」

その質問に答えたのは姉ではなくメイド長の十六夜咲夜だった。

「ええ、フランお嬢様。おもいつきり遊んで構いません。」

咲夜は淡々と答えた。今のフランと咲夜・レミリアの温度差は大きく違ったがフランは気付かない。別に気付いても何も起こらないのだが……

そして煙が晴れる^はとそこには左腕を失ったミイラが立っていた。そんなミイラに向けて紅魔館の主は言う。

「貴方、さっきの攻撃を左腕だけで済ませるなんて驚いたわ。さあ、続けましょう、この遊びを。この紅魔館と私の大切な友に手を出した事、後悔させてあげるわ。」

その言葉にミイラは少し考えるそぶりを見せながら言う。

「この館が紅魔館というのは、なんとなく理解できたがお前の友達に手を出した覚えは無いけどな。まあいいか、そちらは二人追加ね。さっきのを見るに、こりやあ出し惜しみると俺が死ぬな。」

そう言うのと、唐突に、唐突にミイラの体は霧散した。

「『二代目領主』のレリック、『幸せの黄色い弾丸』のブリジストンときたから、ここは出し惜しみせず『藍影』^{あいしやどウ}の石橋で行くか。」

何処からともなく聞こえたミイラの声にレミリアは言葉をかける。

「一体何を言ってるの、それに何で霧散したの、まさか逃げるつもり？」

「いや、一番のポジションに陣取るだけだ。」

その言葉と共に霧となっていたミイラの体は月をバックに宙に集ま^うっていき、左肩の再生したミイラが現れた。どうやったのか包帯まで元通りの状態で。

「咲夜、フラン、一斉に攻撃して引き摺^ずり下ろすわよ。あのミイラ、何を考えてるか分からないけどあまり良い予感はいないわ。」

「分かりましたお嬢様、引き摺り下ろせば良いですね。」

「分かった、あの包帯さんにフランのとおっておきを見せてあげる。」

そして三人同時にスペルカードを放つ。

「幻世『ザ・ワールド』」

「『紅色の幻想郷』」

「QED『495年の波紋』」

「なっ?!」

驚きの声が上がった。まさか攻撃されるとは思っていなかった。そういう声が聞こえた。

「なんで・・・なんで私達を攻撃したの咲夜!!」

そう、攻撃されるとは思っていなかった。まさか信頼している十六夜咲夜がレミリアとフランを裏切るとは思わなかった。

あの時、三人はスペルカードをミイラに向けて放っていた。そこまでは普通だった。そして次の瞬間には時間を止めた咲夜がミイラを庇うようにこちらに対面し時が動き出すと同時にスペルカードをレミリアとフランに放っていた。

スカーレット姉妹は突然の出来事ながら避けようとしたが動けなかった。

なにせ気がついたらミイラの影が実体を伴い、更にその影から別の手の影が実体を伴い生まれて姉妹の両手両足を拘束していたのだから。しかも、影に重さは無いので、二人は動くまでまったく気付かなかった。

つまり何故ミイラが月をバックにしたかという、影を最も大きくして自分の影の中にスカーレット姉妹入れる事により気付かれない内に拘束をするためであった。もしも、スカーレット姉妹を影の中に入れないで今の技をやるうとすると確実に気付かれたであろう。よって、ミイラの一歩のポジションに陣取るという意味はこの事で

あり、ミイラが月をバックにした時点でミイラの勝ちが決まっていた。

「なんで・・・なんで私達を攻撃したの咲夜！！」

レミリアとフランは、碌ろくに回避も防御もできないまま咲夜のスペルカードを喰らった。そのせいで体の至いたるところにナイフが刺さって、フランは気を失いレミリアも満身創痍まんしんそういだが、それでもレミリアは咲夜に向けて叫んだ、叫ばずにはいられなかった。だが、その声は届かない。

ミイラを庇ひうように宙うそに浮かんでいた咲夜は二人分のスペルカードを受けたが、その表情は苦痛ではなく何者かに操られたように無表情だった。

「ただ俺が操っただけだ。霧化むかした時に俺の体の一部、まあ霧の一部をメイドに吸い込ませた。だからそいつはお前達を裏切ってない、安心しろ。」

レミリアの叫びをミイラが代わりに答えた。その言葉を聞いてレミリアはミイラを先ほどまでの殺意に加え憎悪の表情で睨にらんでこう言った。

「絶対に、絶対に貴方をゆるさない！！。」

ブチンとレミリアは満身創痍の中、影の手を全て引き千切り最後の力を振り絞って宙にいるミイラ目掛めがけて突っ込んでいく。右手に全ての力を注ぎこみ実力の差を知りながら一矢報いちやむくいようと突き進む。だが、それはできなかった。レミリアは腹部を襲う衝撃で突き進めなくなった。

なにせ、ミイラの体から放たれた高速回転した蝙蝠こうもりが、レミリアの腹部を撃ち抜いたのだ。その単純な出来事でレミリア・スカーレットは止まってしまった。

自分の腹部から滴したたり落ちる血を見てレミリアの意識は朦朧もうろうとしてきた。

そして、意識が途絶える前にこんな言葉が聞こえた。

「だから言つたろ、弾切れも装填の心配も無いと。それにしても、今夜は本当に良い満月だ。」

その言葉でレミリアは空を見上げ、そのまま後ろへ倒れこむように落下していく。

本当に今夜は、良い満月ね。

レミリアは意識が途絶える最後の瞬間、涙が流れてることに気付かず、月を見続ける。そしてそのまま、宙から落ちていった。最後まで涙に気付かず、そして意識はプツリと途切れた。

ミイラは吸血鬼を堕とす（後書き）

妖気「やりすぎだ。」

ミイラ「そうか、これでも手を抜いたが。」

妖気「いや、これでもやりすぎだ。」

ミイラ「・・・。分かった、次から自重しよう。」

妖気「まったく、ほんとに次から自重しろよ。」

ミイラ「・・・。」

早すぎる新たな旅立ち

「夢・・・だったの？」

目が覚めるまでラウンジのテーブルでうつ伏せの状態で眠っていたらしい。飲み掛けの紅茶も咲夜作ってくれた一切れのクランベリーパイもそのままだった。

レミリアは周りを見てみた。今の明るさと太陽の位置を見るにお昼の時間らしい。他にも何か無いか周りを見渡してみる。

庭も塀も館もいつも通りだった。自分の体も確かめてみたが腹部に穴は開いてないし、どうやらあれは本当にただの夢だったらしい。

「嫌な夢を見たわ。やっぱり前日のミイラのホラー映画が原因かしら。」

そんな事を考えながらレミリアは呼び鈴を使い咲夜を呼んだ。しかし、待っても咲夜は来なかった。

「買い物に行ったのかしら。」

確か今日、咲夜は買い物で人里に行くと言っていたはずである。

仕方ないと思い、レミリアは冷めた一切れのクランベリーパイを食べてから、図書室に向かう。

途中、廊下で小悪魔と会った。

「おはよう小悪魔。パチエは今も本の片付けかしら。」

「おはようございます。パチュリー様は今人里の方へ行ってます。」

「珍しいわね、パチエが外を歩くなんて。」

本当に珍しかった。いつも図書館に引き籠もってるパチュリーが人里に行く事は滅多になかったのだから。

「それにしても、今日は良い日差しだな。そう思うだろ。」

「基本吸血鬼は太陽が苦手じゃなかったかしら。」

眩^{まぎ}すぎる太陽の光にげんなりしながらパチュリーは隣を歩く灰色のミイラに突っ込みを入れた。

「吸血鬼全ての弱点が太陽という訳ではない。俺はただ耐性があるだけだが、他の奴では光合成をしなければ生きていけない吸血鬼もいる。」

それは吸血鬼なの？ と疑問に思いながらパチュリーは道案内をする。

「（まったく、こんな奴にレミイ達は負けちゃったのね。）」

落ちていくレミリアを急いでミイラは空中で抱きかかえた。

「この程度で遊びは終りか。実際に使いたかった力はまだあったが仕方がない。それにこれ以上は後味悪いな、下手したら向こうの一人が泣いて土下座してくるかもしれん。」

ミイラは心臓から聞こえてくる声にため息をつくと自らが操っているメイドにレミリアを託しメイドの支配を解く。

「これは・・・全身が痛いつてレミリアお嬢様!？」

自らの腕の中で重傷を負っている主に驚き、次に地面で横になっているフランに気付いて驚き、最後に近くにいるミイラに気がつき咲夜はミイラを睨む。

「よくもお嬢様方を!!。」

実際二人に手を下したほとんどが、意識の無い咲夜がやったことだが、あえてミイラはその事を言わず、更に悪役になる事にした。

「やめとけ、お前じゃ俺に勝てない。それと紫の女の子に感謝しとけ。あいつの声が無かったら今頃三人仲良く死んでいたぞ。」

実際は殺す気は無かったが、脅し程度で言った。しかし、目の前のメイドは臆^{おく}するどころか殺さんと言わんばかりの表情で睨んでくる。「眠れ。」

やれやれいった雰囲気だミイラが首を横に振ると今までとは違う威

庄のある声で呟いた。

その瞬間、唐突な眠気に咲夜は襲われて、眠ってしまった。

もちろん宙に浮かんでいたため抱きかかえていたレミリア共々落ちていく。それをミイラは影を使い受け止めた。

「さて、何もかも元に戻すか。」

小悪魔はパチュリーを抑えていた。

「パチュリー様、今行ったら危ないです。」

「離して小悪魔、今ならまだ間に合う！！ 間に合うのよ！！」

実際は間に合わない事はパチュリーは分かっていた。しかし、ただ黙って見ている事はできなかった。

「その女性の言うとおり、今行ったら危ないから二分だけ待ってくれ。二分たてば全て終わるから。」

唐突に、後ろから声が聞こえた。二人は後ろを振り向いてみると、声を発しているのは先程まで小悪魔が撫でていた蝙蝠こうもろうだった。

「お願いです、何でもします、何でもしますからあの三人だけは助けてください。」

パチュリーは蝙蝠に駆け寄り、切実をお願いした。つられて小悪魔もお願いをした。それを見て、蝙蝠は呟く。

「だから二分たてば全て終わると言っているんだが、まあいいか。じやあ何でも言う事は聞いてもらう。」

その時、空から大量の黒が落ちてきた。バサバサと羽音を立てながら。

それは蝙蝠の大群だった。蝙蝠の大群は紅魔館跡目掛けて落ち、そして集まっていく。そして二分後には何の傷も無い、いつも通りの紅魔館が建っていた。

二人はその光景を見て言葉を失った。何もかも元通りになっていたからだ。そんな二人に蝙蝠は言葉を放つ。

「さて、館も元に戻した、三人の服も怪我も治した。約束だ、こち

らの言う事を聞いてもらおう。後、一応言っとくけど三人はさっきまでの出来事を夢だと思うように暗示をかけといたから。』

太陽に目を細めながらパチュリーは思い出す。ミイラは二人にこう言った・・・

『言う事を聞いてもらうが、さっきも言った通り三人は俺の暗示により先程までの出来事を夢だと思っているから、二人は暗示が解けないようにいつも通り普通に過ごしてくれ。後、その紫の女の子は明日の昼、人里まで道案内をしてくれ。』

隣を歩くミイラは何を考えているのか分からなかった。しばらく歩き、人里にたどり着いた。

「ここが人里だわ、それで案内してもらいたい場所はどこ。」

パチュリーはミイラに質問すると、ミイラは自分の腕をどこからか出した刃物で少し傷つけ、血液を空气中に蒸発させた。

「何してるのあんた。」

ミイラは少しだけ黙っていたが、次には理解不能な事を言った。

「効き目は抜群と。それとこの世界には俺の求める女はいないと。」

それだけ言うと、霧散をしてミイラは消えていく。

「ここまで付き合ってくれてありがとな。また遊びに行くと思うから次は穩便に出会いましょう。じゃあな。」

そしてミイラは完全に消えた。パチュリーはポツンと一人きりになる。

「なんなのよ、一体・・・」

「パチュリー様、こんな所で何をしているのですか。」

横を見るとそこには咲夜がいた。咲夜の質問にパチュリーはこう答えた。

「もう、何がなんだか分からないわよ。」

「？」

パチュリーの言葉に咲夜は首を傾げた。

この幻想郷に現れたミイラは表れた次の日には幻想郷から鏡を使い去っていった。

早すぎる新たな旅立ち（後書き）

ミイラ「次の世界は一体どこなんだ。」

妖気「どんな場所が良い？」

ミイラ「タバコが吸えて、死体がいっぱいあるところ。」

妖気「・・・、考えとく。」

主人公紹介

名前 ミイラ（偽名）

年齢 16歳

出生日 6月27日

外見 全身を灰色の包帯で縛っており、見える箇所は
右目と首とへその周囲とセミロングを
逆立てた髪型だけ。

性格 冷静

能力 不明

自室でテレビを見ていたら後ろから女の子に刀で殺された小年。
外見がミイラなのは小年が憧^{あこが}れていた者の姿のため。

基本、人間には興味が無く興味があるとしてもそれは仲間だけである。

転生後は吸血鬼になったが、吸血鬼としての弱点が全く無い。

死体に関する話や出来事などがおこると、その時だけテンションが上がる。

好きな物はタバコである。

転生前は葬儀屋として暮らしていたが、家族はいない。

今の時点までで使った技

・蝙蝠化^{「こもりか」}

体を無数の蝙蝠に変化させる同じみの技だが、ミイラの場合は他の人や建物すらも蝙蝠化させることができる。

・霧化^{むか}

体を霧状に変化させる技。霧の一部を人間に吸い込ませて操る事もできる。

・撃ち放つ

体の一部を蝙蝠にして高速回転させて撃ち出す技
また、全身を蝙蝠化して突進する技もある。

・影を操る

影に実体を持たせ、さらにその影から新たな実体を持つ影を生み出す技。

攻撃から防御にまで使える。また、影を強酸化させることも可能。

・空気感染

内容不詳

他の技が出た場合、後書きで説明する予定。

ミイラ「ところで妖気、なんで空気感染だけ不詳なんだ。」

妖気「いや、そもそも空気感染の能力はまだそぶりだけ見せただけで公開されてないだろ。」

ミイラ「なら仕方ない。それで次に行く世界は。」

妖気「魔法がある世界だ。」

ミイラ「なら人が死ぬのか、そうなのか!!。」

妖気「テンション上がってる所悪いが、平和な世界だ。」

ミイラ「そうか、残念。」

妖気「まあ、評判の喫茶店とかあるから。あと、運が良けりゃ培養液の中の死体が見つかるかもな。」

海鳴に現れたミイラ 魔法少女と出会った小年

《遠見市》

鏡の中から抜けたミイラは周りを見渡した。今は夜らしい。

「ここは、どこだ。」

ミイラはビルの屋上に立っていた。男女の一般人らしき人がいるが気にしなかった。人には興味ない。

『この地、海鳴市という名。汝、この地にて何を求める。』

頭の中に声がかけられる。どうやらここは海鳴市というらしい。しかし、何を求めるって俺は偶然ここに来ただけだが。

「お前、なんだ？」

と、一般人二人が寄ってきて男のほうが質問してきた。中肉中背の黒いサングラスをかけた銀髪の二十歳位の男だった。

面倒になりそうなのでさっさと立ち去ろうとしたら、男がこう質問してきた。

「もしかして、転生者か。」

その瞬間、ミイラは男に忍ばせていた玩具おもちゃの拳銃を突き付けた。女の方は慌てて止めに入ろうとするが男は右手で制止した。

今更ながらに思うが、目の前の男が黒いスーツを着ているのに対し、女の方は黒いフードで全体を隠すという変わった服装であった。

「おいおい、俺は戦闘は苦手なんだ。穏便にいこうや、転生者さん。」

その言葉にミイラは銃をおろした。

「銀髪、なんで俺が転生者だと分かった。」

「いや、俺は転生者兼情報屋兼商人をやっているな。まあその長年の勘だ。それで、あんたの名前は。」

その質問にミイラは偽名としてミイラと答えた。

「安直なネーミングセンスで。」

「別に良いだろ。お前には関係ない。」

向こうも転生者らしい。それで、何故自分の正体が分かったのかの謎が解けたため、今度こそ去ろうとして、歩みを進める。

「おい待てミイラ。俺の名前はまだ言っただろ。」

そんなのどうでも良い。興味ない。まあ、殺されかけたのに自己紹介をする心境には興味があるが。

「ルシフィ、ルシフィ・トリニクス、通称名は『災厄伝承』だ。ここで会ったも何かの縁、情報をサービスするよ。」

その言葉にミイラは歩みを止めた。正確には『情報』という言葉で「手短に言ってくれ。内容によつてはこれからは情報を買っていただく。」

もし有能な情報屋なら今度依頼して、自分を殺した女の子がどこにいるのかを調べさせるのも良いかもしれない、そう思い立ち止まった。

「これは今は俺だけが知っている。新入り以外の転生者なら分かると思うが、葬儀屋が死んだよ。」

その言葉にクツクツとミイラは笑った。まさか、その情報が出るとは。殺されたのは昨日なのに、正確にはまだ一日すらも経ってないのに。

「合格だ、これから情報を買っていこう。さっそく一つ依頼をするが、そいつを殺した奴は今どこにいる。」

ミイラは紅い宝石を投げ渡しながら情報屋に依頼する。赤い宝石は紅魔館からパクってきた。

そして、情報屋は早くも情報を伝えた。予想外の情報を。

「今は病院で意識不明の重体だ。左腕と、両足が切断された状態だな。」

二時間後 深夜

先程の屋上にはミイラと話していたルシフィとその付き人の女がいた。ちなみにミイラはもう何処かへ消えていた。

「山猫、先に帰ってちよつとアレを発動させてくれ。」

その言葉に山猫と言われたフードの女性は転移魔法を使いどこかへ消えた。

それと同時に、ルシフィの前に魔法陣が現れ、そこから金髪の女の子と色の変った狼が現れた。

「情報を買ってくれたプレシア様の使いの者で間違いないですね。」

ルシフィがそう質問すると女の子は頷いた。

「では、これがこのマンションの部屋の鍵です。他にも御用がありましたらそちらに渡してある番号に連絡ください。追加料金ですが誠意を持って対応させていただきます。では。」

そう言くと、ルシフィは転移魔法を使い消えた。

少女、フェイト・テストロツサはアルフと共に部屋の中に入った。

家具や家電が一式揃ってあった。

「それにしてもフェイト、あの情報屋って信用できるのかな。」

アルフがそう聞いてきた。確かにあの情報屋は何を考えているか分からなかった。だけど、これも母さんのため、絶対にジュエルシードを集めなければいけない。

そう考えているとテーブルの上に青い宝石と書置きがあった。

「「えっ?」」

近寄って書置きを読んでみる。

【お客様へ、情報を買っていただいたサービスとして偶然見つけたジュエルシードを一つお送りします。今後とも御贔屓に。】

どうやら情報は信用できるらしい。ただし、予想外の事なのでフェイトとアルフはしばらく固まっていた。

ピンポン

チャイムの音に気が付いて起きたら昼になっていた。どうやらソファで眠ってしまったらしい。大きく伸びをして今も寝ているアルフを起こさないように玄関に向かう。

扉を開けるとそこには優しそうな顔つきの十六歳位の小年がいた。

「あの、どちら様で。」

その言葉に小年は礼儀良く答える。

「始めまして、このマンションに住んでいる葵井元樹あおいもとけです。挨拶に来ました、よろしく願います。」

どうやらこのマンションの住人らしかった。なのでこちらも挨拶をする。

「こちらこそ、よろしく願います。」

その後、小年は何か困った事があつたら下の階に住んでいるのでいつでも来て下さいと言って帰っていった。

部屋に戻ると、アルフが起きていた。

「ごめん、起こしちゃった。」

「ううん、今起きたところ。それよりさっきの人はお客さんかい。」

「うん、このマンションに住んでる人で優しそうな人だった。これから買い物に行くけどアルフも行く?。」

フェイトの言葉にアルフも行くと元気良く答えて人型になった。

夕方、フェイトとアルフが買い物から帰ってきてソファに座っている間、葵井元樹は台所で料理を作っていた。

どうしてフェイトとアルフの部屋に葵井元樹が居るのかというと、買い物の途中に偶然会ったのがきっかけである。

食品売り場でフェイトとアルフがインスタントや冷凍食品、菓子パンなどすぐに食べれるような物を買っていると丁度良いタイミンちやうどグで葵井元樹が通りかかった。

フェイトは葵井元樹にアルフを保護者だと嘘の紹介をすると、葵井

元樹は礼儀良く挨拶をした。

その後、葵井元樹は買物かごに目が行ったらしく、大量のインスタント等を見て、次にアルフの事を見て何か理解したような表情になりこう言った。

「アルフさん、フェイトさん。ご迷惑じゃなかったら今日はそちらの部屋で親交をかねてご飯を食べませんか。こちらで料理は作るのです。」

急な言葉に二人ともポカンとしてしまった。

そして今に至る。

最初は断ろうとしたが相手の善意に断りきれず、結局一緒に食事をする事となった。

今は台所からカレーの香りが漂ってきている。

（アルフ、葵井さんってなんでここまでしてくれるのかな。）

（うーん、多分お節介でやってると思うよ。下心とかも感じないし。）

そんな風に二人が会話で会話していると葵井元樹がお盆に三人分のカトラリスとスプーンを載せて歩いてきた。

「じゃあ、出来ましたし食べましょうか。熱いので気をつけてくださいよ。」

そう言い、テーブルの上にお盆を載せて、何気ない手つきでテーブルの上の物を掴んだ。

「「あつ。」」

「これ、どこに置けばいいですか。」

掴んでしまった、葵井元樹はジュエルシードを。そしてジュエルシードは輝きを放ち始めた。

フェイトとアルフは後悔した、なんで見つけた時にすぐに封印をしてバルディッシュの中に仕舞^{しま}わなかったんだらうと。

「えっ、何これ?! アルフさんフェイトさん、これって何ですか?! ってあれ?」

ジュエルシードは葵井元樹の手の中に入り消えた。そして葵井元樹は気を失って倒れた。

「葵井さん!!」

フェイトはすぐにバルディッシュを展開する。

「アルフ、お願い。結界を張って。」

「ああ、分かったよ。」

《?》

「いやゝ、さつそく面白いことになってきたかな。そう思うだろ山猫。」

アジトの一つで一休みしていたルシフィと山猫は、フェイト達の部屋に設置しておいた非常事態で反応する緊急信号メールを携帯で確認した。そしてルシフィは山猫にそう言ったが、返事は無かった。

「山猫、どうした。」

後ろを振り向くとそこには山猫はいなかった。そして近くから爆音が聞こえた。

「あの野郎、商品のバイクで現場に向かおうとしてんじゃねええええええ!!」

ルシフィは急いで止めに行く。というか止めないとヤバイ状況だったりする。

海鳴に現れたミイラ 魔法少女と出会った小年（後書き）

ミイラ「さっそく俺を殺した女の子の居場所が分かった。」

妖気「そうだな。それにしてもあの情報屋兼商人、お前的にはどう思う。」

ミイラ「気に入った。これからは有効に活用しようと思う。」

妖気「人を物扱い。」

ミイラ「俺的にはあの金髪の女の子の方が気になる。」

妖気「お前、ロリコンか？」

ミイラ「違う、アイツは人とは違う気がする。」

妖気「（確かに普通の人とは生まれ方は違うが・・・）」

ミイラは名も無き病院へ 小年は少女を義妹と重ねる

《どこかの病院》

ミイラは情報屋から買った情報を元にある病院に着ていた。現在、霧化^{むか}の状態で移動してるため誰にも見つかる事無く移動できた。そして、目的の部屋の前にたどり着いた。

「面会謝絶か。」

扉には面会謝絶の張り紙が張っており、扉には鍵が掛かっていた。しかし、今は霧化しているため面会謝絶の文字を無視して扉の隙間から入っていった。

「・・・、これが俺のしたことか。」

霧化から元の体に戻ったミイラが見た光景は、ベットで仰向けになっている惨^{むじ}たらしい状態で呼吸器を着けた少女の姿だった。どうやら手術が終って間もないらしく、脈を計る機械なども設置されていた。

その少女の状態は左腕は肘の所までしか無く、左足は付け根からスッパリと、右足は膝の部分からスッパリと切断^{おろ}されていた。そして、切断面を隠すかのようにギプスで覆^{おお}われていた。

「これじゃあ、殴るに殴れねえよ。」

ミイラは基本人間には興味ない。しかし自分を殺した少女がこのような姿になって何も感じないほど無機質ではなかった。

しばらくの間、少女を見つめていると少女が薄く目を開けた。どうやらまだ麻酔はまだ効いているらしく目の焦点は合わさってなかった。そしてミイラを見るなり少女はミイラに向けてこう言った。

「私に、左腕は、あり、ますか。両足は、あり、ますか。」

「・・・。左腕も、両足もない。」

ミイラは少女に事実を言った。

「やっぱり、ですか。それと、やっぱり、生きて、いたん、ですね。」

葬儀屋、さん。」

少女は微笑んでいた。全てを失ったような表情で。

「いや、死んださ。今の俺は葬儀屋じゃない、ただのミイラだ。」

「そう、ですか。声が、似ていた、ので、もしかし、たらと、思っ
たん、ですが、やっぱり、当たって、ました。あの、葬儀屋、さん。」

弱々しい声で少女はミイラに声をかける。

「だから俺はもう葬儀屋じゃない。今の名前はミイラだ。」

「そう、ですか。なら、ミイラさん。聞いて、くれますか。今から、
話す、私の、愚かな、過ちを。」

その言葉にミイラは頷く。その様子を見て、少女は自嘲気味に微笑
みながら話し始めた。

《遠見市》

フェイトとアルフと葵井元樹あおいもとけは沈黙の中、カレーライスを食べてい
た。

話は少し戻る。

気絶している元樹の体に宿ったジュエルシードを封印及び回収した
フェイトとアルフ。

さてどうやって誤魔化ごまかそうか考えていたら葵井元樹が目覚めて起き
上がったのでフェイトとアルフは慌てた。そんな二人に元樹はこう
言った。

「食べようか、カレーライス。」

そして今に至る。

フエイトとアルフはカレーライスを食べながら念話をしていた。
（アルフ、なんで葵井さんはさっきの事を聞いてこないんだろ。）
（もしかしたらジュエルシードの影響で忘れてるかもしれないねえ。）

（だと良いけど。）

確かに一般人があんな光景を見ても夢と判断するかもしれない。けど、葵井さんは目覚めてすぐに『食べようか、カレーライス。』と言った。

それが腑^ふに落ちなかった。そして沈黙の中三人は同時にカレーライスを食べ終えた。

そして葵井さんは両手を合わせてこう言った。

「ごちそうさまでした。じゃあ先程までの出来事を説明お願いします。」

やっぱり気付かれてました。

フエイトとアルフは誤魔化す事ができないと思い説明した。魔法の事、ジュエルシードの事、母さんの手伝いでこの世界に来たこと、話せない事以外は全て話した。葵井さんは真面目に聞いてくれた。
「そうだったのか、いまだに信じがたいことのオンパレードだが信じるよ。それで、俺は何を手伝えれば良いんだ。」

説明を聞いて葵井さんはいか手伝える事はないか聞いてきた。

「ごめんなさい、探す手伝いはしなくていいです。かえって邪魔になると思うので。」

一般人を巻き込んで危険な目にあわせたくない。そう思いフエイトは断った。しかし、葵井元樹は首を横に振った。その様子にアルフも言葉を掛ける。

「フエイトはあんたの事を思っているんだ。悪いけど、あんたにジュエルシードを探す手伝いをさせる事はできないよ。」
その言葉に対しても葵井元樹は首を横に振った。そして葵井元樹は

口を開いた。

「なにか誤解してるようだから言っけど。俺もその探し物は危険だと分かっている。」

「なら、」

フェイトが言いかけたところで葵井元樹は右手を前に突き出し静止のサインを出した。

「話は最後まで聞こうな。まあ言いたい事は分かっているから敢えて言っけど、俺が手伝える事は家事洗濯及び食材の買出しなどだ。危険物を探す手伝いはやらないから安心してくれ。」

その言葉にフェイトとアルフの二人は拍子抜けしてしまった。てっきり危険だと分かっている上でジュエルシードを探すのを手伝うと言うと思っていた。

そんな二人の考えは露知らずで葵井元樹は一人自分の世界に入り込んでいった。

「うん、最低でも育ち盛りのフェイトさんのために栄養のある物を作らないといけないな。それに二人とも探し物で街中を搜索するから洗濯などもしなくてはいけないし」

「あ、あの、葵井さん？」

フェイトの呼びかけに葵井元樹は全く反応しなかった。それどころか、どこか遠くの世界に行っていた。

「フェイト、しばらくそつとしいた方がいいよ。」

「で、でも。」

「ということは今日から計画表をたてないとな。うん、お母さんのためにフェイトさんは手伝いをするのに自分は悠々と過ごしていられないし。お兄さん張り切っちゃうな。」

どこか遠くの世界に旅立っていた葵井元樹の表情は、フェイトとアルフの二人には生き生きとして見えた。

フェイトとアルフは知らない。葵井元樹はフェイトを妹と重ねてしまった事を。

そして葵井元樹の妹はすでにこの世を去っていた。
死因は母親による虐待、フェイトが受けるよりも凄惨せいさんな虐待であつた。

虐待の理由は簡単で血が繋がっていないからだつた。つまり養子として来た子であつた。

また、この世を去つた時の年齢は9歳、フェイトと同じ年齢であつた。そして悲しき事に、その日まで葵井元樹は妹が虐待を受けていた事を知らなかつた。

そして、あの過去の自分のように葵井元樹は目の前の少女が虐待を受けている事を知らない。

ここまで偶然が重なれば、これは偶然と呼べるだろうか。

もしかしたらこれは、偶然ではなく必然なのかもしれない。それを知る術すべは無いのだが・・・

ミイラは名も無き病院へ 小年は少女を義妹と重ねる (後書き)

妖気「まさか葵井さんがあんな辛い過去を持つとは」

ミイラ「・・・。」

妖気「どうしたミイラ。」

ミイラ「いや、なんでもない。思い出に干渉しただけだ。」

妖気「？」

ミイラ「(・・・ごめんな。)」

妖気「何か言ったか。」

ミイラ「いや、何も言っていないが。」

ミイラは魔法少女を見ていない

《海鳴市 神社》

「ふう。肺に染^しみる。」

とある病院から海鳴市に戻っていたミイラは神社の石段に座り口元の包帯をどかし、タバコを吸っていた。

（・・・どうしたんだか、俺を殺した女を気にするとは。）

病院で話を聞いてからミイラは何かを感じていた。別に罪悪感を感じてない、同情もしていない。好意なんてのは全くといっていいほど感じてない。

ただ、何かしら感じていた。その何かが分からない。それが、もどかしい。

「ふう、美味い。」

だからタバコを吸う。その何かを忘れるために。これは転生者になる前からの習慣だった。何かあったらタバコを一本吸う。別に中毒ではないがミイラはタバコが好きだった。

「ふう、もう終わりか。」

タバコはフィルターだけになってしまった。そのフィルターを右手で握り、再び拳を広げるとそこから一羽の小さな蝙蝠^{こうもり}が現れ、天高く飛んでいった。

（下から子犬連れの女性が一人か。なら興味ない。）

蝙蝠から得た視覚情報では子犬を連れた女性が石段を登って着ていた。別に自分の姿を見られても変な視線で見られるだけだからなんともないが。

『汝、姿を隠せ。』

と、なんか姿を隠せと命令された。そういえばこいつの名前は何だったか。

「・・・めんどくさい。」

『汝、姿を隠せ。』

どうやら拒否権はないようだ。仕方ないのでミイラは霧散した。

（隠れろってあの女がなんなんだ。もしかして『食鬼人』^{イーター}なのかってそれはないか。あれは見るかぎり犬を含めて感染済みだ。）

ミイラは女性と犬を分析しているうちに、女性は石段を登りきつたと、子犬が地面に落ちている石を^{くわ}咬えた。その石はミイラには見覚えがあった。

（あれは確か、ジュエルシードだったか。何でも願いを叶える宝石だったはず。）

そんな風にミイラが考えていたらジュエルシードが輝いて犬を取り込んだ。女性は何がなんだか分かっていないようだ。

（あつ、この場合は犬に取り込まれたが正解か。）

しょうもない事を考えていると子犬が進化しました。黒い四つ目の怪物に。

（この場合は目は背中についた方が全方位を見渡せるのに。それに変なところに牙が生えてるし、親知らずなのか？）

冷静に欠点を指摘していると女性が怪物に恐怖して気絶した。しかしミイラは今は怪物にしか目が行ってない。人間には認めた奴以外とことん興味ないがそれ以外なら興味がある、それがミイラだった。

（しかし進化したことにより凶暴性は大幅に上回ってるか。それに関節が強靱になってるのを見ると瞬発力なども上がっていると見えるさらに進化したことにより感染まで解けているか。）

『汝、姿を現せ。』

（黙ってる、今はこの興味深い生物をじっくりと観察するのが先だ。）

『汝、姿を現せ。』

（・・・、納得の行く理由を言えと言っても教えてくれないんだろ。ならせめて教えるよ、何故死んだ俺の体を使ってあの女の左腕と両足を切断したかを。あの元子犬を何とかした後にな。）

飼い主を襲おうとした犬の怪物の目の前に、目に見えぬ霧は集まります。

霧は集まるたびに色が付けられていく。それはミイラの纏う包帯の色ではなく、真つ赤な真つ赤な血の色に。

その様子を見て犬の怪物は怯えだす。まるでそこに死が迫っているかのように。

そして徐々に血の色に灰色が混ざり、人の形となっていく。

「グルアアアアアア！」

犬の怪物は死に抗おうと赤と灰色の人の形をした物体に突撃した。

「狼は喉笛に喰らいつく《my body is chew to vital organ》」

声が響き渡ると同時、人の形をした霧の腕の部分が狼の頭になり犬の怪物の喉笛に深く深く牙を突き立てた。そしてそのまま引き千切る。そして怪物は元の子犬の姿に戻った。喉から血を溢れ出させながら、痙攣しながら。

「good by 良い眠りを。」

完全な姿になったミイラは腕を狼の頭から人の腕に変えながら別れの言葉を口にした。その手にジュエルシールドを握りながら。

「あつ」

声が聞こえたので石段の方に視線を向けると、そこにはフェレットのような動物を引き連れた女の子がいた。

「なんで・・・どうしてこんな酷い事を。」

女の子は倒れている女性と死体になりかけの犬を見て表情を強張らせながら言った。その言葉にミイラは女の子に近づき、通り過ぎた。

石段を上がりきったら、そこには気を失って倒れている女性と首から血を流している子犬、そして両者の間に立つ灰色のミイラの後姿

がありました。そして、ミイラの手にはジュエルシールドが握られていました。

この酷い光景を見て、思わず声が出てしまいました。その声に気付
き、灰色のミイラはこちらに振り向きました。振り向いた灰色のミ
イラは右目以外を全て包帯で覆^{おお}っていました。

「なんで・・・どうしてこんな酷い事を。」

その言葉に、ミイラはこちらに近づいてきました。それを見てユー
ノ君は私に念話で話しかけました。

（なのは、レイジングハートの起動を。）

（えっ？、起動って何だっけ。）

（我は使命をから始まる起動パスワードを）

（あんな長いのが、覚えてないよお。）

そんな事を話しているうちに灰色のミイラは目の前まで来ました。

そしてそのまま、灰色のミイラは通り過ぎていきました。そして灰
色のミイラは何事も無かったかのように石段を降りていきました。

「待って！！ まだ話しが」

その言葉に、灰色のミイラさんは立ち止まらず振り返らずにこう言
いました。

「興味ない。だが、もし話を聞いてもらいたかったら普通と違うこ
とを示すんだな。」

そう言いながら灰色のミイラは再び歩き始めました。慌てて追いか
けようとすると体が動きませんでした。まるで命令を受け付けてい
ないかのように。

「なんで、なんで動けないの！？」

ユーノ君も同じで動けないようでした。

「感染済み、お前が普通である証だ。」

その言葉にユーノ君が怒鳴りました。

「待てっ！！、これは一体なんなんだ。それにジュエルシールドをど
うするつもりだ。」

その声を聞き、灰色のミイラはもの凄い勢いで振り返りユーノ君の

目の前に立ちました。

「驚いた、喋るフェレットだとは、名前はなんという。」

「僕の名前はユーノ・スクライア・・・じゃなくてジュエルシードをどうするつもりだ!!。」

その言葉に灰色のミイラはユーノ君の頭をツンツンとつつきました。

「叫ぶな。ジュエルシードが欲しいならくれてやる。」

そう言うとうーノ君の目の前にジュエルシードを置きました。

「ユーノ・スクライア・・・その名、覚えたぞ。じゃあな。」

そう言うとうーノ君は再び灰色のミイラは石段を降りて行きました。私には目を向けないで・・・

キュウーン、キャンキャンキャン

唐突に聞こえた鳴き声の方向に視線を向けると死に掛けていたはずの子犬が飼い主らしき女性に近づき鳴き声を響かせていました。まるで何事も無かったかの様子でした。

気がつけば体は自由に動かせる事が出来ていました。

《高町家 夜》

お風呂から上がってユーノと自室に入ったのはは、携帯にメールが入っていたので見てみた。

差出人は『翠屋』のアルバイトとして働くなのはの友達の紅美鈴からだった。

こんばんわ、なのはちゃん。

こんな時間でちょっと変な質問をするけれど、何か変わった事って起きてないよね。

起きてなければ良いんだけど。起きていた時は気をつけてね。

特に【災厄伝承】といっている人が居たら近づかないことです。
じゃあ、お休みなさい。

PS・昨日のフェレットさん、ユーノって名前ですね。その子とは仲良くやっていますか？

探し物の手伝いは危険だと思うけど頑張ってね。お姉さんも手伝える時は手伝いますから。

「えっと・・・【災厄伝承】ってどうゆうこと、なのかな。」

「僕に言われても・・・。まあ、もし会ったとしても近づかなければ良いと思うよ。」

ユーノはなのはにそう言った。

「うん、そうだね、ユーノ君。」

ユーノに返事をしたなのは、そこである事を思い出す。灰色のミイラの事を。

「えっと、ユーノ君。【災厄伝承】ってもしかして、灰色のミイラさんの事かな。」

「あっ・・・。」

二人は少しの間、固まってしまった。

二人は誤解していた。灰色のミイラが【災厄伝承】でないことを・

《遠見市 夜》

ミイラは一人、ビルの屋上から海鳴市を見下ろしていた。

『汝、転生するには血肉が必要であつた。汝に虚言^{たわごと}を吐いたのは特に理由はない。』

「特に理由は無いつて、別に嘘を吐かなくても俺は気にしなかった

ぞ。」

『汝、他に聞きたい事は。』

「他に聞きたい事はつて・・・」

その言葉にミイラはため息をついた。聞きたい事など山ほどあるに決まっているのだが、全て質問するとキリが無いので一つだけ質問することにした。

「Who are you. お前の名前を教える。」

その言葉に相手は答えてくれなかった。

「・・・、黙秘か。じゃあもう一つ質問する。この街で一体何が起くる。」

その言葉にも相手は沈黙を保つだけだった。

「・・・、この街の人のどの位が感染しているんだ。」

『汝により、ほぼ感染している。』

「それは答えるんだな。」

ミイラはその答えを聞き、懷からタバコを取り出す。今日は雲で月が隠れている、それはそれで良い月夜だ。

ミイラは魔法少女を見ていない（後書き）

妖気「新しい技、出しましたね。」

ミイラ「それが何か。」

妖気「とりあえず、空気感染はまだ一部しか出してないからな、説明は省略。」

ミイラ「じゃあ何を説明するんだ。」

妖気「狼化だよ。」

ミイラ「それもやったな。」

妖気「いや、自分のやった事ぐらい覚えろよ。」

ミイラ「そうだな。」

おおかみか
狼化

腕を狼の頭に変える技。また、建物から狼を作り出すことが可能。

一応、体全体で狼になる事も可能だが、その場合、他の能力は使えず
なく

なるので、ミイラは全身を狼に変える事はほとんど無い。

ミイラは再びフェレットの元へ 小年は少女の世話をする

《海鳴市》

夜は吸血鬼の時間である。満月が出ているなら尚更である。別に今日は満月ではないのだが……

「find out. 見つけた。」

何処かの校庭、そこで魔法少女とフェレットがジュエルシードを封印していた。無論、ミイラはジュエルシードには興味が無い。

興味があるのはフェレットである。ミイラはフェレットを気付かれない内に摘み上げた。

「うわっ!？」

「えっ、ユーノ君!？」

「ユーノ・スクライア。神社の時以来だな、元気にしてたか。」

ミイラは友人に話しかえるような軽さで挨拶をした。もちろんユーノはもがこうとするが、ミイラはがっちりと掴んでいた。ちなみに、なのははミイラを警戒していた。

「おいおい、そんなに暴れるな。俺とユーノの仲だろ。」

「えっ、ユーノ君とその貴方は友達だったの?!」

なのはの言葉を聞きミイラは答える。

「ん? なんだお前、居たんだ。」

その言葉に先程までの警戒はどこへ行ったのやら落ち込むのは。小さい声で何か呟いているがミイラには聞こえない。そんな少女を気にしないでミイラは返答する。

「まあ、俺とユーノは厚い友情で結ばれているんだ。」

そこでようやくミイラの手から逃れたユーノが大声で言い返す。

「いつそんな仲になったっていうんだ!! それになのはも落ち込んでないでレイジングハートの再起動を」

その言葉に、ミイラは悲しそうに呟く。

「いや、冗談のつもりで言ったんだがそこまで拒絶しなくても・・・それに再起動って俺は別にその少女はどうでも良いが、ユーノとは友好的関係でいたいのだが・・・」

「私って、そんなに影が薄いのかな・・・」

「えっ、何この空気。」

15分間、なのはとミイラが落ち込んでいるという不思議な状況になった。

「なあユーノ、確かにあの時は体を動かせない状態にしたが別にあれは敵意あつてやった事じゃないんだ。」

ようやく立ち直ったミイラはユーノと会話をしていた。

「じゃあ、なんでジュエルシードを持っていたんだ？」

「あれは偶然だよ。子犬がジュエルシードを取り込んで化け物になったのを見た。その化け物が襲ってきたから強引に化け物から取り出しただけだ。」

その言葉にユーノは筋が通っていることに納得して、そこで思い出したように質問する。

「一つ聞くけど、あの子犬が蘇ったのは・・・。」

『聞くな。』

突然、ミイラが威圧のある重々しい声で呟いた。その瞬間、ユーノはその質問が出来なくなった。まるで精神を束縛されたかのように。

「あ、今は・・・一体。」

「ユーノ君、どうしたの？」

ようやく立ち直ったなのはは、ユーノが困惑している事に気付き質問した。

「あ、あ・・・あ。」

ユーノは何かを言おうとして上手く喋れない状態だった。そんなユ

ーノに対しミイラは言う。

「という訳だユーノ、また来るからな。それと今後は俺の能力を聞くな。」

ミイラは立ち去っていく。最後にはこんな言葉を残して。

「それと前もって忠告をしておく。ユーノ、俺はお前を気に入っている。だから俺を知ろうとするな。俺を知った途端、お前は消される。」

そしてミイラは何処かへ立ち去っていった。

《遠見市》

フェイトとアルフはジュエルシードの反応が出たのですぐにそこに向かったが、結果は収穫無しで終わってしまった。

今は自分の泊まっているマンシヨンの部屋の前にいる。

「フェイト、元気だしなよ。次はきつと見つかるから。」

「そうだねアルフ。次はきつと・・・」

そう言いながら部屋の中に入ると葵井元樹あおいもとけがテーブルに突っ伏して眠っていた。

あの日から葵井さんはちよくちよく炊事洗濯掃除をしに来ていた。

合鍵を渡した日からは毎日のように来ていた。

「・・・きつと見つける。母さんのためにも、私達を気にかけていてくれる葵井さんのためにも。」

「・・・、そうだねフェイト。」

アルフは内心では葵井元樹を感謝していると同時に恨んでもいた。

本当はフェイトの母親からフェイトを引き離したかった。フェイトを救いたかった。

だけど、フェイトはジュエルシードを全て集めたら昔みたいな優しく

い母親に戻ると信じて私の言う事を聞いてくれなかった。辛く悲しい思いをしながら、決意を胸に秘めて。

葵井元樹が現れてからはさらに決意が固くなっていた。

フェイトと感情をリンクしているのだから決意が固くなるのを感じるのは当然の事だった。

だから、葵井元樹を恨んでいる事を悟られないように一部リンクを解除をしていた。本当に憎く思っていた。

しかし、それと同じくらい感謝もしていた。

葵井元樹と出会ってから、フェイトの悲しみが格段に消えていった。だから、もしかしたらフェイトを救ってくれる。そんな希望さえ抱いていた。ただの魔法も使えない生ぬるい世界で生きてきた一般人である小年に対して。

そんなことは幻想だと理解しながらも。

そんな複雑な感情を抱きながらもアルフは今日まで過ごしていた。

フェイトとアルフは葵井元樹を起こさないようにタオルケットを被せてテーブルの上に置いてある書置きを見た。

フェイトさんとアルフさんへ

こんな夜遅くご苦労様です。差し入れにクッキーを焼いて置きました。

疲れたときには甘い物を食べるとリラックスできるらしいです。

これからもジュエルシード集め頑張ってください。

葵井元樹より

どうやら、あと少し待って来なかったら出ていこうとして、そのまま眠ってしまったらしかった。

書置きの隣りにはクッキーが置いてあった。フェイトとアルフは一

っ食べてみた。

冷めているが、ほんのり甘くサクサクしていて美味しかった。

「美味しいね、フェイト。」

「そうだねアルフ。」

そこでふとフェイトは何かを考えるような表情になった。

「どうしたんだい、フェイト。」

「・・・私にお兄さんが居たら、葵井さんみたいな人なのかな。」

その言葉にアルフはクッキーを喉のどに詰まらせてしまった。

《？》

情報屋、ルシフィは部屋の中で山猫の焼いてくれたクッキーを食べながら資料を見ていた。

「ん？ この資料は・・・」

一瞬、顔を険しくすると残り一枚のクッキーを食べて資料にペンで何かを書くとその資料を持ち席を立つ。ドアを開けるとそこにはたまたま通りかかった山猫がいた。

「山猫、ちよつくらお客様の場所に行ってくる。留守番を頼んだ。

あとクッキー美味しかったぞ。」

「分かりました。ちなみにお客様とはどちらの方で。」

その言葉にルシフィは資料を山猫に渡した。

「それを見れば分かる。」

そう言うと、足早に出て行った。残された山猫は資料を見る。

「これは・・・。」

そこにはプレシア・テストロッサの病状とその娘アリシア・テストロッサの死因、そして全く関係のない葬儀屋の死体消滅の資料が載っているだけだった。

それと、右端にルシフィが書いたと思われる何かのメモみたいなのが書いてあった。

「葬儀屋・・・ギヤルド・・・屍使い・・・病状・・・死体・・・
これは一体・・・あつ。」

呟くと同時、全てが繋がった。フードに隠れて口元しか見えない山
猫の表情は微かに微笑んでいるように見えた。

ミイラは再びフェレットの元へ 小年は少女の世話をする（後書き）

妖気「とりあえず聞くが、お前の能力は何種類あるんだ。」

ミイラ「教えない。」

妖気「だよ。だが一つだけ言わせてくれ。フェレットだけでなく少女もしっかり見ようよ。」

ミイラ「なんで人間に興味を持たなくてはいけないんだ？」

妖気「いや、あのフェレットも人間だよ。」

ミイラ「そうなのか、それは凄。ますます友好関係でありたい。」

妖気「・・・、お前の基準が分からん。」

ミイラ「だろうな。俺はあの日から普通の人間には興味が無い。」

妖気「そうか、まあいいか。次回も続くよ。」

ミイラは桃色の魔力光に 小年は少女のそばで眠る

《過去》

世の中には変えることの出来ない運命という名の悲劇がそこらへんに転がっている。

「街中にて転生者及びその仲間三名、確認しました・・・指示を。」
『殺しなさい。』

イヤホンマイクから伝わる上司の単純な命令を聞き、十三歳位の小年は笑い合う転生者と仲間たちの集団の横を通り過ぎようと見せかけて一瞬で終らせる。

銃弾三発に一閃のナイフ、小年は殺意も悪意も罪悪感も抱かずに人間の死角から命を刈り取っていく。

「人間には、興味ない。」

何が起ったのか分からずに崩れ落ちていく四人の人間。いきなりの殺人事件に対しパニックになる民衆。それらを一瞥もせずにイヤホンマイク越しに上司に報告をする。

「ターゲットの死亡を確認しました。回収班へ繋いでもらえると助かります。なるべく人間以外の奴でお願いします。」

『ご苦勞様でした。次回の暗殺任務ウェットワークに向けて休んでいて構いません。では、通信を切ります。』

人々の怒声や鳴き声を気にせずに小年は家に帰ろうとする。

悲劇はそこらに転がっている。一分一秒で数え切れないほどに起こっている。小年がやったのはその一角、小さな小さな欠片。

ただ誤解してはいけない。悲劇が起ること悲しみが蔓延するのは一割で、悲劇により喜ぶのも一割。そう、残り八割は悲劇とも喜劇とも関係ないのである。

「邪魔。」

帰る道筋で泣いている女の子に服を掴まれた。長く燃えるような緋色の髪をそのまま伸ばしている女の子だった。

「邪魔。」

「どう・・・して、どうしておね・・・お姉ちゃんヒグツ、お姉ちゃんを殺しヒック、殺したの」

「邪魔、人間には興味ない。」

強引に引き剥がし拳銃で両足の太股ふとももを撃ち抜く。

「あぐっ!？」

少女は何度も立とうとして立てなかった。少女は大声で泣いた。

痛みと悲しみと悔しさに泣き続ける少女を見向きもせず小年は帰路につく。警察は来ない、組織が手を回してるから。

「うっ、許さない。絶対に、絶対に殺してやる!！」

少女のその言葉は小年には届かなかった。少女は後で知る事となる。小年には名前が無く、替わりに裏の世界の人からは葬儀屋と呼ばれていることを。

いかに強力な力を持つていようと転生者を確実に再び葬る。その事にちなんだ付けられた名前であることを。

そう、これは昔話である。三年前のまだ葬儀屋が生きていた頃の話である。

《海鳴市》

「なんだこれは。」

ミイラは巨大な樹木が街に根を張り巡らせてる状況を見ながら呟いた。

「汝、何故に不思議がる。」

その頭に直接響く言葉にミイラは当然といつかのように返答をした。

「当たり前だ、正直言ってあんな巨大な樹木はイギリス戦線殲滅戦ヴァルキリーの翼以来だぞ。一体何が」

『あれもジュエルシードの影響である。』

その言葉にミイラは目を爛々と輝かせる。

「ということは、ユーノが出てくるのか。じゃあ会いに行かないとな。」

そういつてる間にも樹木の根はミイラの前に迫ってくる。そしてミイラの体に当たると同時、ミイラに当たった樹木の根の部分だけ大量の蝙蝠（こもじり）となつて空に飛び立った。

「さて、ユーノは一体どこにいるのか。」

飛び立った蝙蝠はミイラを中心に放射的に広がる。そして一匹の蝙蝠がターゲットを見つけた。

「見つけた、どうやらオマケも居るみたいだな。」

ミイラは体を霧散むさんさせ、お気に入りお気に入りのフェレットの元へ移動する。

そして、空中を移動していた霧状のミイラは膨大な魔力に包まれる。自らがまったく興味を抱かなかった桃色の魔力光を持つ少女の一撃により。

偶然とは恐ろしいものである。

高町なのはは屋上で後悔をしていた。あの時、男の子がジュエルシードをポケットの中に持っているのを感じていたはずなのに。

「ユーノ君、わたし・・・」

「good evening・ユーノ、元気にしてたか。」

なのはが何かを言おうとした所で突然ミイラが現れた。二人は現れたミイラの姿に言葉を失った。

「どうしたんだ、信じられないものを見るような目つきで。」

ミイラは不思議がるが当然である。首から下の左半身が何かに挟り取られたかのように無いのであるから。さらに顔に巻いてある包帯は少し緩んでいた。

「ああこれか、空中を移動してたら桃色の光に巻き込まれてごっそり体を持っていかれたんだ。いや、霧状だからこの場合は蒸発した

が正解か。」

その言葉にユーノとなのはは念話をする。

（桃色の光って多分）

（うん、さっきのなのはの・・・）

偶然とはいえミイラをこんな状態にしたなのはと殆ど何もしてないユーノは罪悪感に襲われる。基本、高町家の人とユーノは人が良いのである。

そんな念話に気付かずミイラはさらに言う。

「いや、心臓を別の場所に置いてたから良かったが、もし置いてなかったら死んでたな。いや、あの威力はすごい、線路レイルトレの上をなぞる者程ではないが凄いよ。」

もしかしたらミイラは死んでいたかも知れない事実を聞き、さらに二人は罪悪感に包まれる。

そんな風になっている二人に気付き、ミイラは少女に歩み寄ると笑いながら言葉を掛ける。

「おいおい、落ち込む事はないんだぞ。えーと、確かなのはだったか。あんな一撃はそうそう出せない。まあ確かにあれには驚いたがそれだけだ。体なんて時間が経てば元に戻る。」

落ち込んでいたなのはとユーノはミイラがさっきの一撃について気付けていたのとミイラが違う話し方で話しかけてきたのに対し驚いた表情を浮かべる。

「喜べ、俺はお前を認める。」

「えつと、それって素直に喜んでいいのかな・・・」

困惑するなのはに対しミイラはさも当然に答える。

「当たり前だ。ユーノもそう思うだろ。」

「そんなの僕に言われても・・・」

ユーノは困った表情になるがミイラは笑いながら言う。

「まっ、何回も言うがお前は凄いという訳だ。ところで一つ質問だが、なんでなのはは落ち込んでいたんだ？」

その言葉になのはは街の方へ視線を向け言う。

「街がこうなったのは私のせいなの。気付いていたはずなのに何もなかった、だから・・・」

明らかになのは落ち込んでいた。ユーノは声をかけようとして先にミイラが口を開く。

「この街はお前にとっては大切なのか？」

いつにもなくミイラは真面目な声で質問をする。その言葉になのはは答える。

「うん、私にとってかけがえない大切な場所。」

そこでなのは何かを決意したかのような表情になる。

「ジュエルシードを集めてたのは、最初はユーノ君のお手伝いをしたいと思ったから。だけど今は違う、私の意志でジュエルシードを全部集める。これ以上、誰も傷つけたくない。」

「なのは。」

ユーノはただなのはの名前を言うだけだった。ミイラはそんななのはの表情を見て目を閉じる。そして再び目を開けると、体をユーノとなのはの方へ向ける。

「俺はお前等を認めた。だから名乗ろう、俺の名前はミイラだ。」

突然のミイラの自己紹介に二人は目を丸くしてキョトンとした。

「そんな俺から言わせてもらうが、生き物が取り返しのない間違いをするのは当然だ。」

そう言い、ミイラは右腕を胸の前で横にし、執事のように礼をする。

「だから、生き物は学習する。俺が断言する、次は絶対に大丈夫だ。」

「

その言葉と共に、街からは大量の蝙蝠が次々と発生していく。

「お前の大切に思う場所、お前なら絶対に守れる。」

ミイラが急に立ち去ってなお、なのはとユーノは呆然と立ち尽くしていた。今まで酷い有様だった街が全て元通りになっすべていたからだ。そんな様子の二人に走って近づく人が居た。

「なのはちゃんユーノ君、怪我とかないですよ。良かった間に合
つて。」

最近、翠屋のバイトとして働いている紅美鈴の登場と言葉になのは
とユーノは頭に疑問符を浮かべる。

「美鈴さん、慌てちゃってどうしたの？」

明らかに紅美鈴は焦っていた。だが、次の言葉で焦ってる原因が二
人には分かった。

「前に送ったメールに書いた災厄伝承がこの近くに居るんです。だ
から早く逃げましょう。」

その言葉に二人は紅美鈴を落ち着かせるための言葉を言う。

「それならさつき会いました。確かにもの凄い力でしたけど、ミイ
ラみたいな変な外見とは裏腹の普通の感じの人でしたよ。」

ユーノがそう言うと同時に紅美鈴は首をかしげる。

「誰ですか、その人？」

バリアジャケットとバルディッシュを展開したフェイトはジュエル
シードの反応があった場所に来ていた。街は酷い有様だった。そし
てジュエルシードは発見できなかった。

「探しましたよ、お客様。さあ、ちよつと避難しましょう。」

声に後ろを振り向くとジュエルシードの情報と寝泊りする場所を与
えてくれた情報屋のルシフィが居た。全く気配を感じることが出来
なかった。

「避難とはどういう事ですか。」

「新しく常連になったお客様がこれから大変なことをしますので。
とりあえず、避難しましょう。」

その言葉と共に、割れた道路から、罅ひびの入った建物から、倒れた街
路樹から大量の蝙蝠が湧き出してきた。

「あー、間に合いませんでしたね。」

「これは一体なんですか、ルシフィさん。」

フェイトはルシフィに質問した。帰ってきた答えは実に単純だった。
パン

ずっとフェイトはルシフィを見ていた。見ていてなおフェイトはルシフィが拳銃をとりだして弾を撃ち出した事が分からなかった。薄れていく意識を感じて、ようやくフェイトは撃たれたことが分かった。痛みは無い、まるで麻酔が効いてるかのようだった。ルシフィの声が途切れ途切れに聞こえてくる。

「すみ　ん　客　、俺とし　こん　手荒なまねは　くな
かったの　すが、まあサー　で。」
そして、前に倒れた。倒れこむ途中、何かに受け止められるような感じがした。

目が覚めた時、フェイトはベットで眠っていた。上半身を起こして周りを見してみる。

「ここは・・・葵井さん？」
ベットの隣りには椅子に座っている状態で眠っているあおいもとじげ葵井元樹がいた。そこでようやく気付く、窓から見える外の様子から今の時刻は深夜に達している事に。

「私、確かあの時・・・つつ!？」
気を失う前の事を思い出そうとした瞬間、頭に軽い痛みが走った。思い出そうとすると何かに邪魔をされるかのように。

結局思い出す事は諦める事にして、アルフに念話をかけてみた。

(アルフ)

(フェイト!?　良かった、起きてくれて。調子は大丈夫かい。)

(うん、所で今アルフは何をしてるの。)

その言葉にアルフは何の気もなく答える。

(お礼に行ってたんだよ。あの情報屋の人がフェイトを連れて来て

くれたから。」

アルフが帰った後、情報屋は山猫にジャーマンスープレックスを喰らわされていた。

「タイムタイム!!、俺本当に戦闘とか好きじゃないから! 話し合いをおお!!。」

「ええ、ですから肉体言語も織り交ぜて話してるじゃないですか。お客様に手を出すなんて何考えてるんですか!!」

「イタタタタ!!、ギブギブ、頼むから女性が十文字固めをしないでというかやるならもつと愛をおお!!」

そこでようやく山猫は情報屋を開放した。

「ハア、ハア、ようやく分かってくれたか。」

「ええ、愛が欲しいのなら道具を持ってきますね。」

「まったく分かってないよこの人!!、だいいちお客様に麻酔弾を使ったのはお客様を迅速に安全な場所へ運ぶ事であって、まあ倒れるお客様を抱きとめて記憶を改ざんしたのは新しく常連になったミイラ様ですが、俺が言いたいのは俺は無実だああ!!」

「ええ、分かりました。こんなのはどうですか?」

「まったく分かってないしそれはアカンって、回転してるってギアアアア!!」

その日、海鳴市に悲鳴が轟いたり轟かなかったりした。ちなみに山猫と情報屋は今はこの風であるが付き合っているのである。今はこんなであるが・・・

ミイラは桃色の魔力光に 小年は少女のそばで眠る（後書き）

妖気「分からねえ、自分を殺しかけた相手を気に入るお前の思考回路が分からねえ。」

ミイラ「そうか？」

妖気「後、もう一つ言わせて貰うがお前の過去って一体・・・」

ミイラ「それは機密だ。」

妖気「だから戦闘とかに慣れてるんだな。」

ミイラ「まあな、生きるためには殺すしかない。そんな場所だ、あそこは。」

妖気「大変だったんだな、お前。」

ミイラ「今も大変だよ、まったく。」

妖気「次回も続くよ」

二人の魔法少女が会う一日前

《どこかの病院》

とある病室、少女は昼のお日様を一身に受け^{ひとみ}昼食を食べていた。慣れない左腕でフォーク使い料理を口に運ぼうと格闘していた。

慣れないのなら右腕を使えばいいのだが、その少女には右腕が無かった。付け足すならば両足も無いのである。

「あつ」

フォークに突き刺されていたミートボールがポロリとベットのの上にセツトされてある台の上にこぼれ落ちた。それを見てため息を吐く。「やっぱり、私には左手だけで生活するなんて無理なのかな。」

「すまないな、俺のせいで。」

いつの間に居たのかベットの隣りにミイラが居た。とても申し訳なさそうな様子だった。

「居たんだ葬儀・・・じゃなくてミイラさん。それと人間には興味が無かったんじゃない。」

「何事にも例外はある。まあ、俺も今の気持ちは何なのかよく分かってないがな。」

「？」

「まあ今の気持ちなんてどうでも良いけどな。ほら、フォークを貸してくれ。」

そう言うミイラは右手を差し出してきた。

「えっと」

「左手じゃ食べづらいだろ、今回は俺が食べさせてやるよ。」

その言葉を聞き少女は慌てて首を振る。

「いいですよそんな、それに今の歳で食べさせてもらうなんて・・・」

『渡せ。』

ミイラが低い威圧のある声で言うと素直に左手がミイラにフォークを渡した。

「酷いですよミイラさん、能力を使って細胞を束縛するなんて。」

「これ以上束縛されなくなかったら言う事を聞くんだなと、ほれ、あーん。」

仕方なく少女は顔を恥ずかしそうに少し赤くしながら食べさせてもらう事にした。

《海鳴市 同時刻》

「フェイトさん、これなんてどうですか？」

「これは、ちょっと恥ずかしいかな。」

あおいもとしげ

葵井元樹とフェイトはシヨッピングをしていた。なんでも前日にフェイトは気を失った状態で情報屋に運ばれてきて、事情を知らない葵井元樹はその原因をストレスと決め付け、ストレス回復のためにシヨッピングに行こうと言ったためである。

現在、葵井元樹は服売り場で水色のワンピースをフェイトにおすすめていた。偶然なのかフェイトの元となったアリシアが最後に生きていた日に着ていた同じ服装を。

「大丈夫だよ、きつと似合うって。」

アリシアが似合っていたのだから似合うのは当然である。

「そうかな・・・じゃあ試しに着てみるね。」

そう言うతోフェイトは葵井元樹から服を受け取り試着室に入っていた。それを見送り右腕の腕時計を見ながら小声で葵井元樹はカウントをする。

「さてつと、78、77、76、75・・・」

何かを予知するかのように数える。

「33、32、31、30・・・」

そして、試着室を見る視線は真剣なものであった。そして

「4、3、2、1、0」

「似合うかな、葵井さん。」

「よし、すぐに会計に行こう。」

この後、フェイトは葵井元樹から服を買ってもらった、意外と上物なので高いんだぜ、これ。ちなみにアルフは迷子ですよ。英語で言うLost Childである。アルフは年齢的にはまだ子供だからチャイルドで会ってるよね。by情報屋

《喫茶 翠屋》

「店長さん、注文二つ入りまーす。」

翠屋のバイトとして働く紅美鈴はもちろん紅魔館のあの人です。なんで紅美鈴がそこで働いているかというと、早い話が出稼ぎです。紅魔館ではお昼寝ばかりしていた彼女だが、それは仕事があまりにも暇なためである。翠屋のバイトとして働く彼女は、働き者な明るい美人さんである。

「すいませーん、ケーキのお代わり頂けますか？」

お客様の声を聞き注文を承^{うけたまわ}りに行く紅美鈴。そしてお客様を見て営業スマイルのまま引き返した。

「あれっ、ちよつと店員さーん。」

紅美鈴が引き返すのも無理はない。そこには自称『災厄伝承』ことルシフィ・トリニクスが居たのである。

そもそもこの世界に紅美鈴が来たのはルシフィの紹介あつてだが、この世界に来るにあたりちよつとした代償があり、そのせいで紅美鈴はルシフィを危険人物と判断してるのであつた。

そんな訳だがやはり仕事なので、何とか気を取り直した紅美鈴は注文を取りにルシフィの所へ行つた。他のバイト仲間に頼めば良いのに・・・

「ようやく戻ってきたな。こんな場所で悪いが仕事の依頼だ、この紙に書いている場所へ今夜九時に来て貰いたい。あとケーキはお任

せで同じのを二個お願いする。」

「かしこまりました、ショートケーキ二個でございますね。」

紅美鈴はそう言うと言紙を受け取り注文のケーキを取りに行く。結局、紅美鈴は災厄伝承に逆らう事はできない。逆らうと取り返しが付かなくなる、今はただ従うしかない、そう、今だけは・・・

そんな彼女を見ながら災厄伝承は誰にも聞こえないようにポツリと呟く。

「従うのは別に構わないが、少しは牙を剥いて貰いたいものだ。」
そう言うルシフィの表情は少し寂しげだった。

《海鳴市臨海公園》

時間は過ぎ、夜の二時を迎える。大半の人間は眠る時間ではあるが、夜に生きる人外存在にとっては一番の活動時間である。特に現在、海鳴市に存在する妖怪と吸血鬼はそれぞれの場所で我が物顔で力を使用する。

「聞いてねえぞ、何で三面のボスがこんなに強いんだよ!!」

紅美鈴は公園にてルシフィの依頼を遂行していた。自分勝手に原作を壊していく転生者の捕縛、それが依頼内容だった。

「残念ながら私は紅魔館では力を抑えていたので、もし弱い方の私と戦いたかったらその世界に行ってください。」

そう言いながら紅美鈴は約束された勝利の剣を正面から弾き飛ばす。どうやら相手の転生者は Fate の作品を使うようだが、驚くべきことに紅美鈴はそれを全て防いでいた。

そして、次の瞬間には相手の懐に入り強力な拳を突き出す。

「我が八極に二の打ち要らず! これで終りです。」

「は!?! ちょっと待った!?!」

転生者はすぐに防ごうとしたが遅かった。

「覇アアア！！」

无二打、二の打ち要らず。言葉の通り一撃で相手を倒す拳。李書文が最初に成し得た殺しの技であり、八極拳を会得している紅美鈴にとつてはいつも容易く再現できる技であつた。

そして、転生者は地に沈む。

无二打、二の打ち要らず。その言葉通り、転生者は二度目の死を迎えた。

「あつ、やつちやつた。」

本来は捕縛のはずなのに紅美鈴は転生者を殺してしまった。本来なら焦る所なのだが彼女は焦らなかった。

「仕方ない、せえのっ！！」

転生者の心臓目掛けて踵を振り落とすと衝撃により転生者は蘇つた。アバラ骨折及び内臓損傷の重傷で。

「俺は、映姫様に会つて、改心、しました。」

意識はハッキリしてるらしい。

「そうですか、じゃあそろそろ貴方を引き渡さないといけないので行きますよ。」

紅美鈴が転生者を抱え上げようとした、ちょうどその時、光が消えた。

《遠見市》

『汝、汝を殺した者をどうするのだ。』

街中のビルの屋上、タバコを一服していたミイラに対し名前の分からぬ誰かは頭の中に直接話しかけてきた。

「さあな、介護士の免許は持つてないが面倒を見るのも良いかもしれないな。」

そう良いながらフィルターぎりぎりまで吸い切り、吸殻を霧散させ

た。

「まあ、成り行きに任せるしかないな。俺は昔から何も考えず、言われた事に従うだけだったからな。今は違うがな。」

『汝、もしこの先にあるのが苦と悲しくない場合、過去のように成り行きに任せるのか、それとも今のよう抗うか。』

その言葉にミイラは悲しそうに薄く笑いながら答える。

「どうだろうな。俺は死を多く見てきた。そのせいでもあるが、殺しを正当化するために俺は人間に対する興味を失くした。いや、俺はあの時逃げた。その瞬間からかもしれない。」

思い出すのはありふれた悲劇の過去、仕組まれた殺人劇。
マードーショー

「胸糞悪い。もう一本吸うか。」

そう言いタバコをもう一本取り出そうとして、屋上の扉が開く音と共に獣のような叫び声が聞こえた。その声は人の言葉でこう言っていた。

「みいいいいつけえええたあああ！！ 葬儀屋アアアアアアアアアアア！！」

ミイラはその声を聞き流しながらタバコを取り出し火を付け口に咥えた。

「ふう、美味い。」

煙を吐き出すと共に後ろを振り向くとそこには長く燃えるような緋色の髪の美少女がいた。歳は十三だろうか。その少女はボロキレミたいなのを身にまとっているだけだった。

「誰だ、お前。」

「お前ええええに、お姉ちゃんをおお殺された者だあああああああああ！！」

その瞬間ミイラのタバコを咥えていた右腕は消えた。そのミイラの隣りでは美少女がミイラの右腕を噛み砕き美味しそうに咀嚼していた。そこで気付く、ボロキレの隙間から見える太股の部分に銃痕が
ふともも

あることに。

「ああ、あの時の。食鬼人^{イーター}になったんだ。」

右腕を喰われたのにミイラは平然と立っていた。

「じゃあ、俺はお前に興味が無いからそろそろ行くよ。じゃあな。」

そう言い立ち去ろうとしたミイラの首を、腕を喰い血に塗れた少女は常人の目に追いつけないスピードで掴みあげた。

「そろそろ行くよだあ？ 地獄に落ちるって意味かあ？」

悪意と殺意に顔を歪ませて少女は笑いながら言う。少女はもう正気ではなかった、多くの吸血鬼を喰らい力を得るうちに心が歪んでいた。昔は復讐で動いていたが今は復讐に加え『喰いたい』の一心で行動していた。ミイラはその事を『鏡獄』の能力により今知った。興味ない。」

そう言い捨てると次の瞬間、海鳴市と遠見市全ての電気が消えた。

今日は曇りのため月の光も無い。本当に何も見えない状況になった。

「発電所を潰してなんのつもりだああ葬儀屋ああ、食鬼人は気配で吸血鬼の居場所を知る事が出来ることを知らないのかああああ？」

そついい終えた瞬間、少女の右手から掴んでいた物の感覚が消えた。

「いや、潰してない。そこで働いてる人を操って電源をオフにしただけだ。それと、終わりだ。」

その瞬間、全方向からミイラの気配が膨れ上がった。そう、海鳴市と遠見市全体からミイラの気配が少女を包囲するかのよう。

「なあに！？ なあにこれえ？ なんで分からないの！！ なんでえええ気配がああはつきりしないのおおおお！？ 大きいのになんでえ！？。」

途中から蝙蝠の羽音や狼の唸^{うな}り声が全方位から聞こえてきた。

「ちなみに、お前は助けは呼ばないと思うが一応言っとく。この街の人は全員空気感染で俺が操ってるか眠ってるかの二通りだ。例外として三人いるが期待はするな。」

そして、ミイラが指をパチンと鳴らすと共に今まで少女を包囲していた蝙蝠と狼が一斉に襲い掛かった。混乱する少女はなすすべも無

く、そのまま獣の大群に飲み込まれた。

「喰い、たい。喰いたい。早く、喰わないと頭が、頭が、うがあああがあひゃあひゃああ。」

大群に飲み込まれた少女は傷だらけになり横たわっていたが生きていた。ミイラは少女に近寄ると自らの体から生み出した蝙蝠を少女に差し出した。

「あつ・あつあ。」

「お前はもう人間じゃない。哀れなものだ、喰いたいんだろ吸血鬼を。」

「良、いの、あひゃ、たべ、食べて良いの。」

「ああ、喰え。」

その言葉を聞き、少女は蝙蝠を弱々しく手に取り、食たべなかつた。

「どうした、食べないのか。」

少女は泣いていた。悔しそうに泣いていた。

「食べたい、あひゃ、食べたいけど、悔しい。お姉ちゃんを、うひゅ、殺した奴から同情されるのが悔しい。何より、貴方が優しいのが悔しい。なんで優しいのに、ひゃひゃ、お姉ちゃんを殺したの。」
ミイラは認めてない人間以外には興味を持つ。だからミイラは答える。

「・・・依頼だった。ただそれだけだった。すまん。」

「そんな、あひゃひゃ、そんな理由で、ふひゃっひゃ、お姉ちゃんは死んで、私は化け物になって、ひゃ。」

少女は泣きながら笑っていた。ミイラはそれを黙って見ていた。

夜が開け、海鳴市の人は異常に気付かず次の日に進む。これが、なのはとフェイトが初めて出会う前日の話であった。

二人の魔法少女が会う一日前（後書き）

妖気「なんか空気感染で街が大変なことになってる。」

ミイラ「時間さえかければ日本全土を感染させることが出来るがどうする。」

妖気「いや、止めとけ。それと、紅美鈴が強いのは気にしないでね。」

ミイラ「誰に言ってるんだ？」

空気感染

自らの血液を空气中に蒸発、散布する事で一般市民はおるか動物さえも

操る事ができる。

制限は無し。

また、感染された当人は自覚しない。

妖気「さて、お前はあの少女をどうするんだ。」

ミイラ「病院の方が、それとも緋色の髪の方が？」

妖気「どっちもだ。」

ミイラ「さあな、どうなるんだろうな。」

ミイラの想い 小年の想い

《すずか邸》

とある邸宅の林の中、こっそり巨大な猫の毛並みを触りながらミイラは二人の少女の闘いを見ていた。といっても、金髪の方が優勢であるの是一目でわかるが。

「俺は一体何をしたいんだろうな・・・っておわつ、猫、重！？。」
勝負は決まったようだ。巨大な猫が少し動き、そちらに目が行ったのはミイラが猫の下敷きになったのを見てピシリと固まり、その事情を知らないフェイトにより一撃を入れられた。そのまま気を失い落下していくのはをユーノは魔法を使い受け止める。

一撃を入れたことに罪悪感を感じながらフェイトはジュエルシールドを回収しようと猫に近づこうとして言葉が聞こえた。

「mind・そうそう今まで気になっていたんだ、なんでお前は空気感染に掛からないか。」

後ろを振り向くと、いつの間にか灰色のミイラが空中に滞空していた。

「つつ！？」

初めて会うはずなのにどこかであった気がする。そう思い、記憶を探ろうとすると頭に激痛が襲ってきた。

「無理に思い出さないほうがいい。余計頭が痛くなるだけだから。」
そんなフェイトの状態を知っているような口ぶりでミイラはタバコを取り出しながら言った。

「まあ、そういうことだ。じゃあ俺は忙しいから近いうちにまた会おう。その時に空気感染に掛からない理由も教えてもらっから。」

先程まで猫を触っていたくせに、ミイラはそう言って立ち去ろうとする。

「待って、貴方は一体。」

その言葉に立ち止まってミイラは悲しそうに答える。

「やりたい事が決まらない優柔不断な卑怯者な吸血鬼だ。」

そして今度こそミイラはタバコを吸いながら立ち去った。

「にしても自分で願っておきながら言うのもなんだが、俺の姿ってなんだ。」

「はいはい、職務質問にきちんと答えてください。」

邸宅から出て五分、ミイラは警察から職務質問を受けていた。

「それで、その全身包帯だけの格好は何ですか？」

「人間には興味が無いんですけど。」

「つまり現実逃避の成れの果てですね。」

次からロングコートでも買おうかなと思いつながらミイラは包帯の上から頬をぼりぼり搔いていた。

「まあ、そうなりますね。」

警察はため息を吐きながらミイラに注意をする。

「今回は注意だけで終わりますけど、次もその格好でいる場合は署までちょっとご同行願いますよ。」

「あゝはい、分かりました。次は気をつけます。」

素直に聞き入れたミイラの言葉を聞き、警察はパトカーに乗り去っていった。

「次は署か、身分証明書が無いからどうしようか。」

ため息を吐きながら、ミイラはロングコートを買いに行く。

「そういえば、あの金髪の女の子の服装は大丈夫だろうか？」

『汝、汝の姿よりはまともである。』

ごもつともである。その答えを聞き苦笑いしながらミイラは二本目のタバコを取り出した。

《遠見市》

（なんなんだろうね、そのミイラみたいな奴は。）

（うん、ジュエルシードが目当てじゃないみたいだけど。けど、最後に悲しそうな目をしていた。）

「夕飯が出来ましたよ、今日はボルシチですよ。」

念話で話し合っていたフェイトとアルフの元へ葵井元樹が夕食を運んできた。
あおいもとしげ

「それにしても、子猫が巨大になるなんて何でもありませんね。ジュエルシードって。」

そう言いながらライスにボルシチを盛っていく。

「うん、でも大丈夫。あの子猫は元に戻したから。」

その時に名前も知らない女の子を攻撃した事はさすがに言えなかった。

「さすが魔法少女。俺なんか魔法が関係してなくても救えない事ばっかだよ。」

そう言う葵井元樹の表情は少し悲しそうだった。その表情が何故かミイラの悲しそうな目と重なって見えた。

そんな悲しそうな表情の葵井元樹に対してフェイトとアルフはすぐに言葉をかけた。

「そんな事ないよ、葵井さんのおかげで私は今まで頑張れて来れた。もし葵井さんが居なかったら私は挫折していたと思う。」

「そうそう、フェイトの言うとおりだよ。それに今だって美味しいご飯を作ってくれてるし、掃除や洗濯までしてるじゃないか。それだけで充分だよ。」

その言葉を聞き、葵井元樹は驚いた顔をしていたが、次には笑っていた。

「そうか、良かった。俺でも救えるものがあつたんだな。よし、気

分が良いから明日の夕飯は期待してくれよ。」

その言葉にフェイトとアルフは顔を綻はらばせた。その表情を見て、葵井元樹は思う。

どんなに救っても遅いんだ。俺は大切な人を救えなかったから・・・

《?》

ミイラは情報屋の店で服を買っていた。

「なあ情報屋、仏舎利を使ったロングコートと天使の羽を使ったロングコートではどちらが耐久性があるんだ。」

「着てみれば分かりますよ。」

そうことなので真っ白な天使の羽を繊維として作ったロングコートを着てみた。やはり天使の羽製の聖なるロングコート、体が焼けるように熱い。

「なあ、これってもしかして人間用か？」

「そうそう、それ人間用。貴方みたいな吸血鬼とかの魔の者が着たら体が焼かれますよ。」

その言葉を聞き情報屋に紅魔館から盗んだエメラルドを投げ渡す。仏舎利の方は着なくても結果は分かるので試着しない事にする。

「代金はそれで足りるだろ。」

そう言うミイラは真っ白なロングコートを真っ白な蝙蝠に換えて、灰色なロングコート、否、ゲームやマンガの主人公が着る様な灰色の神父服に作り変えて体に纏まとった。

「驚いた、まさか天使の加護だけを残して作り変えるとは・・・。」

「こんな事、俺の力ならば造作もない。」

「ちなみにその神父服は写真を撮らせてくれないか、業者にデザイン案として送りますから。」

そう言うのと、どこからともなくデジカメを取り出してきた。

「好きにしる。その前にもう一つ、
いか？」

についての情報はな

「いやいや、それはさすがに取り扱ってませんよ。まあ、良いカウンセラーの情報なら提供できますが。」

そしてシャッター音が部屋の中に響いた。

情報屋の店から出たミイラはそこでようやく時刻が夜になっているのに気がついた。

「夜か、さて月はどこだ。」

灰色の神父服を着たミイラは上を見ながら歩いていく。そして見つけた。今日は新月だった。

「新月か、僅かな月の光というのも良いものだな。そう思うだろ、なあ。」

ミイラが語りかけるように言うとミイラの背中からビクリと体を震わせる物体があった。

「なんで、なんで刃が通らないんだよ！！」

その物体はナイフを両手に持って心臓に刺そうとしていた10歳位の少年だった。

「この神父服は特注品だ。防刃^{絶対防御}防弾^{ドッグナイフ}防災防電の効果がある。そんな
ちやちな物じゃ俺を殺せないぞ、犬人種。」

その少年は犬のような耳と尻尾が体に付いていた。

「大方、俺に大切な人を殺されたからその復讐か？」

ミイラはそう予想して、小年に質問した。緋色の髪の少女の時もそうだったが、基本ミイラの命を狙う人はミイラに対して復讐を誓った人かその依頼を受けた人である。

「そ、そうだ！！ 葬儀屋、お前のせいで俺たちは、俺たちは！？」
犬人種と言われた小年は驚いていた。なにせ優しく包み込むようにミイラは少年を抱きしめていたからだ。

「本当に、俺は何がやりたいんだろうな。病院に居る彼女の面倒を

見たい、緋色の髪の少女をまともにしてやりたい、今だって君を抱きしめてるし、俺のせいで虐げられた君達に償いたい。優柔不断だな、俺は。」

「何を言ってるんだ、お前。」

あまりの出来事に小年はナイフを突き刺す事が出来なかった。

「なあ、俺は転生して自由になった。だがその自由が辛い。転生前のただ命令を聞いて人を殺す日々が本当に恋しい。けど転生して自由になってから俺は俺のせいでまともな道から外れた二人の人間に会った。俺のせいで虐げられる事となった犬人種^{ドッグナ}の少年と会った。」
ミイラは泣いていた。本当に悲しそうに、悲痛な声で。

「俺は辛い。昨日まではこんなに自由に考え、自由に思う事が辛いだなんて思わなかった。タバコを吸って気を紛らわせようとしても無駄、情報屋に行っても買えるのは情報と装備品だけ、少女と使い魔と会話しても気が晴れない、最初はいっつを殴るだけで充分だった。なのに、俺は、俺は」

何も求めてなんか無いんだ。

ミイラは言葉に出さずに自分と力を与えてくれた奴に向かいそう言った。

ミイラの想い 小年の想い（後書き）

妖気「・・・、今回はミイラさんが留守なのでユーノ君に来てもらいました。」

ユーノ「妖気さん、後ろからバインドかけて・・・ここはどこですか。」

妖気「気にしない気にしない。それよりユーノ君は今回のミイラをどう思いますか。」

ユーノ「まさか泣くとは思いませんでした。少し以外でした。」

妖気「だよな。俺ですら驚いてるからな。」

ユーノ「それで、ここはどこなんですか。」

妖気「まあまあ淫獣、その質問は後書きが終ってからね。」

ユーノ「淫獣！？ それどういう事ですか！！」

妖気「気にしない気にしない。」

ユーノ「うう、僕ってみんなにどう思われてるんだろう・・・」

妖気「では、次は犬人種ドッグナーについての解説です。」

ドッグナー
犬人種

犬の耳と尻尾を持つ種族。

するどい五感を持ち、足の速さも人間を軽く凌駕する。

葬儀屋により大半の犬人種は今、奴隷として扱われている。

ユーノ「確か今は犬人種の人権を訴える団体が沢山できて、色々な世界で社会問題にもなりましたよね。妖気さん。」

妖気「そうだな、ちなみにミイラは騙されたんだよな。ある人を殺せば犬人種は救われると。実際はその人が保護活動してたのに。」

ユーノ「ミイラさんって本当に認めてない人間以外には優しかった

んだ。
L

海鳴温泉 ミイラは決意と自分のルールを口にする

《遠見市》

「今頃、フェイトさんとアルフさんは温泉で楽しい思い出でも作ってんだろぅな。」

あおいもとしげ
葵井元樹はフェイトとアルフの滞在している部屋を掃除機で掃除していた。何故か楽しそうである。

「掃除く洗濯お料理とく気付けば今日は晴れ模様とととくの最上川。」

そっきょう
即興で歌いながら掃除を進めていく葵井元樹。

にじます
「虹鱒く釣ればあ食費は安くなるつとつとく北上川。」
もはや歌の内容は意味不明である。

《海鳴温泉 午後》

（忠告しとくよ、子供は良い子にしてお家で遊んでなさいね。おいだが過ぎるとガブツといくわよ。）

アルフはなのはとユーノに念話で脅し文句を言っていた。

（お姉ええさんもガブツてえするのおおおお？）

異常な声質に驚いてなのはの後ろの方を見ると、向こうには、長くて美しい緋色の髪の13歳くらいの少女が旅館の浴衣を着て立っていた。

（誰だい、あんた。）

アルフは強く睨みつけながら質問をする。アルフと緋色の髪の少女の念話会話なので、なのは達から見ればアルフが自分達の後ろの方

にいる少女を睨んでいるように見える。そのままだが。

（あたあしいいの事なあってえどうでも良いでしょおお。）

そう言くと少女は薄く笑いながらその場から立ち去った。アルフはその少女を追いかけると同時になのは達にも声をかける。

「ごめんねえ、あそこに居た子がうちの子に色々やってくれてる子だったよ。じゃあねっ。」

アルフが去った後、アリサがアルフに対して文句を言いまくったのは言うまでもない。

あの日から俺に語りかけてくる奴の声が聞こえなくなった。

あの日から俺は、ある夢を見るようになった。

あの日から俺は大切な人と他愛も無い日常を過ごしていた頃の夢を見るようになった。

あの日から・・・

あの日から・・・

あの日から・・・

そして今日から

俺は葬儀屋の自分を葬儀屋として葬儀屋だからこそ葬ることにした。

俺は転生した。だから俺は葬儀屋を廃業しようと思う。吸血鬼として圧倒的な力で様々な『モノ』を殺すのではなく、誰も殺さず、ただ長い間、干乾びた状態ひからで時をまたぎ、たまに魂だけを潤った状態うるおにして行動をするミイラとして、俺は生きていこうと思う。

「葬儀屋あああ、温泉がiiiiii湯かああげんだっ たよおおおお。」

「もむもむ、葬儀屋なら何処かに行ったよりユネちゃん。」

部屋を開け奇声を上げる少女の声に応えたのは、灰色包帯神父服のミイラではなく、つい最近ミイラに後ろからナイフを刺した犬耳尻尾の少年もとい男の娘だった。

犬耳尻尾の少年は旅館の浴衣を着てトウモロコシを食べながら外の景色を楽しんでいた。

「そおおなああああんだあ。行くとおおおきにいいなあにか言っていたあああ？」

その質問に少年はトウモロコシを食べながら答える。

「もむもむ、葬儀屋にやら客が来たって言っていたよ。」

「？ にやら？ 今ああ噛ああんだあ？」

リュネといわれた少女はその言葉を言うと、少年は顔を赤くして可愛らしく唸りながらトウモロコシを食べるスピードを速めた。

ミイラは理解していた。もう気付かれていると。俺が転生したことが簡単に気付かれていると。

「葬儀屋、上からの命令だ。今すぐ組織に戻れ。拒否権は無い。」

林の中、特殊部隊のような男達が連射系の銃器を持ちミイラをぐるりと囲むように立っていた。

「いいのか、基本ばれないようにしている組織。俺一人のためにこの人数、時空管理局に組織の存在がばれるぞ。」

ミイラは冷静に神父服のポケットに両手を入れて立っていた。

「葬儀屋、我々はただ与えられた任務を昔の貴方のように遂行するだけだ。我々は人形、逆らう事はしないただの人形だ。」

「俺はやることを決めている。葬儀屋は廃業する。組織の十三番目の実力者《死を運ぶ者》という地位も要らない。これからは最高の実力者《希望を与える者》に十三番目が誰になるかを決めてもらえ。」

これ以上話す事は無い。ミイラはそう決めるとポケットからタバコ

とライターを取り出した。

「残念です。貴方だけが死の線や点が無い不老不死を殺すことのできる貴重な存在です。殺しはしませんが武力を持って貴方を捕縛します。」

その言葉と共にミイラを囲む男達は銃を構え、鉛の嵐を作り出した。

《過去》

ゲシュタルト・ブレイク

「意味性の崩壊、君の力は素晴らしい。手で触れたものを壊すと念じただけで壊す事のできる。直死の魔眼など見劣りするほどのものだよ。」

白いスーツを着た初老の男はようやく欲しかったものが手に入った子供のように笑いながら目の前の十一歳の男の子を見ていた。

その男の子は初老の男に興味が無いようで、何の感情も無い瞳で一枚の写真を見つめていた。

「君は今日から我々、『ホープレス・ワールド夢の世界』の一員だ。」

「人間には・・・興味ない。なあ、知ってるか。死体って美しいんだ。死体は生きた証、唯一嘘をつかないんだ。」

右手に持つ家族の写真を握りつぶしながら葬儀屋になる前の小年はその瞬間、誰に向けるでもなく言う。屈託の無い笑顔で。

「死に方が語っているんだ。そいつがまともなのか狂っているのか、大切に思われているのか恨まれてるのか、幸せだったのか不幸だったのか。だから美しいんだ、死体というのは。」

その言葉を聞き初老の男、最高の実力者《希望を与える者》は笑いながら言う。

「小年よ、楽しみだ。なら作り出してくれ。君の美しいと思うものを君が死ぬまでずっとな。」

《過去》

「美しい、本当に死体は美しい。赤に彩られる体、開花する頭、溢れ出す臓物。これが生きた証、生命の生きた証だ。もつと見せてくれよ、なあ!!」

林の中、そこは一面が赤一色になっていた。返り血を浴び続けた葬儀屋は冷めた心で興奮していた。

「なあ、そうだろ。誰か返事してくれよ。俺が馬鹿みたいじゃないか、こんなに美しく彩っちゃってさ。」

周りの死体は一言も喋らない。葬儀屋は空を見る。空だけは青く染まっていた、ミイラとは対称的に青く青く。

「いつもいつも誰も答えないでさあ・・・誰か教えてくれよ。俺の作った死体は美しいのか。誰か教えてくれよ。他人が作った死体なら俺が教えられるからさあ。俺が作った死体を誰か評価してくれよ。」

頼むよ、誰か・・・」

葬儀屋はただナイフを持ち空を見て、冷めた心で興奮しながら涙を流した。

《現在》

「葬儀屋、何のつもりだ。」

相手の言葉にミイラはタバコをの煙を吐き出していた。神父服は絶対防御なので衝撃だけが伝わり一発も体を貫通していなかった。

「俺には自分が決めたルールがあつてな、必要が無い時は死体を作らない。自分が作った死体に対しては絶対に興奮しない。そんなルールだ。」

そう言うと、タバコを吸い、また煙を吐き出してから言葉をつむぐ。「自分が作った死体は誰も評価できないからな。そんなの、ただ虚しいだけさ。」

「我々は人形だ、そのような難しい事は何も考えない。葬儀屋、最終警告だ。迅速に組織に戻れ。」

タバコを吸い切り、吸殻を右手で握りつぶし、また右手を開くとそこには一匹の蝙蝠が眠そうに羽ばたいた。その蝙蝠は空中の一定の場所^{とど}で留まると、次の瞬間には破裂し、霧散した。

その様子を見てミイラを取り囲む男達は一瞬で何処かへ転送された。
「空気感染・・・モドキ。」

ミイラはポツリと呟く。彼らはミイラに対して対策をしてきたみたのだが、空気感染はミイラの血液を蒸発させて発動させる技である。たった今破裂して霧散したのは蝙蝠になったタバコの吸殻であった。
「・・・次は同じ手は通用しないだろうな。まったく、今回の作戦の指揮をしてる奴は絶対に嫌な性格のタイプだ。俺が人間以外には優しいのを絶対知つての人選だ。」

今回の襲撃者は全員男だったが、一貫してある特徴がある。それは全員が背中から歪な七色の透明感のある羽が生えていた。それはまるでトンボの羽のようだった。

「飛べない蜻蛉^{アン・フライ・ドラゴンフライヤーズ}達の集団か・・・奴らも俺を引き戻すのに必死ということか。」

ミイラは深いため息を吐き旅館へ足を向ける。

「どこで俺が転生した情報を手に入れたかは知らないが、こんど情報屋に奴らに対する対策を含め相談するか。それと・・・」

そう言いながら、懐から玩具^{おもちゃ}の拳銃を取り出し、ある方向に一発だけ蝙蝠《弾丸》を撃ちだす。

「いつからそこに居たのかは知らんが、隠れるのは止めた方がいいんじゃないか。」

そう言うと、その言葉に葉っぱ生い茂る木の中から金髪の少女、フエイト・テストロッサがゆっくりと地面に降り立った。

フエイトの両手にはバルディッシュが握られていて、警戒の色が強くうかがえる。隙あらば一撃叩き込む、そんな様子であった。

そんなフエイトにミイラは玩具の拳銃を構えた状態を保ち、優しく

笑いながら言う。

「met・また会ったな。まあ・・・俺に攻撃をするという考えは止めた方がいい。白い魔道師を倒した腕はそこそ認めるが、君では力不足だ。俺には勝てない。」

「met・また会ったな。まあ・・・俺に攻撃をするという考えは止めた方がいい。白い魔道師を倒した腕はそこそ認めるが、君では力不足だ。俺には勝てない。」
フェイトは当然の如く警戒をしていた。警戒しない方が可笑しいのだが。

「・・・貴方も、あの人達もジュエルシールドが目当てなのですか。」
ジュエルシールド探しをしているフェイトにとつては重要な問いかけである。相手の返答次第では戦闘は避けられない。

その事を理解してか、相手は優しく笑いながら答えた。
「石には興味ないが、必要なら集める・・・という程度だ。俺は集めないから安心しろ。それとあいつらも同じだから。」

その言葉にフェイトは一瞬、安堵の表情を浮かべた。

「だが、先程のやり取りを見られたのは見逃せないがな。」

そう言うと、ミイラは玩具の拳銃の引き金に力を入れる。フェイトの顔がこわばるが、弾は出なかった。

「なんてな、冗談だよ。それより一つ聞きたいが・・・」

そこで、相手は真顔になり一つの質問をする。

「俺の蝙蝠からの目がおかしくなければ、こちらの連れと戯れてる獣っ娘はお前の連れか？」

「ふえ？」

いきなりの質問にフェイトは間の抜けた言葉を出した。

その頃

「どうしてこうなったんだろう。」

犬耳尻尾の少年、リリオは使い魔^{アルフ}と食鬼人^{リュネ}のぶつかり合いを見ていた。卓球のぶつかり合いを・・・

「おねええええさあああん。なあかなあかだねえ、びっくりしちやああうよおお。」

「軽口を叩けるのも今のうちだ。私が勝ったらあんた達が一体何なのか教えてもらうよ!!」

「出来るのをおおお？おねええさああんに出来るのおおお？」

アルフのスマッシュにリュネもスマッシュで返す。もはや玉は卓球台に落ちず、残像すら残すスピードで返しあっている。

「もはや卓球じゃないよ、うう。」

リリオの言葉は二人には届かない。そもそも急に部屋にアルフが入ってきて何故卓球勝負になったんだろう。

「葬儀屋あ、早く来て何とかしてよお。」

リリオは泣きたくなってきた。他の旅館客の視線が痛い。その視線に同情するかのように一匹の蝙蝠がリリオの肩にとまった。

この五分後、ようやくミイラと一緒に旅館に入る予定の無かったフエイトがやってきた。その時にリリオはこう思った。

（あれっ、葬儀屋と一緒に来た少女、なんで人間なのに優しく接っされてるんだろう？）

いつものミイラはほとんどの人間に対しては興味がなく、ほぼ無視したりするのに今のミイラは明らかに違う。こころなしか優しい雰囲気すら感じられた。

（何かあったのかな。）

リリオはそう思うが、彼は知らない。実際には何も起きてないと。何も起きてないのにミイラは優しく接していた。

海鳴温泉 ミイラは決意と自分のルールを口にする（後書き）

妖気「なんでフェイトに優しく接してるんだ？クローンでもお前にとつては人間だろ。」

ミイラ「そうだな、しいて言うなら俺の気まぐれだ。」

妖気「そうか、言いたくないのか。」

ミイラ「まあな。」

妖気「じゃあ、その話は置いて、解説コーナーに行きましょう。」

アン・フライ・ドラゴンフライヤーズ
飛べない蜻蛉達の集団

背中にトンボの羽が生えた種族で作られた部隊。

トンボ人種

背中にトンボの羽の生えた種族の総称

恐れるべきは、羽が生えてる状態ではなく破れた状態のときである。羽が破れると飛べなくなるが、新しい羽が再生されるまで自我を失い

筋力とスピードが格段に上昇し相手を狂ったように攻撃する狂人モードになる。

なお、シルバー族だけは羽が破れると体が痙攣し、まったく動けなくなる。

その特徴のためシルバー族はドッグナー犬人種と同じ奴隷扱いである。

ミイラ「それで、おれにこの解説を聞かせてどうしと。」

妖気「とくにどうもしないよ。これは読者様の為に書いた解説だから。」

ミイラ「（・・・シルバー族か。）」

妖気「なんか言ったか？」

ミイラ「いや、何も。」

ごめんな、死なせてしまって。少しの間だけ休んでくれ。その頃には全て終わって
守りきれないなら、守らなければいい。
少し前までの俺ならそう思っていた。

なあ、教えてくれ。
なんで俺はこんなに変わってしまったんだ。
やはり考える事が出来るようになったからか？

なあ、教えてくれ。
目の前で知り合いが死んだ時、俺は頭が真っ白になった。
真っ白なはずなのに、俺は冷静に動いているんだ。
やはり葬儀屋としての俺がまだ生きているのか？

なあ・・・教えてくれ。
なあ・・・答えはどこにあるんだ。

「ごめんな、死なせてしまって。少しの間だけ休んでくれ。その頃には全て終わっ

《？》

情報屋ルシフィの元に部下からの二枚の報告書が入ってきた。

「転生者が海鳴温泉にてトンボ人種の集団と接触、転生者はトンボ人種達を撃退した後、偶然そこに現れた少女と接触、仲良くなるつと。」

そして二枚目を捲^{めく}ると、情報屋は深いため息を吐きながら外へ向かう。

「山猫、これから仕事に行ってくる。留守番を頼んだぞ。」

「分かりました、お気をつけて。」

そして、情報屋は海鳴温泉へ向かう。

二枚目の報告書にはこう書かれていた。

ホープレス・ワールド

夢の世界の元幹部、葬儀屋に対し復讐者達は襲撃をかける模様。

また、葬儀屋と和解した少女と小年も襲撃の対象となっている。

この襲撃が実行される場合、旅館の宿泊客及び従業員の多くが死亡するのが予測される。

決行は夜。人数は四十七人。武装は衛星ミサイル。

《海鳴温泉》

「ねえ、あの人凄い格好だよ。」

旅館の中を歩いていたなのは、アリサ、すずさの三人は、アリサの声にある一点を見た。

その人は椅子に座り深くため息を吐いていた。

その人は灰色の神父服に顔には右目以外を灰色の包帯を巻き、セミ

ロングを逆立てたような髪形をしていた。
その人を見たなのはとユーノはがっかりと固まってしまった。
そんなのはとユーノに気がついたミイラは足早に立ち去った。下
手に声をかけて話をややこしくしない。一応ミイラは空気が読める
方だった。どうかの執務官と違って・・・

「へぶしっ。」

「どうしたの、クロノ執務官？」

「いや、誰かに悪口を言われたような・・・」

（ユーノ君、さっきの女性といいミイラさんといい、何か起こるかも。）

（僕もそう思うよ、なのは。）

「どうしたの、なのはちゃん。」

すずかの問いかけになのはは顔を無理に笑顔にして答える。

「ううん、何でもないよすずかちゃん。」

「なのは、顔が引きつってるよ。」

当然、アリサに突っ込みを入れられた。

なのは達から足早に立ち去ったミイラは自分の宿泊している部屋に
戻ってきた。

「フルハウスだよ!!」

「ロオオイヤアルストオオレエトフラッシュウウウ!!」

ミイラは扉を閉めて何も見なかったことにした。

さて、タバコを買いに行くか。別にアルフとリュネが激しいポーカ
ーでぶつかり合い、その衝撃がリリオに当たり流血沙汰になりフェ
イトがオロオロしているを見て面倒くさいと思った訳ではない。た

ぶん・・・

というわけでタバコを買いに売店に行ったのだが、なぜかタバコは全て売り切れていた。

「まあ良いか。」

ミイラはそう言うのと立ち去ろうとした。そこへ、一人の男が現れた。「お客様、ここに居ましたか。」

「ん？ ああ、情報屋か。いい所にきた。タバコと俺が転生したのをリークした奴の情報が欲しいのだが。」

すっかり情報屋を認めたミイラは情報屋に商品を買おうとしたが、情報屋は真面目な顔で話を切り出した。

「今夜、貴方を狙う復讐者達がこの旅館を襲撃します。」

「・・・その話、詳しくお願いできるか。」

「ええ、もちろんです。」

そして、二人はミイラの泊まる部屋に来了。そこでは相変わらずな光景が広がっていた。

「貴方は私いいいいには絶対に勝てなああい！！」

「もう一回、もう一回だ！！」

「うう、頭が痛い。」

「アルフ、もう止めた方が。」

騒がしい部屋、ミイラは四人に対し口を開く。

『静まれ。』

いつものミイラと違う、低く重圧のある声で、四人とも魔法に掛かったかのように静まり返った。

「細胞と魂の両方から束縛をかける、なんとも凄まじい技で。それとお客様・・・この場合テストロッサ様、ジュエルシード集めは^{はかど}捗りますか。」

「「！」」

突然の情報屋の登場にフェイトとアルフは目を見開く。

「情報屋、お前の顧客って幅広いな。まあ、それは置いておいて、じゃあ二人とも、この情報屋の人と重要な話があるからちよつと外へGOしてもらおう。」

そうミイラが言うと、フェイトとアルフの二人は体が勝手に動くかのごとく部屋から出て行った。フェイトとアルフは何で体が勝手に動くのか分からないので、ミイラは後で能力の説明をしてあげようと誓った。

「そういえば、お二人は復讐のためにそこのお客様の命を狙っていたんですよね。」

ミイラと情報屋が重要な話を終らせると、情報屋はふと少年と少女に質問した。

「そおおうだよお。」

「うん、そうだった。」

その返答に情報屋は質問する。ミイラはそそくさと部屋を退出する。「じゃあ、なぜ一緒に居るんですか？」

二人はそれぞれ答えを返す。

「葬儀屋があ、私と一緒にいいいい、おねえちゃあん達の墓に行つてえ、土下座して謝つてえくれたああああ！！」

「約束してくれたんです。僕達を救ってくれると。」

その答えを聞いて、思わずニヤついてしまう情報屋。

「なるほど、お客様。その話、もっと詳しくお願いできますか。」
情報屋がミイラの方へ視線を向けると、そこには誰もいなかった。

「・・・お客様が逃げた。」

「あんな恥ずかしいの、俺の口から絶対に言えない。」

ミイラは温泉に入っていた。着ている服及び包帯を全部脱いで入浴しているミイラの体格は、普通の高校生の肉体そのもので、しかし普通と違う所が一つあった。

全身にかけて、傷跡がびっしりと刻まれていた。なのは父の傷跡とは比べ物にならない位の。

銃痕や刀傷はもちろんの事、背中を包み込むような火傷の痕、抉^{えぐ}られたような痕すら多くある。一体どんな人生を送ればこんな体になるのか不思議に思う。

しかし、顔には傷が一つもなかった。そこだけは死守した、そんな風にもうかがえる。

平凡で優しそうな顔。表すならこんな言葉がぴったりの顔だった。その顔と体のギャップがあまりにも大きすぎて、温泉に入っていた旅館客の好奇の視線が向けられてるがミイラは気にしないで傷跡だらけの体を洗い温泉に浸かった。

「はあ・・・温泉なんて七年ぶりだ。最後に入ったのはアイツとの混浴だったな。」

アイツとはミイラの大切な人だった。今はもう死んだミイラの大切な人。ミイラが生前家族を失い葬儀屋として過ごす事となった出来事に巻き込まれた人。

「混浴、あんな格好で混浴・・・」

「パパ、あれも男の勲章？」

「練太、あそこまで傷は作らなくていい。」

なんか外野がうるさいがミイラは気にも留めず温泉に浸かっていた。

「混浴、あんなのが混浴だなんて・・・」

「パパ、僕は将来あんなふうになるよ。」

「練太、公務員になりなさい。」

さて、すぐ湯船に入ったが調度良い位に体が温まった。そろそろ出るしよう。

別に視線が痛いわけではない。ただ、体が温まっただけである。さて、夜に備えて休んどくか。俺はまだ自滅する気はない。

《海鳴温泉 夜 林の中》

「やってるやってる。今回ののは少しは強くなったかな。観戦できないのが残念だな。」

なのはとフェイトが戦っている場所から少し離れた場所、ミイラはタバコを口に咥え蝙蝠こうもりを作り出していた。

「まあ、俺に対する復讐者は情報屋とリュネが何とかしてくれるらしいし、こちらも何とかするか。リリオ、ミサイルの雨はどの位の数だ。」

その言葉に、ミイラの後ろに控えているリリオは泣きそうになりながら答える。

「えっと、三百だよ。葬儀屋、無理だよこんな数。」

その言葉にミイラはタバコを咥えながら答える。

「うさ耳馬鹿の起こした白騎士事件に比べれば少ない。」

そう言いながらも次々と蝙蝠を作り出していく。

「でも、そしたら葬儀屋が。」

「たかが三百、三百匹の蝙蝠で撃ち落してみせる。」

そう言いながら、ミイラの包帯は灰色から赤黒く染まっていく。

「もう腕どころか右の脇腹まで無くなってるんだよ。もし、このまま死んだら僕達犬人種ドクナーはずっと虐げられるままだよ!!。」

「俺の心配はないのか。まあいい、俺が生き延びればいいんだろう。」

「そう言いながら、ミイラは自分の体をどんどん蝙蝠に変えていく。そして蝙蝠を三百匹作り出した時は、右半身と左腕が消えていた。余裕が無いのか流れ出る血を押さえ込む力すら残ってないようだった。」

「はっはは、俺が関係も興味もない人間のために自分の力を使うのは生前も含めてこれが初めてだな。」

自虐的に笑いながら吸殻になったタバコが口から地面に落ちた。

「True。こんなことなら、もっとしっかり温泉に浸かって疲れをとっておけばよかったな。」

「葬儀屋、それ、死亡フラグだよ。」

そのリリオの言葉に返事をせず、そして三百匹の蝙蝠は降り注ぐミサイルの群れに突っ込んでいった。

最後の一匹がすら見えなくなったとき、ミイラはゆっくりと後ろに倒れこんだ。

そして夜空はミサイルの爆発の連続により明るく照らされたが、ミイラの空気感染により殆ど^{ほとんど}の人・・・普通に生活する一般人やアメリカや中国など各国の首脳等の地球に住む一般の人達は気付く事はなかった。

「何、あれ・・・」

なのはは少し離れた場所、いきなり現れた黒い群れと、その後の夜空を明るく照らす爆発に驚いた。フェイトも同じように驚いて戦いは一時中断になっていた。

しばらく二人とも動けないでいると、異常が起きた方向の茂みが揺れ、そこから犬の耳が生えた一人の少女らしき人が現れた。

その瞳からは涙が流れており、こちらに向かって歩いてきた。

「リ、リリオ君、どうしたの。」

先の一件もあり面識があつたフェイトはリリオに声をかけた。この時点でもはや二人は戦闘どころではなくなった。

そして、その少女のような少年はフェイトの言葉を皮切りに泣きながらなのはとフェイトに助けを求めるために口を開いた。

「ひぐつ、葬儀屋を、葬儀屋を、た、たず、うつ、助けてください。うああああ!!」

そのまま、リリオは泣き崩れた。

「何が何なのか分からないけど、リリオ・・・ちゃん。葬儀屋さん

が大変なんだよね。その人の所へ早く案内してくれる。」

そんなリリオに優しくなのは語りかけた。基本事項として高町家はお人よしである。

「急ごう、じゃないと出遅れになるかもしれないから。」

フェイトの言葉と共に泣き崩れたリリオが何とか立ち上がり二人を案内した。フェイトも本当は優しい子である。

「馬鹿・・・さつさとどつかに・・・行け。」

三人が来たたんミイラは苦しそうに呻うめきながら拒絶の言葉を発した。

「そんな・・・そんな言い方って、リリオちゃんは貴方を助けたくて、ここまで。」

なのはとフェイトは最初、重傷で仰向けに倒れているミイラを見て色々な意味で驚いていたがミイラの拒絶の言葉を聞くや抗議の声をあげた。

その言葉にミイラは深く息を吸って、吐き出すと共に苦しそうにながら言葉を返した。

「そう、だな。リリオ・・・悪かった。だから、早く・・・二人を連れ、て逃げる。」

「逃げろとはどういうことですかミイラさん。」

フェイトの質問にミイラは答えを返す。

「失敗、だ。リリオ、なのは、フェイト。巻き・・・込まれる。早く・・・逃げてくれ。」

その言葉と共に、ミイラ達を囲むように様々な武器を持つ人が現れた。

「だれ、この人達。この人達がミイラさんを？」

なのはの言葉に対し、ミイラは言葉を発する。

「いや、違う。それ、より・・・リリ、オ。相手は、何人だ。」

「二十人・・・だよ、葬儀屋。」

「情報屋と・・・リユネ、二十七人、も引き受けてくれたか。上出来だ。」

そして咳き込みながらミイラは三人に対して声をかける。

「ごほつ、さあ、三人は・・・逃げてくれ。後は、俺が片付・・・ける。あいつら・・・は俺が、ごほつごほつ、狙いだ。無関係、な人を、殺すほど、鬼じゃ、ない・・・はずだ。」

そう言うのと、ゆっくりとゆっくりとミイラは立ち上がる。

「ミイラさん！？　ダメ、休んでて、私達が何とかするから。」

「うん、その白い子の言うとおり、ミイラさんは横になってて、これ以上下手に動くと死ぬよ。」

二人の魔法少女はミイラを守るようにデバイスを構えて立つ。リリオも何とか落ち着きを取り戻し、敵の集団にから守ろうとしていた。三人はミイラを守ろうと決意する。

だが・・・そんな三人の決意を砕くかのように、ミイラの目の前で三人は地に倒れ付した。

「な・・・。」

赤い水が、三方向からミイラに向かってくる。

「何を言ってるんだ馬鹿が、お前に関係してる、その時点で関係者なんだよ。」

十四人、十四人の人間達がミイラ達に近づき、六人が三人の少年少女に対し一撃を入れていた。

「バリアジャケットを身を纏っても子供は子供だ。どうだ、葬儀屋。知り合いが傷つけられる感想は。お前がやった事と同じだ。」

ミイラは何が起こったのか理解出来てなかった。そして、ミイラは知らなかった。情報屋は一つの重要な情報を言い逃していた事に。この復讐者たちはミイラの関係者ならば全員殺すということを。

「あのミサイルは囷だったんだ。お前はミサイルを打ち落とした後、混乱してる俺達を捕まえようとしたが残念だったな。」

「あ・・・ああ。」

そう、手はずではミサイルを防がれて混乱する復讐者達を一気に一

網打尽にする予定だった。だが、実際は一網打尽に出来ず、さらに三人も致命傷を負ってしまった。今三人は痛みで気を失ってるか、死んでいた。

「情報屋と食鬼人の少女はきちんと足止めしてますよ。後は、満身創痍のテメエを殺すだけだ!!」

その言葉と共に、ミイラの足に流れ込んできた紅い水が付着した。ああ、俺が転生するときもこんな光景だったな。あれ？　なんで三人とも倒れてんだ？　俺は何もしてないのに何でなのとはとフェイトは死んでるんだ？

「力」

死体 死体 死体 死体 死体 死体 死体 死体 死体 死体
死体 イイイイヒ ャツ ハ アア アア アア アア

「どうした葬儀屋、お前は人間に興味がないんだよな．．．ああ、そうか。奴隷が居たな。ドックナーの奴隷がな。」

明らかに優位に立つてる。そう思っている復讐者達はそろそろ止めを刺そうとして一人の男が空に飛んだ。

「んな？」

その男は今までミイラに言葉を發していた男だった。間拔けな声を出して空を飛んだ男が最後に見た光景は、どうやってかいつの間にか体を再生したミイラが満月をバックに右手を突き出してゐた姿だった。

誰もいない情報屋の部屋。その部屋のレポート用紙の一枚が風により捲れ、文字が現れた。それは僅か一行だった。

《ゲシュタルト・ブレイク》
 全てを崩壊させる神をも殺す力。

ごめんな、死なせてしまって。少しの間だけ休んでくれ。その頃には全て終わっ

・・・答えなんて無いさ、どこにもな。

自分で間違いを正解と肯定する。

神ですらそうする。

だから・・・世界はそんな場所なんだ。

だから・・・答えは無いんだ。

だから・・・自分で間違いを見つけるんだ。

自分が納得する間違いを・・・

ミイラは子供達のため 情報屋は大切なお客様のため（前書き）

俺は転生前は多くの人を殺してきたし見てきた

だからかな、俺は人の死が美しいと思うのは

だから、俺は狂ってると思う

普通は、知り合いが死んで悲しいと思うはずだ

俺は知り合いが死んで、死んで、死んで、死んで

死んで死んで死んで死んで死んで死んで死んで

美しいと思った。興奮もした。俺は狂ってる。

他人が殺した死体が、どんな美味いタバコよりも俺を惹きつける。

だから、俺は狂ってる。

そんな狂ってる俺に好意を抱いていた奴が転生前に一人いた。

たしか名前は・・・

ミイラは子供達のため 情報屋は大切なお客様のため

《海鳴温泉 林の中》

地面に落ちた男は二度と動く事はなかった。

「レ、レイフェ・・・レイフェがやられたぞ！！」

仲間が死んだ。その事実が復讐者達に降りかかり、復讐者達はミイラを見据える。

「カカ、カカカカカ。」

狂ったように声を出すミイラは姿勢を低くするとそのまま勢い良く走り出した。

「こいつ、素手で俺を殺せると思うな！！」

ミイラの標的になった男は両手に持つ銃で迎え撃つが、銃弾が当たる直前で体に当たる部分だけが霧散し弾が当たる事はなかった。

「カカカ、カカカカカ。」

「マジかよ・・・。」

そして、ミイラの右手が標的になった男の腹部に当たり、男の全細胞の機能が崩壊し生命活動は停止した。

「カカカ、カカカカッカカカカッカカカッカカッカカッカカ。」

その姿を見下ろしながら、ミイラは奇声を上げ次の標的を探すかのように周囲を見回した。

ユーノとアルフは突然途絶えたのはとフェイトの魔力に焦りを感じて現場へ向かおうとし、そんな二人の目の前に立ちふさがるように車椅子に座ったパジャマ姿の女の子が現れた。

「この先には行ってはダメ。貴方達は今すぐ立ち去ってください。」

「行けば貴方達は絶望します。だから立ち去る事をおすすめします。」

「

「白い子に黒い子が出遅れです。だから立ち去ってください。」
次々と発せられる言葉に対し、一貫しているのは立ち去る事を催促さいそくする言葉だった。

だから二人は目の前の少女に対し拒否の言葉を吐き出す。

「そう言われても、向こうにはなのはが居るんだ！！ 邪魔をするなら力ずくでも通つていく！！」

「そのフェレットの言うとおり、私達は何があっても行かなくちゃ行けないんだ！！ 早くどかないとガブツといくわよ。」

その言葉に、車椅子に座る少女は『仕方ないです』と呟き立ち上がる。

立ち上がった瞬間、パジャマ姿の少女の皮膚や筋肉がほとんど落ちていき最後に残ったのはパジャマを着たガイコツとその足元に広がる皮や内臓や血液などの人間のパーツだけだった。

「私を倒せたら、どうぞ進んでください。」

その言葉と共に、ガイコツの足元の人間のパーツがグニグニとグロテスクに動きながら生理的に戻しそうになっているユーノと何とか堪こたえているアルフに向かう。

「そして、葬儀屋を殺してください。同僚である十二番目の実力者《生命に憧れる者》としての望みです。」

十分が過ぎ、捕まえた二十七人もの復讐者達をリユネに任せてミイラの元へ急ぎ向かった情報屋が見た光景は、気を失って倒れているアルフとフェレットであった。

「何があつたんだ、二人とも気を失って倒れてるなんて。」

目立った外傷がない事から、これをやった相手はかなりの実力者である事に気付き情報屋はため息を吐く。

「くそっ、これだから現状が分からないのは怖いんだ。」

そう言いながら気を失ってる二人を保留し、ミイラの元へ向かうとしたら目の前に車椅子に座ったパジャマ姿の女の子が現れた。

「ここから先は行つてはダメ、すぐに引き返しなさい。」

「貴方はこの先にある惨状に絶望する。だから立ち去る事をおすすめします。」

「葬儀屋はもう出遅れです。だから立ち去ってください。」

次々と発せられる言葉に、一貫しているのは立ち去るのを催促する言葉だった。さいそく

だから情報屋は目の前の少女に対し拒否の言葉を吐き出す。

「復讐者達がこの事件を引き起こしたのは俺が原因でもあるんだ。

つまり早い話がケジメだ。すまんが通らせてもらう。」

その言葉に、車椅子に座る少女は『仕方ないです』と呟き立ち上がる。

立ち上がった瞬間、アルフとユーノの時と同じくパジャマ姿の少女は皮膚や筋肉がどんどん落ちていき最後に残ったのはパジャマを着たガイコツとその足元に広がる皮や内臓や血液などの人間のパーツだけだった。

「私を倒せたら、どうぞ進んでください。」

その言葉と共に、ガイコツの足元の人間のパーツがグニグニとグロテスクに動きながら目を細める情報屋に向かう。

「そして、葬儀屋を殺してください。同僚である十二番目の実力者《生命に憧れる者》としての望みです。」

「残念ながら、お客様を殺すのは俺の選択肢にはない。」

その言葉と共に、ガイコツの足の骨は砕けた。

「俺の今の選択肢は一つ、お客様の助けに行く事だ。」

その言葉と共に、ガイコツの腕の骨が砕けた。

「私の体が、砕けていく。意外と素早いですね、情報屋さん。」

あまりの速さにガイコツは情報屋を素直に賞賛した。そしてそのまま地面に落ちようとしていたガイコツを情報屋は上手くキャッチし、車椅子に座らせた。

座らせると同時、人間のパーツは一つの場合に戻ろうとせわしなく動きガイコツに集まった。

「情報屋である私の調べによりますと、貴方の体のパーツは触れると酷い状態異常を引き起こす。貴方は他の幹部の支援が役割だったはずです。なぜ、一人で来たのですか。正直言って貴方だけでは無謀でしたよ。」

その言葉に、ほとんどのパーツが集まりきった少女は自虐的に笑いながら答えた。

「私は、葬儀屋さんが好きでした。こんな醜^{みにく}い姿を見ても葬儀屋さんは優しく接してくれました。だから、彼が苦しむ姿を見たくない。こんな理由でどうでしょうか。」

その理由に情報屋は納得した。実際に転生前は、ほとんどの人間からは嫌われていた葬儀屋だったが、それ以外には好かれていた。だから車椅子に座る少女もこのパターンであっただけであった。

「つまり、独断で来たのですか。あの組織とも付き合いが長いですが、ほんとに幹部達は自由に動きますね。」

「それがあの組織の善い所ですけどね。知ってますか、葬儀屋さんは幹部の人全員に能力を抜きにして必要とされていた、好かれていたんですよ。」

その言葉に情報屋は一瞬思索し、その後軽く笑った。

「何が面白いんですか。」

「いやいや、お客様は言ってたんですよ。転生前の自分は命令を聞くだけの人形だった、だからみんなは俺を物として必要としていたと思う。だからかな、こんな簡単に何も思わずに人を殺す俺に幹部達は気軽に話しかけてくるんだ・・・何て言ってたんでね。」

その言葉を聞き、少女は悲しそうに目を伏せる。

「葬儀屋さんにはそう見えていたんですか。少し、悲しいです。だからかな、転生した後、戻ってこないのは。」

悲しそうに呟く少女に、情報屋向こうを見据える。向こうは銃声や爆発音が連続して響いてくる。

「なら、一緒に行きませんか。転生前に所属していた組織でも、他の幹部達から好かれていたと分からせるために。」

その言葉に少女は一瞬驚き、その後クスリと笑いミイラが居る場所を見据える。

「そうですね、じゃあ両手両足の骨は砕かれましたのでエスコート
お願いします、情報屋さん。」

「分かりましたお客様。では参りましょう。」

ミイラは夜空に奇声を上げていた。

「カカ、カカカッカッカッカカカカ。」

復讐者達の半分は既に死んでいた。残りの半分も死んでいた。

「カカカ、カカカカ。」

そして、その奇声を上げていたミイラに声がかけられた。

「お客様、少し落ち着いてください。」

いつの間にか現れた情報屋が両手に自動拳銃を二つ構えていた。

「カカ、カ。」

ああ、声が聞こえる。声が聞こえた。

「カカ、カカカカ。」

ミイラは姿勢を低くして走り出し情報屋にたどり着くと右手を突き出した。

「おわつと、お客様。いい加減にしないと本気を出しますよ。」

「カカ。」

ああ、回避された。なんか言ってるがどうでもいいや。冷静に冷静に相手の動きを見て、倒せばいいんだ。

ミイラは真っ白な思考でいったん距離を取ると、姿勢を低くして情報屋に再び駆け出した。

「十二番目！！、今です。」

情報屋とミイラの距離が五メートルになったその時、情報屋が叫ぶと情報屋の後ろから人間のパンツが飛び出てきた。

「カカカ、カカカ。」

ああ、何かが飛んできた。予想は出来てた、だから後ろに退こう。

「退かせません。」

いつの間にか、後ろからも横からも人のパーツが飛んできていた。

ああ、流石に予想してなかった。

まあいいや、時間は稼いだ。

ああ、悩んだけどやっぱり力を使った。

さあ、さつさと逃げてくれ三人とも。俺は眠るよ、疲れた。

ああ、この飛んでくる物。懐かしい感じがする。

ああ、あの組織でいつも一人で寂しそうにしていた、それでいて俺が話しかけると嬉しそうに笑い返してくる、あの娘の感じがする。

俺は旅館の一室で目を覚ました。

「・・・重い。」

当たり前である、パジャマを着た少女とリリオがミイラの腹の上に頭と腕を乗せて眠っているからである。

「懐かしい。でも何で居るんだ、十二番目。」

少し考えたが、良く分からないので考えない事にした。

そして、リリオの様子を見てミイラは安堵の息を漏らす。

「まあ、リリオの怪我が消えてるといふ事は、なのはとフェイトも何とかなったということか。良かった良かった。」

「良かないですよ。」

その言葉に首だけ動かして声のほうを見ると、そこには情報屋が居た。

「あの後、大変だったんですよ。何故か蘇った二人の少女が倒れて気を失っているミイラを見て色々大変なことになったし、フェレットと使い魔は錯乱状態になって今は薬で抑えてますし、今回の事件を起こした内の半分が死亡して、その処理をしたりで色々大変だったんですよ!!。」

「う、うう、ん。」

珍しく大声を上げる情報屋の声に十二番目の実力者「生命に憧れる

者』は目を覚ました。

そして、ミイラと目が合った。

「あ・・・久しぶり、です、葬儀屋さん。」

「そうだな、十二番目。」

そんな二人に情報屋はため息を吐き、ミイラには後で旅館の裏手に来てくださいと言って立ち去った。

「・・・あの。」

少女は情報屋に言われた言葉を思い出し、誤解を解くために少女は言う。

「私も含めて幹部達は、あなたの事を道具としての好きではなく、人として好きだったんだよ。」

その言葉を聞き、ミイラは一瞬だけ驚いた後、何とも無いような顔をした。

「そうか・・・それだけ？　じゃあ、ちょっと情報屋と相談する事があるから。」

その淡白な言葉に少女は面食らった。

「あれ、葬儀屋さん？」

「どうした、他に何か。」

リリオを起こさないようにズラしながら立とうとしていたミイラは返事する。

「いえ、だから、つまり、私達にそう思われていたから組織に戻ってこなかったんじゃない・・・」

その言葉にミイラは少し考えてから言葉を返す。

「戻らなかったのは自分がやりたいことを見つけたからだ。それと、まあなんだ、俺を人として見ていてくれたのは意外だったな。ありがとうと組織の幹部達に伝えてくれ。」

そして、ミイラは立ち上がって部屋を出た。その姿を見送った少女は、淡白すぎるミイラの反応に悲しくて、涙が出て止まらなかった。
「・・・葬儀屋さんの馬鹿。もう戻ってこなくて良いよ。」

「まあそんなつれない事を言うな。」

その言葉と共に後ろから抱きつかれた。

「ふえっ？」

「感謝してるんだ、こんな俺をあの組織は拾ってくれたし、それにお前はこんな場所に着てまで俺を止めてくれた。」

部屋を出て行ったはずのミイラが顔の包帯を取って、あの平凡で優しい表情で優しく笑いながら抱きついていていた。

それに気付いた少女は顔を赤くした。

「そ、葬儀屋さん、出て行ったんじゃないや・・・」

「出て行ったよ。まあ、すぐに霧化して戻ってきたけどね。つまり、本心が聞きたくて意地悪したただけだ。それについては謝る、ごめん。そしてありがとう。」

その言葉に少女は泣きながら、だけど先程までの涙とは違う涙で泣きながら言う。

「うん、どういたしまして・・・あの、向きを変えても、いいですか？」

「ああ、良いよ。」

そう言うとミイラは腕を解き、少女は体の向きをミイラに合わせミイラの胸に抱きつきながら顔を埋めた。

「うう、葬儀屋さんが消えて、寂しかった、寂しかった。なんで、なんで戻ってこなかったの、みんなも心配してたんだよ。」

「・・・悪かった。」

ミイラは優しく少女の頭を撫でる。

「葬儀屋さんが消えてから、私はずっと探していたのに見つからなくて、それでも探して、見つけたら苦しんでる姿で、情報屋さんから貴方の気持ちを聞いて、泣くのを堪えるので必死だったんだよ。」

「・・・。」

優しく、優しく撫でる。少女は泣きながら自分の思いを口にする。

「お願い、だから、戻ってきてよ。お願い、お願いだから。」

「・・・俺は戻らない。」

「なんで、なんで、なの、葬儀屋、さん。お願いだから、ひう、うあああああ！！。」

その言葉を聞き、少女は大きな声で泣いた。ミイラは優しく頭を撫で続けた。

「うああああああ！！　うう、うつ、うあああああ！！」

少女が泣き止むまでミイラはずっと頭を撫で続けていた。泣き止んだ時には少女は疲れたのかミイラの胸の中で眠っていった。

「変わってないな、いつも他の奴らには大人ぶるのに俺だけには歳相応に接してくれる。実を言うとお前だけが俺を人として接してくれたと思うてたんだぞ。」

そう言いながら頭を優しく撫で続ける。

「本当は・・・戻りたいけど、俺は変わってしまったから無理なんだ。変わってないお前が羨ましいよ。」

変わってなかった、俺だけが変わった。だから戻れない。

「だから、しばらくはさよなら。今だけは、ずっと一緒に居るから。だからさよなら、ラフィ。」

「お客様・・・完全に忘れてますね。」

情報屋は旅館の裏手でぽつんと一人、ため息を吐いた。

その後ろには、今回捕まえた復讐者達が一人、また一人と何処かへ転送されていた。

「はあ、お客の文句を言うなら事件が始まる前に何とかならなかったんですか社長。」

復讐者達を転送しながら、復讐者を演じて潜入していた社員は情報屋に文句を言う。

「来月の給料を上げてやるから何も言うな・・・。」

情報屋は盛大にため息を吐きながらミイラが来るのを待った。

結論：結局最後までミイラは来なかった。

高町なのはは帰りの車に乗りながら、旅館での事を振り返っていた。楽しかった思い出、大変だった思い出、色々あった。

だけど、どれも大切だと思う。死に掛けたりしたけれど（注：実際死んでます。）

けど、気がかりな事もある。あの悲しそうな瞳をした少女に名前を言う事ができなかった。

でも、絶対にまた会えると思う。あの時、協力しあえたから絶対に理解しあえると思う。

だから、次は絶対に私の名前を教えるの。絶対に、絶対に。

「なのは、ユーノが怯えてるけど何でかな。」

「な、何でかな・・・」

アリサの質問になのはは誤魔化すように笑いながら答える。

「なのはちゃん、よっぽど怖い目にあつたみたいだよ。」

すずかの的を射た発言に、なのはは気付かれないように顔を平静に保ち答える。

「そう、みたいだね・・・」

なのはは歯切れの悪い言葉であつたのに、アリサとすずかの二人はなのはの異変に気付く事なくユーノの心配をしていた。

ちなみにユーノは車の座席の下の奥でガクガクと怯えていた。

ちなみに、フェイトの使い魔のアルフも同じ状態になっていたのを、なのはは知らない。

ちなみに、色々とフェイトとアルフの世話を焼いている小年が怯えまくるアルフの状態を見て何があつたのかフェイトに聞いてみたが

教えてもらえなくて、しょんぼりしていたのものは知らない。

ミイラは子供達のため 情報屋は大切なお客様のため（後書き）

妖気「なぜ二人生き返ったし。」

ミイラ「神が俺の願いを聞き届けてくれた。」

妖気「・・・お前を転生させたのは神じゃないだろ。」

ミイラ「・・・そうだな、俺にも、よく分らん。」

妖気「顔を逸らしながら言っても説得力が無い。」

ユーノ・アルフ「内臓怖い内臓怖い内臓怖い内臓怖い内臓怖い内臓怖い内臓怖い内臓怖い・・・」

妖気「今日のゲストはユーノとアルフだが、それどころじゃないな。」

ミイラ「ハハハ、ラフィは相変わらずだ。」

妖気「笑い事じゃないし。」

ミイラ「次回も続く。」

ミイラは情報を受け取る 小年は情報を作り出す（前書き）

「おれは、フェイトさんが、傷つく、のは見た、くない。たまには、小年じゃなく、少年として、守る、のも良い・・・だろ。」
笑いながら葵井元樹はフェイトの頬ほおに手を添える。その頬には涙が伝っていた。

「俺は、あんたをどうしても許せない。あんたは俺の母親そっくりだ！！ 血が繋がっていなくても娘だろ、なんで娘の気持ちを知ろうとしない・・・なんで血の繋がった娘まで悲しませる事をする！！」

雷に打たれた平凡な小年は怒りを込めてプレシアに対峙する。

「なあ、この死体って凄く綺麗だな。よっぽど寂しく誰かを待ちながら死んだんだな。」

神父服を着た灰色の包帯の男、ミイラはうつとりしながら言った。

「俺は・・・落ちる。」

ミイラは情報を受け取る 小年は情報を作り出す

《遠見市》

あおいもとしげ
葵井元樹は掃除機で部屋の中を掃除していた。その手際は主婦顔負けである。

「今夜の夕御飯は何にしよう。」

掃除機の電源を切り葵井元樹は掃除機のコードを抜き、定位置に戻しながら呟いた。

「・・・鍋にするか。」

そう言っていると、ポケットから財布を取り出し中身を確認する。

野口が三枚、樋口が四枚、諭吉が十五枚

「今日は豪華に行くか。特上牛肉を買えばアルフさんは喜ぶし、鍋は簡単で栄養価も高いから育ち盛りのフェイトさんにも合性バッチリだし。」

そう言っていると、時計を確認する。時刻は夕方五時、この分だとフェイトとアルフはまだ帰ってこない。

靴を履き、外に行く。鼻歌を交えながら歩く姿は、どこか楽しそうだった。

そして、運命の歯車は回る。

ミイラは空を見ていた。時刻は夜、そして結界が広域に張られていた。

「・・・ジュエルシートを巡りぶつかり合う、か。ロストログアは様々な人に様々な出来事をもたらしてきたが、なんでこいつも戦いが起こるんだろうな。」

ポケットからタバコとライターを取り出しタバコの本を口に咥える。

「興味ない人間なら勝手にやってろだが、知り合いの場合はほつけない。」

ライターを使い火を付ける。その時、街中のある一点で大きな魔力が光り輝いた。その規模は小規模の次元震を起こす程に。

「というか、なのはもフェイトも戦って大丈夫か？ いや、ユーノとアルフの方が危険だな。主にメンタル面で。」

ミイラは心配そうに向こうを見るが、死から蘇ったなのはとフェイトの体は特に問題はなく、ユーノとアルフの精神状態も、なんとか大丈夫な状態だった。

「まあ、心配しても仕方ない。それよりも今はコイツを仕留めるか。・・・それにしても、なんでこう生きるって不条理なんだろな。」

ミイラの後ろには巨大なぬいぐるみの様な化け物もとい魔女が居た。それは、ことは違う魔法少女の世界、知ってる人が見たらマミッタとか言う世界の化け物がいた。

「不条理でもなんでも、世界は平等だよ。特に生き物は美味しいという点で。」

そう言うのと化け物は大口を開けてミイラを喰おうとする。

「それは同感。まだ生き血を啜^{すす}った事はないが、死体から溢れ出る血がもう美しいよな。」

その言葉と共に、ミイラは化け物の口の中に消えた。

「ティロ・ファイナーレだったか。けど俺は普段はアニメ見るより色んな小説読み耽^{ふけ}てたから見てないんだよな。まあいいや。」

化け物の体内から、無数の蝙蝠が弾丸のように飛び出した。

「ぐぎゃああああああああああアアアアあああああ！！」
苦しそうに叫びながら化け物は体をよじらせる。開いた穴からは紅い霧が溢れ出し一つの所集る。

そして、そこには口にタバコを咥えたミイラが立っていた。
その手には玩具の拳銃を持って。

「何故俺を餌に選んだかは知らんが、格の違いだ。お前は毒を食べた、それだけだ。」

さあ、なのはとフェイトの元へ向かうとするか。死に掛けの化物など情報屋に任せておけ。

「ああああああ頂きまーす!!」

化け物の口から脱皮したかのように化け物が現れてミイラに完全な不意打ちで大口を開けて襲い掛かる。

「格の違いだ、ぬいぐるみモドキ。」

そういえば、なのははしっかり思いを告げることが出来るのだろうか。

《? 一時間前》

ミイラ「ぬるぽ。」

情報屋「ガッ!!」

「今変な夢を見た。」

「どんな夢ですか。ルシフィさん。」

山猫の質問に情報屋は目じりを押さえながら答える。

「人格崩壊した夢だ、それより今はどうなっている。」

その質問に山猫は簡素に答える。

「リユネとリリオの二人は病院で葬儀屋を殺害した少女を介護しているようです。」

「ミイラは?」

「高町なのはと接触した模様です。なんでも、アドバイスをしたようです。」

その言葉に情報屋は疑問符を頭に浮かべる。

「アドバイスって?」

その言葉に山猫は嬉しそうに答えた。

「フェイト・テストロッサに思いを伝えるにはどうすれば良いのかをアドバイスをしたそうです。」

《現在》

「これがマゾヒストの極みという事か。」

「うふ、うふふひひ。痛い、痛いよ。なんで、なんなんで痛痛いの、うひひ。」

化け物はあまりの痛みに精神に異常をきたしていた。

「本体が壊されなければ大丈夫なんて、くだらない考えた。逆に死なないから、俺としてはやりやすい。」

ミイラは化け物の本体をあえて攻撃しないで多くの痛みを化け物に刷り込んだ。

「ひゃひゃ、うひひ、痛痛痛いいいい。灰色の包帯は弱くて美味いと聞いたのに、なんでなんで。」

止めを刺すまでもない。だが放置するのも・・・まあいいか。

「わゝシャルロッテ、酷くやられたようで。」

さあ、行くか。多分なのはとフェイトの間で何か起こってるだろう。

「ご、御主人、痛痛いです。助け、助け助け付けて。」

「我慢しなさいシャルロッテ、自業自得です。あれは葬儀屋と呼ばれていた化け物なんですよ。ただでさえ生前は人間なのに転生者を多く葬ってきて、転生後はさらに強くなった奴です。あなたが悪い。」

「でもも、弱弱いくて、お美味しいってえええ。」

「あれ、嘘です。」

御主人の嘘つきいいいい！！ という叫びが聞こえた。

「そこ、うるさい。それに女、ペットの躰はしっかりやれ。」

ミイラは振り返りながら静かに言った。そこにはアハハと笑いながらシャルロッテを撫でる二十代前半の長い金色の髪を半分辺りから

五つに編んで最後に一つに纏めている女性がいた。

「ごめんね、この子が迷惑をかけたようで。お詫びに情報を一つ無償で提供するからそれで勘弁ね。」

「情報ってまるで情報屋みたいだな。」

その言葉に後頭部を掻きながら女性は笑う。

「いや、私って実際に情報屋の社員で。これからこの世界に居る社長に定時報告をするために向かつて途中で、こんど是非社長と商談してくださいな。それと今回無償で提供する情報ですが、」

そこで一旦区切り、女性は言う。

「さつき、ジュエルシードの暴走がありました、それで少年が一名重傷になりました。」

さらりと言われた情報にミイラは目を少し細めた。

俺は一般人の設定だ。だがな、一般人が魔法少女を護ってもいいだろ。

いや、言い訳みたいになってるが本心を言えば、自己満足だ。だけどいいだろ、護る事は全ての人に与えられた特権だ。

あおいもとしば
葵井元樹は本日の夕食の材料である鍋の具材の入ったスーパーの袋を持ちながら歩いていた。

周りは人間の生み出した光で溢れている。それが闇を切り裂く光景は、夜空を台無しにしているが気にしないで小年は歩いていく。

「まーるきゅーチルノは美味しいよつと。」

歌を口ずさみながら小年は歩いていく。そして、小年は結界の中に囚われた。

「わーお、周りのビルや街灯の明かりが消えたのに暗くないぞ。」
フェイト及びアルフと長い時間を過ごした葵井元樹にとっては、も

う驚くに値しない事象である。たぶん隕石が落ちてきても驚かないだろう。

「魔法って本当に凄いや。俺にも魔法を扱える才能があればな。」
そついう風に呟いてみたが小年がパワーアップする事はなく、すぐ近くから衝撃と光が伝わってきた。

その光景を確認して、葵井元樹は顔を青くする。

「・・・ちよつと待てよ、今のつてもしかしてフェイトさんか!？」

あの衝撃はヤバイって!!」

スーパ-の袋を右手に持ちながら小年は衝撃の中心点へと向かう。

フェイトは亀裂の入ったバルディツシュに対し心の中で謝り、それを小さくして右手の甲に設置する場所に設置し、ジュエルシールドへ向かう。

「フェイト!!」

アルフの声が聞こえてもなお、フェイトは突き進む。母さんのため、応援してくれる葵井さんのため。

「届けえええええええええええええええええ!!」

フェイトがたどり着く前に、横の裏路地から現れた少年がジュエルシールドを右手で大きく振りかぶり、ぶん殴った。

その瞬間、なのはとフェイトの時よりも強い衝撃と光が少年を包み込んだ。

フェイトは吹き飛ばされ、それを人間の状態になったアルフが受け止める。

「大丈夫かいフェイト。」

声をかけられたフェイトは収まりつつある光を信じられないように見続ける。

そして、光が収まり、そこには少年が仰向けに倒れていた。

そして、
フェイトは掠^{かす}れた声で言う。

「あ、葵井……さん？」

葵井元樹はジュエルシードに向かうフェイトを見てゾッとしていた。何故か知らないが人間が何の補助も無しにあれをどうにかできるなど不可能だと一目で見て分かったからだ。

だから、小年のやることは既に決まっていた。

だから小心者の小年から物語の主人公のような少年へ、葵井元樹はシフトアップする。

やることなど単純だ。フェイトを守る。ただ、それだけだ。駆け出す、全力で駆け出す。スーパの袋など投げ捨てて。

[illegible]

そして、声を張り上げ、右手を大きく振りかぶる。

なあ、願いを叶える宝石。腕の一本や二本ならくれてやる。だから今すぐ収まれ。頼むから俺の目の前で護りたいと思うものを傷つけるなあああああ！！

ジュエルシートに拳がぶつかる、その瞬間に光が体を包み込む。

（でしゃばりには罰を・・・か。その通りだよ。）

小年が少年になった日（前書き）

俺は、長い夢を見ていた。

遠い、遠い過去。アルフさんやフェイトさんに会おう前。

正義の味方に憧れていて、自分は正義の味方ではないと気付かされた出来事。

でも、今だから言える。

俺は、悲劇の主人公ではない。

喜劇の主人公になれる人物だ。

だから、泣かないでくれ。

小年が少年になった日

《星黎殿》

異世界、星黎殿の中で白衣を着た男・・・八番目の実力者《智慧を教える者》、クエスチョン・アンサーは多くの紅世の徒を相手に講義を開いていた。

「今の時代は色々な世界に多くの知性を持つ者達がありますが、相容れぬのか争いなどが絶えません。分かりやすく例を述べるならフレイムヘイズと紅世の徒との争いでしょうか。私は思います、仕方がないことだと。」

そう言うのと、教卓の上に乗せていた水の入ったコップを横に倒した。もちろん中から水が流れ出る。

「さて問題、今コップが倒れ水が溢れ出しましたが、その君はどうしますか。」

指名された紅世の徒の一人が答える。

「片付ければ良いと思います。」

その答えにアンサーは頷く。

「そう、片付ければ良いのです。このようにね。」

そう言い、手を叩くと水は蒸発した。

「起きてしまった事は仕方ありません。しかし、その後に手を加えれば良いのです。争いも同じです、争いは両者の意見の食い違いで起きるもの。ならその意見の食い違いに手を加えればいい。」

アンサーは指を鳴らすとアンサーの横に映像が現れた。

「これが我々『夢の世界』^{ホープレス・ワールド}の、存在の力を人間から奪わなくても存在の力を紅世の徒一人一人に供給するという計画です。これで少しは争いが減ります。」

アンサーの言葉に紅世の徒達は歓声の声を上げた。この場に集った多くの者達は、『夢の世界』^{ホープレス・ワールド}の計画の賛同者であった。

そんな光景を見ながらグラサン・・・シュドナイは隣りにいるヘカ
テーに言葉をかける。

「いいのか、あんな好き勝手に言わせて。」

その言葉にヘカテーは特に顔色を変えずに答える。

「構いません。それにあなたも知ってるはずです、あの組織の強さを。」

その言葉に、シュドナイが思い出すは彼らが初めて星黎殿に訪れた
時の事。

全員で出迎えわずか三人、わずか三人に遊ばれ、負けた。その中に
はクエスチョン・アンサーも居たが、しかし一番強く、一番印象に
残ったのは葬儀屋と言われていた小年だった。

彼は他の二人と違い確実に急所に拳を入れ意識を奪い取っていった。
そして、その表情は無感情を通り越して人形のような表情だった。

そして、戦いが終り人形のような表情の小年は一番早くどこかへ消
えた。

「確かにあの組織は強い。だから驚いたさ、葬儀屋と呼ばれていた
あの少年が死んだという知らせを聞いた時は。」

《海鳴市 ジュエルシード暴走現場跡》

仰向けの少年が目を覚ました時に最初に見た光景は、ボロボロと涙
を流しながら自らの名前を呼ぶフェイトの姿だった。

「何で、泣いてるんだ。俺は、フェイトさんが傷付く事がなくて良
かったと思ってるのに。」

これじゃあ、体を張った俺が間違いみたいじゃないか。

・・・ああ、でしゃばりには罰をか。なにもこんな罰でなくてもい
いのに。

フェイトは泣きながら葵井元樹に声をかける。

「だって、だって、葵井さん、ボロボロで・・・それに腕が。」
腕、腕がどうしたんだ。

そう思い、右腕に力を入れようとして力が入らなかった。
首だけを動かして右腕を見ると、腕がなかった。

いや、腕はそこにあつた。肘から先が骨だけになった腕が。

これも罰なのか。でしゃばった俺に対する罰なのか。

少年は笑った。弱々しいが、力強く。

「この程度なら、大丈夫だ。それに俺には左腕がまだ残っている・

・なんてな、右腕を生やす魔法は、ある？」

その言葉にフェイトは首を振る。

「そんな魔法なんて、ないよ。」

「やっぱりか、よつと。」

むつくりと少年は上半身を起こした。あわてて止めに入るフェイトに左腕を突き出した。

「ジュエルシードだ。もう暴走してないみたいだから大丈夫だと思う。それとその白い子、この石が目的なら今回は諦めてくれないか。」

その言葉に離れた場所でこちらを見ていた白い女の子は頷いてくれた。フェレットみたいなのが何か言いたげな様子だったが気のせいだろう。

そう思っているうちに一つ気がついた。フェイトさんがジュエルシードを受け取ってくれない事に。そういえば、アルフはどこに行ったんだろう。

「なんで・・・本当なら私がジュエルシードを、葵井さんの、腕が無くなくても、私が・・・」

その言葉にジュエルシードをフェイトに向かってジュエルシードを軽く投げた。突然の事にフェイトは動揺しながらジュエルシードを何とかキャッチした。

そんなフェイトを見ながら少年は笑いながら言う。

「おれは、フェイトさんが、傷つく、のは見た、くない。たまには、

小年じゃなく、少年として、守る、のも良い・・・だろ。」

笑いながら葵井元樹はフェイトの頬ほおに手を添える。その頬には涙が伝っていた。

「だから笑ってくれ。右腕が無い以外は何とも無いから。」

その言葉に、何とか涙を堪こらえようとしていたフェイトはついに泣いてしまった。

「フェイトちゃん・・・」

高町なのはは眼前で行われている二人のやり取りに対し、呟く事しかできなかった。

当然である。あんなやりとりの中に入るほど、なのははKYではない。むしろ空気を読む方であると思う。どっかの執務管と違って。

「へっへっへぶしっ！」

「クロノ、大丈夫？ 熱が四十度超えてるけど。」

「だ、大丈夫です。これくらいなら。」

時間が過ぎ少年はフェイトに支えられて、近くに落ちていた食材の入ったビニール袋を回収して一緒に転送魔法で何処かへ行ってしまった。

「ジュエルシード、とられちゃったね。」

ユーノが静かな声で言った。

「うん。でも、何でか分からないけど、あれで良かったと思うの。」

あれで良かった。もし、あそこでジュエルシードの取り合いをしたら、人間としてダメなような気がする。そういう気がした。

ユーノも同じ意見だったのか、なのはに同意した。

そして、なのはがユーノに何かを言おうとした所で後ろから物音が聞こえた。

振り向くとそこには、黒いフードで全身を隠した女性が立っていた。「迷惑をかけて、ごめんなさいね。」

その女性の唐突な物言いに、なのはとユーノは一瞬何のことか分からなかった。

「ただ、あの子は必死なの。だから、恨まないであげて。」

「あなたは、誰ですか。」

ユーノの質問に答えることなく、フードの女性は言う。

「あの子を、救ってあげて。」

そう言うのと、フードの女性は転送魔法で何処かへ行ってしまった。

《？》

「どういう事だっ て聞いてるんだよー!!」

フェイトが葵井元樹が帰っている頃、アルフは情報屋の店の中で情報屋を殴り飛ばしていた。

「イタタ。お客様、落ち着かれてはどうですか。」

壁にぶち当たりながらも、情報屋は営業モードで対応する。

「ふざけるんじゃないよ、お前のせいで葵井さんの腕が無くなったんだぞー!!」

「ちよつと待つて下さい。腕が無くなったのは私のせいだということですか?」

その言葉にアルフは情報屋の鳩尾に拳を叩き込んだ。あまりの威力に情報屋は咳き込みながらうずくまった。

「あんたがあの場合に居たのは分かっているんだ。何故動かなかった、何故止めようとしなかった!!」

アルフは見たのだ。近くの屋上で眼下を見下ろしている情報屋の姿を。興味深げに観察している姿を。

「げほつげほつ、お言葉ですが一つよろしいですか。」

くだらない事を言ったら蹴り飛ばす。そう思っていたアルフは情報屋の次の言葉に動きが止まった。

「一般人があゝの結界で自由に動けると思いますが？」

そして、情報屋は何か立ち上がりながら言葉の嵐を放つ。

「一般人がタイミンク良くフェイト様の危機を救えますか、一般人があれ程までの威力を受けて腕一本だけで終ると思いますか、一般人が無くなった右腕の痛みに対して正気でいられると思いますか、そもそもあゝの一般人は何故、御二人に優しく接してと思っていますか。」

情報屋の言葉に戸惑うアルフに情報屋は最後にこう言った。

「お客様は、あゝの一般人の過去を知ってますか？」

その言葉でアルフは少年を思い浮かべる。優しく、お節介で、いつも私達二人を気にかけてくれる少年の姿を。

けど、今の情報屋の口ぶりからは、少年を疑えと言ってるようにしか聞こえない。

反論したくても、情報屋の言ってる事はどれも正しかった。

「あんたは、何を知ってるんだい。」

その言葉に、情報屋は目を閉じて答える。

「お教えできません。しかし、これから言つのは情報ではなく忠告です。心に留めておいてください。」

情報屋は^{まぶた}瞼を開ける。その黒いサングラスの奥の瞳は、穏やかな眼差しだった。

「あの少年を、大切にあげてください。それが貴方にも、フェイト様にも良い結果をもたらします。」

「もう、ゴールしてもいいよね。」

アルフが帰った後、あまりの激痛に情報屋は仰向けに倒れた。

「大丈夫ですか、ルシフィさん。」

そこへ転送魔法で帰ってきた山猫が現れた。

「大丈夫じゃない。確実にアバラが折れた。悪いが部屋を片付けてくれ。」

アルフが暴れたせいで、部屋の中は結構散乱していた。

「分かりました。でも、ここまで暴れて何も起きなかったのが不思議ですね。」

床には魔道書の原典や魔剣や聖剣のたぐい、不老不死の薬などが散乱していた。

「それは俺も同感だ。というか下手に動かすと海鳴市が消滅するから気をつけてな。」

分かりましたと言い山猫は掃除をするためにフードを外す。そして、

二人は視線が合った。

「やっぱり綺麗だ、山猫。」

「ルシフィさん・・・。」

二人は見つめ合ったまま時間が止まり、そして後ろで何かが光っていた。

「あっ。」

「あっ。」

二人は冷や汗を流して後ろを見た。

二人が見つめ合っているうちに何故か魔道所が捲^{めく}れて、何かが発動した。

《約束された緋色の花》

その日、とある店の中で緋色の花びらが咲き誇った。

小年が少年になった日（後書き）

ミイラ「今回出番がない。」

妖気「もはや葵井が主人公で良いんじゃないか。」

ミイラ「あいつは主人公になれんよ。」

妖気「あんだ、嫉妬ゆえの発言か。」

ミイラ「いや、あいつの事は俺が一番知ってる。」

妖気「その意味ありげな発言は一体・・・」

ミイラ「次回の続く。」

病院に行くミイラ 病院に居る少年（前書き）

時刻 午前 場所：？？？

「俺は救いたいんだ。」

ボロボロの少年はミイラに思いをぶつける。

「お前には救える力がない。」

そんな少年にミイラは突き放すように言う。

「だけど、それでも救いたいだ。」

それでも少年の決意は変わらない。

「なら、どうする。」

ミイラは徐々に霧になっていく。そんなミイラに少年は答える。

「決まってる、誰も救われない方法で俺は救う。」

その答えに満足したのかミイラは完全に消えた。

病院に行くミイラ 病院に居る少年

《ミイラが転生者になる前の世界 病院への道 午後一時》

「日光が気持ちいい。」

「そうだね。」

「そおおうだあねえ。」

そう言いながらミイラとリリオとリユネは、ある病院に入院している少女の見舞いへ向かっていた。

「ところで葬儀屋、吸血鬼なのになんで日光が平気なの？」

トウモロコシを食べながらリリオは小首をかしげて質問する。

「リイリイオオ、女の子っぽおおいよおお。」

リユネがふざけてからかっている様に言っただがリリオは無視する方針にした。その事にリユネは少し落ち込んだ。

（普通に喋れば可愛いのに何であんな喋り方をするんだろう？）

無視しながらリリオは少し疑問に思った。実は今まで沢山の吸血鬼の肉を喰らい血を飲み続けたリユネの脳は少しかり変化していて、そのせいで脳の言葉を司る部分に異常が出ていることをリリオは知らない。

つまり、リユネは普通に話しているのだ。さっきのもからかいではなく普通に『リリオ、女の子っぽいよ。』と言っただけである。

「リリオ、無視しない。彼女は今は普通に言っただけだから。ほら、リユネも落ち込んでないで、元気だして。」

ミイラはリユネについてある程度把握しているので、リユネをフォローした。

そんなこんなで、ミイラと以前はミイラを殺そうとしていたはずの二人はとある病院に向かい歩いていく。

ちなみにさっきの質問の何故ミイラは日光に当たっても大丈夫かというと、『ban item』らしい。

「かりんちゃん、お見舞いに来たよ。」

部屋に入るなりリリは笑顔で俺が病院送りにしたらしい少女に駆け寄った。

「こんにちわ、リリオちゃん。やつぱり今日もトウモロコシを食べてきたみたいだね。」

優しく微笑みながら、かりんと言われた少女は唯一残っている右手を使いリリオの頬に付いているトウモロコシの粒を取った。

「はう。」

リリオは顔を赤くして恥ずかしそうに俯いた。うつむ

その様子を廊下でミイラとリュネは眺めていた。

「葬お儀屋あ、リイリイイオはああ何でええ顔を赤くしてえるの？」

「恋なんだ。リリオはかりんに恋をしてるんだ。あの中に今入るのは止めといて、しばらく時間潰すか。リュネ、何が食べたい？」

二人は引き返していく。その間にも、あの病室では初々しく、良い雰囲気が漂っていた。

ちなみにリュネは吸血鬼を食べたいと言った。

《海鳴市 情報屋の店 夕刻》

「いつから花屋になったんですか、情報屋さん。」

今現在、Ｔシャツにジーンズを着ている翠屋のバイトとして働いている紅美鈴は、名前の分からない緋色の花が咲き乱れた店内を見て呆れたように言った。

「いやはや、ちょっと色々ありますね。まあ、その話は置いておいて、貴方には今日はやって貰いたい事があるんです。」

情報屋は手書きの地図の書かれたメモを紅美鈴に渡した。

「その場所で奴隷商人が取引をするので潰してきてもらいたい、報酬は弾^{はず}みますよ。」

情報屋からメモを受け取る。その時にちょっと皮肉を漏らした。

「私をここまで墮^おとしておいて、また偽善ですか。」

その言葉に情報屋は申し訳なさそう顔になった。

「あの時は、本当にすまなかった。俺があんな事をしなければ君は紅魔館から逃げるように出稼ぎにこの世界に来る必要もなかった。」

紅美鈴は、情報屋の謝罪にため息を吐く。

「別にいいですよ。謝られてもどうしようもないですし、それに私は貴方には逆らいませんから。逆らえませんから。」

何とも言えない空気がこの場を支配しようとした所で、毛先が薄い桃色がかったブロンドの髪の九歳くらいの少女が情報屋に近づいてきた。

「パパ、何を話してるの？」

「パパ!？」

唐突なワードと登場人物に紅美鈴は女の子にパパと呼ばせる目の前のロリコン疑惑の人物を汚いものでも見るような目で見た。

「いや、誤解してるようだから言わせて貰うが、この子は娘だから。」

「このロリコンがッ!!」

その言葉と共に、紅美鈴は回し蹴りを食らわした。

「おお、パパが飛んだ。」

女の子は特に驚きもせずに宙を飛んでる情報屋を目で追っていた。

《同時刻 海鳴市の病院》

「右腕が無いって不便だな。」

病院の個室のベットの上で葵井元樹は肘から先の空白の部分を見つめながらお見舞いのりんごを皮も剥かずそのまま齧^{かじ}った。

「・・・熟^うれてない。」

すっぱさに顔をしかめた少年のいる部屋に誰かが入ってきた。

その人物は少年の見覚えのある少女、少年の腕が無くなる時にいた魔法少女だった。

「君は・・・あの時の。よく病室が分かったね。それと、時刻も夕方だしきちんと学校に行ったようで何より。」

少女は緊張した面持ちだった。

「看護婦さんに聞いたの。あの、腕は・・・。」

その言葉に少年は力なく右の二の腕を振ってみせる。

「この通り、肘から先が消えたよ。まあ、腕だけで済んだから良かったけどな。」

そう言いながらりんごを齧^{かじ}る。やっぱりすっぱかった。

「まあ、無駄話はここまでにして、俺の見舞いの他に用件があるに見えるが言ってみんしゃい。」

すると少女のカバンからフェレットが現れた。

「リユリユヌーアスハンバライヤフェレットか。病院にペット持ち込みはダメだと思うぞ。」

少年が注意するとフェレットは喋った。

「教えてください。あの二人の居場所を。」

その現象に驚くことなく少年は答える。

「喋るなら病院に連れ込んでも問題ないか。」

そういう問題ではない。そして少年はりんごをわきに置いて左手で頭をボリボリ搔く。

「二人とは、フェイトさんとアルフさんの事だよな。凄いデリケートになってるから教えたくないな。」

その言葉に、少女とフェレットは食い下がる。

「そこを何とかお願いします。フェイトちゃんと話をしたいんです。」

「ジュエルシードは危険なんです。下手をすればこの街が、この世界が大変なことになるんです。だから、教えてください。」

その言葉に少年はため息を吐く。

「すこし、公園まで散歩しに行こうか。」

そう言うと、少年はベットから降りる。

「病院から出て大丈夫なんですか。」

フェレットの言葉に少年は笑って答える。

「いや、しばらくはベットの上で安静だそうさ。まあ、大丈夫だ。」
安静にしてるはずの少年は言いながら歩き出す。

「俺の名前は葵井元樹。君達の名前を覚えてくれないか。」

その言葉に二人は名前を言う。

「私は高町なのはなの。」

「僕はユーノ・スクライアです。」

そして、三人は公園に向かい歩き出していく。そこでなのはが思い出したように質問をする。

「あの、さっきユーノ君を見たときに言ったりユリユ……。」

「リユリユヌーアスハンバライヤフェレット。リユリユヌーアスが住むという意味でハンバライヤが草原という意味。まあ草原に住むフェレットって意味だよ。妹が好きだった。」

そう言う少年の目は何処か遠くを見ていた。

「そうだったんですか。妹さんは今はどうしてるんですか。」

その質問に少年は答えた。

「今は遠い場所。会うのが難しい場所に行ったよ。会おうと思えば会えるけどね。」

少年の横顔は悲しげだった。その表情を見て二人はそれ以上は聞くことが出来なかった。

そして少年は、本日二度目の病院からの抜け出しに成功した。

公園まで歩いてきた少年はなのはとユーノをベンチに座らせて、少年も座ってから話を切り出した。

「まず、言える事は」

ズゴーン

目の前で何か光ったと思ったらジュエルシードが木の中に入り、木の化け物が現れた。

「・・・。」

「・・・。」

「・・・タイミングがいいのやら悪いのやら。まあ、がんばってな。」

「

少年は怪我人^{けがにん}とは思えない速さで隠れた。

「・・・はっ！　なのはレイジングハートを。」

「うん！　ユーノ君。お願い、レイジングハート。」

その様子を影で見ながら少年はなのはに心の中で声をかける。

（本当は、あの子がフェイトさんを救うのが一番なんだよな。あの子の瞳を見るに、何故か親友になってくれると確信するし。）

そこで少年は笑ってしまった。

（俺は何を考えてるんだ。まるで兄みたいじゃないか。）

本当に、少年は兄のように接していた。だからだろうか、フェイトやアルフも信頼を寄せていたのだろう。

だから

（だから俺はあそこまで怒れたんだな。純粹に、フェイトさんとアリシアさんのために。）

だから

（あの日、義妹との約束を守らなかった、そして死なせてしまったくせにな。）

自虐的に思ってしまう部分もあって、
いまだ過去を振り切れていな
い事にため息を吐いてしまった。

病院に行くミイラ 病院に居る少年（後書き）

妖気「今回の前書きは何だ？」

ミイラ「俺と少年との会話だが。」

妖気「謎が多いって。」

ミイラ「あの前書きは次回に繋がると思う。」

妖気「そうか、まあいい。それより今問題なのは何故ここにリンデイ茶がある。」

ミイラ「さあな、飲めということだろう。」

妖気「俺はコーヒー派だ!!」

その頃

リンデイ「ここに置いていたお茶が消えたけど、だれか知らない？」

クロノ「げぼっげぼっ、知りませんよ。」

エイミイ「うわっ、休んだ方がいいよクロノ君。もう熱が40度超えてるよ。」

クロノ「でも仕事が・・・」

ウェージ「そうですねクロノ執務官。現場には俺が行きますので。」

クロノ「すまない、ウェージ執務官。」

妖気「さりげなくオリキャラが出てるが・・・」

ミイラ「彼は情報屋の部下だが。」

妖気「ネタばれ早っ!？」

ミイラ「次回も続く。」

少年は眞実を見つける（前書き）

難しく考えすぎなんだよ。

誰かを救いたい、それだけで充分じゃないか。

それ以上を求めたら欲張りになる。

分かるだろ、葵井元樹。

少年は真実を見つける

《時の庭園 午前》

フェイトの悲痛な声を背に受けアルフは壁に拳を打ちつけた。

「あの女、あんまりだ。あんまりだよ。なんでフェイトがあんな目に遭わなくちゃならないんだ!!」

フェイトの悲痛な声が響く。ただでさえ昨日はフェイトの心の支えになっていた葵井元樹が重傷を負ったのに、さらに追い討ちをかけるようなプレシアの行い。

すぐに助けに行きたい、だけど向こうに行く扉はプレシアの魔法のせいで開ける事はできない。

「どうすればいいんだ・・・」

『他にも御用うけもちがありましたらそちらに渡してある番号に連絡ください。追加料金ですが誠意せいいを持って対応させていただきます。では。』

壁に再び拳を打ちつけた所で本当に唐突に、唐突に情報屋の言葉を出し出した。

「あいつなら扉を壊せるほどの強力な武器を持っているはず。」

前日に情報屋を殴り飛ばして気まずい気持ちもあるが四の五の言ってる余裕はアルフにはなかった。

急いで暗記してる番号を思い出し、携帯を持ってなかった事を思い出す。

だからどうした、携帯がないなら情報屋の店に乗り込めばいい。アルフはフェイトを救うため転移魔法を使い情報屋の店に行く。

【余分な歯車は噛み合い、歪に動き出す。】

「無理です。こればかりはどうしようもありません。」

アルフの頼みを情報屋は断った。やるせないような表情で。

「あんたがプレシアに雇われている事は分かっている。けど、お願いだよ。フェイトは今辛い目にあってるんだ。フェイトを助ける道具を貸してくれるだけでいいんだよ。」

「そう言われましても。」

「何でもする、何でもするからお願いだよ情報屋。」

アルフは恥もプライドも捨て懇願する。そんなアルフへ情報屋は仕方なく言葉を発する。

「そうですね、じゃあこう言いましょう。」

残酷な残酷な言葉をやるせない表情で発する。それを聞いた瞬間アルフは血相を変えて店から飛び出した。ただ一つ、情報屋はこう言った。

「昨日病院に運ばれた葵井元樹は今、時の庭園にいます。原因は分かりません。」

【歪に動き出した歯車は別の歴史へと連結する。】

「ここは、どこだ。」

葵井元樹は周りを見て呟いた。腕の治しようもないので寝てると医者に言われたので今は病院で眠っていたはずだ。

「もしかして夢を見てるのか？」

だとしたら自由に動いても今はベッドの上だから問題ない。ノープロブレムだ。

「なら、歩こうか。」

周りは何処かラスボスのステージのように感じられた。それと仄かに紅い霧が良いアクセントだ。

なら、せっかくのステージを歩かないのはもったいない。それに散

しばらく歩いたが、出口が見つからない。それどころか奥へ行っているみたいだ。

最初は出口を目指していたが、世界の抑止力が働いたのかどんどん迷子になるしコレが夢じゃないと気付けたし右肘からの断面がジンジンジンジンジンジン痛いし。

だから気がつかなかった。肘の断面の痛みに周囲に集中できないせいか、ある扉の前に来るまで音に気付くことができなかった。

「この扉は開かないと。これが出口の扉なら俺って閉じ込められたなつとどれどれ。」

扉の向こうでは、年端もいかなそうな女の子の悲痛な声が聞こえた。

「あ、あ、あ、あ。」

扉の向こうで、女の子の、悲痛な声が聞こえた。

「あ、ああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああ！！！」

扉の向こうで、
 フェイトさんの、
 悲痛な声が聞こえた。

「あああああああ！、やめろ、やめろおおおおお
ツツツ！！」

お前は扉が開かないだけで死なせるのか。ならそれで良いじゃないか。『仕方ない』の一言で片付くんだ。それにお前は

「やめろ、やめてくれ……」

逃げたじゃないか、あの場から。もしかしたら助けられたのに自分から約束を破って逃げたじゃないか。なあ、葵井元樹。

7
 •
 •
 •
 ○
 8

仕方ないことなんだ。私は母さんの期待に応える事が出来なかったから。

でも、何でだろう。病院に入院している葵井さんが不思議と来てくれる気がした。

そんな都合の良い事など起きるわけないと分かっているのに、私のせいで右腕が無くなっているのに。

「こんなに待たせておいて、成果はこれだけでは母さんは貴方を笑顔で迎えることはできない。わかるか、フェイト。」

母さんは近づいてきて諭すように言ってきた。私は『はい』としか言えなかった。

「だからよ、フェイト。覚えていて欲しい。」

母さんの杖が鞭のように変わった。

「二度と、母さんを失望させないように。」

次に何が来るかは明確だった。だから痛みに耐えるために目をつむり、後ろの開くはずもない大きな鉄の扉が開く音が聞こえた時には心臓が止まるかと思った。

「フェイトオオオオオオオオオオ!!」

叫び声を聞いて誰が来たか確信でき、安堵していた私がいた。

「あ、おい、さん・・・」

何でだろう、意識が遠のいていく。安堵したからなのかな、私はなんで安堵したんだろう。葵井さんが来てくれ、た・・・から、か・・・な・・・

俺の視線の先にいるクソババアは俺のことを驚いた顔で見ていた。
「てめえ、何してんだ。フェイトさんから離れろ!!」

怒りの興奮状態で少年はプレシアに怒鳴った。

「何を言ってるの、フェイトは私の娘よ。これは躰しづけの一環よ、フェイトに付きまとう少年。」

その言葉を聞いて少年はぶち切れた。

「てめえの娘に何してんだお前はあああああ!!」

左腕を振りかぶりプレシアに突進する。信じたくなかった、実の娘に虐待した言い分が躰しづけだなんて。あんなにフェイトさんの体に傷ができて、なのにふざけんじゃねえクソババアアアアアアッ
ッ!!

ドゴンッ

少年は倒れた。煙を上げて倒れた。ぷすぷす、ぷすぷすと。

プレシアの放った雷が一般人である少年に直撃した。

「あの扉を開けられたから一体どんな力があるのか疑問に思ったけど、どうやら扉の方に問題があったみたいね。」

ぷすぷすと煙を上げながら、少年は立ち上がった。

「まだ立てるとは、その根性だけは褒めてあげるわ。だけど、死になさい。」

プレシアによる雷は再び少年を襲った。だけど少年は倒れなかった。

「俺は今の自分が逃げることも倒れることも許したくないんだ。ケジメをつけたいんだ。だからよおおおおおおお!!」

少年は走り出す。プレシアは雷を何度も放ち当てるが少年は肌を焦げ付けさせながら走り、そして左腕を使いフェイトの拘束を無理やり解いた。

「はあ、はあ、はあ・・・」

息を荒げてフェイトを左腕だけで抱きかかえる少年にプレシアは冷たく言い放つ。

「下らないわ、フェイトは私の娘。助け出したところで、あなたよ

り私のお願いを聞いてくれるわ。」

「お願いじゃなく命令の間違いじゃねえのか。」

意識を朦朧^{もろろ}とさせながら、何とか皮肉を返した。

「そうね、まずはその減らず口を閉じなさい。」

そう言いながら雷を放つ。実の娘を巻き込んで。

「だからお前の娘だろこのクソババアアアアアアアアアアアッ
ッ！！」

少年はフェイトを横に突き飛ばした。ギリギリのところではフェイトには当たらず少年にだけ当たった。

当然の如く少年は吹き飛ばされた。そのまま転がり、そして立ち上がった。

「しぶといわね。」

プレシアの呟きに、頭から血を流しながら口の中に溜まった血を吐き出して深呼吸をする。

「血が頭から・・・抜ければ冷静に・・・なるなんて迷信だな。」意味のない事を呟いた。視界が霞んできたが、ふらつく事はなかった。だから走り出す。一発でも殴らないと気がすまなかった。

そして、当然の如く雷が放たれたが狙いが甘かった。いや、プレシアは本気で当てるつもりだった。

（ぐっ！？　こんなところで。）

プレシアの病の発作が標準を鈍らせた。雷は少年の真後ろに当たり、少年は衝撃で吹き飛んだ。

プレシアの上を抜き、そしてその後ろの扉にぶち当たり、扉の向こうに少年は入ってしまった。

「しまったっ！！」

プレシアは急いで振り返る。血を吐きながら立ち上がる少年は信じられないものを見るかのような視線で、その部屋の中のガラスの容器の中に入っている一糸纏わぬ幼い女の子の綺麗過ぎる死体を見た。「・・・たまにフェイトさんが寝言で言うんだ、アリシアじゃなくてフェイトだよって。」

少年は近づいてガラスの容器に手のひらを当てる。

「汚い手で触らないでっ!!」

その言葉を何も言い返さず、少年は静かな声で尋ねる。

「教える、お前の過去に何があったのか。」

少年は振り返った。その瞳は、静かにプレシアを見つめていた。

【連結した歴史は歪められて作られていく。まるで、誰かの都合に合わせて。】

少年は真実を見つける（後書き）

ミイラ「次回に続く。」

妖気「早ッ!？」

少年は真実を知る（前書き）

「葵井元樹はこちらで病院まで運ぶ、だからその子はしっかりと安全な場所まで連れてつてくれ。」

ミイラはアルフに諭すように言う。

ミイラは途中で情報屋の店から出てきたアルフに会った。だからアルフの助けに応じる事ができた。

ただ、疑問が残る。

ミイラが来る前から時の庭園は紅い霧が立ち込めていた。さらに言うなら、立ち込め始めたのは葵井元樹が時の庭園に来たときからだった。

少年は眞実を知る

《時の庭園》

「なぜそんな事を言わなければいけないの。」

プレシアから返ってきたのは最もな冷たい言葉だった。

「・・・昔話を、して良い・・・か。」

プレシアを静かに見つめながら葵井元樹は尋ねた。

「興味ないわ、あなたの過去になんて。」

プレシアは杖をかざした。雷が来ると思った少年は、横からの空気の塊が頭に直撃して横に吹き飛んだ。

「ぐあ・・・はあ、はあ。この、容器の中に、入ってる娘、が、本当に、大事、なんだな。その気持ちを、何でフェイトにも、向けないんだ、同じ娘だろ！！」

少年は立ち上がった。ゆつくりと、ふらつくことなく。

「アリシアを偽物と一緒にしないで！！」

プレシアのその怒声を聞き、少年も叫ぶ。

「じゃあ何でフェイトはあんたを母と慕ってるんだ！！ あんたが生み出したんだろ、偽物と思うなら何でフェイトと名づけた、なんで運命フレイトと名づけた！！」

「それはあの子の開発プロジェクトの名前がFATEだったからよ。」

「

か・・・開発？」

突然のワードに少年は言葉を詰まらせた。

「ええ、あの子は人工的に生み出されたものよ。そうね、ここまで好きに言ってくれて、あなたが何も知らないで死ぬのも癪に障るわ。いいわ、教えてあげる。あなたが聞いてきた私の過去について。」
嫌な気がした。だが、何故か聞きたいと思った。

「アリシアがまだ生きていた時、私はね、アレクトロ社のあるエネルギー開発プロジェクトの主任だったの。」

プレシアは過去を語りだした。過去を慈しむような瞳で。

「あの頃は楽しかったわ。忙しいながらもアリシアもリニスもいて今思うと毎日が夢のようだった。」

（リニスって、誰、だよ。）

初めて出たリニスという名前に少年は心の中だけで質問した。あんなに思い出の世界に入っている奴に質問したら雷落下は必死である。「春はアリシアとリニスと一緒にピクニックに行つてアリシアが花飾りを作ってくれたわ。夏には遊園地に行つてアリシアの笑顔に癒されたわ。秋には一緒にニホン料理というのを作つたわ。冬になるとリニスの抜け毛が多くなつて少し困つたけど、毎日が楽しかったわ。」

（リニスって、猫だった、のか。）

「だけどね、あの日全てが変わつてしまった。上から来たあいつのせいでプロジェクトは杜撰ずさんになつていった。いくら事故を起きないように努力しても、その後には上からの無理な注文を次々と送りつけてくる。」

いつの間にかプレシアはアリシアの入った容器の隣りに立っていた。「だけどみんなを守るため事故だけは絶対に起こしたくなかった。」

私は研究所近くの家に帰ることなく事故を起こさないように無理な注文の処理と点検を続けて行つたわ。」

（・・・。）

「アリシアには寂しい思いをさせたけど、あの子は文句の一つも言わずに待っていてくれた。だから私はこのプロジェクトが終つたら休暇を取つて、いくらでも甘えさせてあげようと思った。」

だいたいは分かった。アリシアが何故死んだのか分かった。

「だけどあの日、全てが変わつた。上からの命令で不備だらけの装置を性能評価のために試運転しろという命令が来た。だけど命令に

は逆らえない、実行するしかなかった。」

その声色には悔しさが滲み出ていた。

「そして、事故が起きた。装置が暴走を起こしたのよ。安全装置は働かなかった。あいつが効率を上げるためにと安全装置を取り外してしまった。」

「げほっげほっ。」

やばい、血を吐いてしまった。けど、意識をしっかり保て、一字一句聞き逃すな。

「最後の手段として装置を誰もいない場所に転移させる方法もあった。だけど、今後の立場を考えて転移させなかった。それが間違いだった。」

あいつは元は良い奴だったんだ。だけど似てる、今はあいつに似てる。だから一字一句聞き逃すな。

「装置は臨界点に達し、直視できないほどの金色の魔力光が当たり一体を包み込んだわ。すぐに魔法障壁を張ったおかげで開発チームもあいつも私も無事だったけど、研究所付近の生命は全滅した。」

「そして、アリシア、は、その被害、者になった。」

少年の言葉にプレシアは肯定した。

「そうよ、アリシアもリニスも死んでしまったわ。その後、会社から巨額の慰謝料が送られてきて私はお払い箱になった。管理局もただの実験のミスということで処理してしまった。」

哀れだな、本当に。どうしようもなく、本当に。

「その後、私はアリシアを蘇らせるために様々な手を尽くしたわ。でも、できなかった。」

「あたり、まえだ。例える、ならば、命は、プログラム、だ。死ぬという、事は、すべての生きる、ことに関する、プログラムの、デリート、を、意味する。消えた、データは、戻ってこない。」

その言葉にプレシアは意外そうな顔をした。

「ええ、そうよ。だから、私はプロジェクトF・A・T・Eに参加した。クローン計画で私はアリシアを蘇らせようとした。その実験

ストッパー

の弊害で不治の病にかかったけどアリシアの体細胞を使った計画は成功した、すぐにアリシアの記憶を与えたわ。」

（計画の、成功、か。嬉しかった、だろうな。）

「私は次にリニスを蘇らせようとして、蘇らせなかった。山猫は人より寿命が短い。なら、私の使い魔にして一緒にアリシアと暮らしたほうがいいと思った。」

（分かった。結果は分かった。だから、もう言うな、辛くなるぞ。）

「そして、あの子が起きたわ。だけど、あの子はアリシアの代わりにはならなかった。性格も利き手も違った。何よりあの子には魔力があった。よりもよって金色の魔力光で。そして、リニスも違った。使い魔にしたのが失敗だった。気ままな性格だったリニスが礼儀正しく私の隣に座っていた。だから」

「もう、いい。言うな。大体は、分かった。」

少年は口元の血を拭い去り立ち上がった。

「何が分かったというの。あなたに私の気持ちが分かると思ってるの。」

プレシアの剣呑な声に息をかすれさせながら的外れな返事をする。

「結局は、逃避だ。俺の、母親よりはまともだが結局は同じだ。」

背中から壁に寄りかかった。走るとしたら次が最後だ。だが、限界は壊すものだ。だよな、俺。

「あんたの気持ちは分からない。だが、アリシアの気持ちは分かる。だから言える。」

あいつをしつかりと見据えろ、ぶれて見えるなら無理に一つに合わせろ。

「俺は、あんたをどうしても許せない。あんたは俺の母親そっくりだ！！ 血が繋がっていなくても娘だろ、なんで娘の気持ちを知らうとしない・・・なんで血の繋がった娘まで悲しませる事をする！！」

雷に打たれた平凡な小年は怒りを込めてプレシアに対峙する。

「だから、少しは冷静に物事を見つめろおおおおおおおおお

おおおおお！！」

そして、走り出す。右足を強く踏み出し、左足を強く踏み出し、右足を踏み出せなかった。

（は、はは・・・俺は、ダメだな。）

視界には近づいていく床が見えた。たび重なる肉体の酷使に、ついに体は壊れたのだった。

「冷静に物事を見るのはあなたの方だったみたいね。」

プレシアの皮肉に少年は小さく呟いた。

「お互い、様だろ。お前も、病気のくせ、に、魔法を、ばんばん使って、口から、出てるぞ。」

プレシアの口から血が流れ出ていた。ただ、それだけだった。

少年は負けてしまった。ただそれだけの話。勝たなければならないのに負けてしまった。

まったく、締まらない終わりだ。ケジメをつける事すらできないとは我ながら情けないものだ。おっと、情けないのは俺じゃなくて少年だったな。

それにしても、この女の子の死体は綺麗だな。

少年に止めを刺そうと近づいていたプレシアは、異変に気がついた。紅い霧が室内に充満してきていたのだ。その霧は少年が入ってきた扉から入り込んできている。

「一体・・・何なの？」

プレシアは呆然として見るしかない。紅い霧は一つの意識を持った生物のように不規則な動きを見せるとプレシアの目の前に集っていく。

すぐにプレシアは飛びのくと、霧の中から何かがプレシアが居た場所を掠めた。

それは灰色の包帯に包まれた手だった。

「綺麗だな、家に飾りたいほどに。」

手が現れると同時に、後ろから声が聞こえた。振り返ると、灰色の神父服を着た灰色の包帯男が容器の中のアリシアの死体を見ていた。プレシアは灰色の人を見て言い知れぬ不安に襲われた。だから虚勢を張った。

「アリシアから離れて!!」

その言葉を見捨て、ミイラは呟く。

「なあ、この死体って凄く綺麗だな。よっぽど寂しく誰かを待ちながら死んだんだな。」

神父服を着た灰色の包帯の男、ミイラはうつとりしながら言った。その言葉にプレシアは何かを言おうとしたが言えなかった。頭の上に、手が乗せられていた。

「まあ、そんなわけだ。少しは苦しみ。」

何がそんなわけか分からないが、プレシアの頭の中の脳ミソの中に情報の波が襲い掛かってきた。

「

ッ

ッ

ア

!!」

声にならない悲鳴を聞きながら、興が冷めたかのようにミイラは喋る。

「少年が伝えたかった事だ。記憶を丸写したが、その方が分かりやすいだろ。」

唐突にこの部屋に現れたミイラは頭をポリポリ搔くと、プレシアの上に乗せていた手を霧散させた。

そして、頭を抱えて蹲ひくっているプレシアの横を素通りして葵井元樹とフェイトを肩に担いで部屋から出て行った。

本当に、淡々と淡々と。ただ、部屋を出る時には肩に担がれていたフェイトと葵井の傷は何故かすっかりと治っていた。

気がついたとき、少年は病院のベッドの上に居た。最初に思い出したのは、プレシアを殴り飛ばせなかった不甲斐無い自分と、その後のミイラに運ばれてる自分と、徐々に意識が薄れながらも聞こえたアルフの声だった。

たぶん記憶に残ってる会話の内容を思い出すに、ミイラはフェイトさんをアルフに引き渡して俺はミイラの手により病院のベッドまで運ばれたのだろう。まったく不甲斐ない。

「・・・ハハ、ハハハハハハハ。」

だから乾いた笑みを漏らしながら上半身を起こす。

ひとしきり笑った後、少年は呟く。

「右腕が無いって不便だな。」

時刻は時刻だろうか。葵井元樹は肘から先の空白の部分を見つめながらお見舞いのりんごを皮も剥かずそのまま齧^{かじ}った。

「・・・熟^うれてない。」

すっぱさに顔をしかめた少年のいる部屋に誰かが入ってきた。

【そして話は公園へと戻る。なのはとフェイトの再会の場所へと】

少年は真実を知る（後書き）

妖気「えげつない方法でプレシアを改心させようとしてるな。」

ミイラ「葵井の記憶を埋め込んだ方が改心しやすくなるだろ。」

妖気「たしかにそうだが。」

ミイラ「次回に続く。」

妖気「あつ逃げた。」

喜劇と悲劇への準備（前書き）

集ろう。

あの病院の前で、必ず・・・

いつになるか分からないけど・・・

必ず、いつになるか分からないが・・・

集ろう、必ず戻ってくるから・・・

あの空間から、必ず・・・

喜劇と悲劇への準備

《病院前 夕方》

「もう一度聞くぞ、リリオ。穂枝^{ほのえ}かりんと充分に話せたか。」
ミイラのその問いかけにリリオは真剣な面持ちで頷いた。

「そうか、なら次にここに集まるときは戦いが終ったあとだな。」
リリオはこれからリユネと共にミイラが転生前に所属していた組織の力を借りて革命をする。ミイラがあまり接触しないようにしていた組織の力を借りて。

「それとリリオ、帰ってきたらかりんと・・・」
突然ミイラはリリオの耳元に小声で呟くと、リリオは顔を赤くして俯いた。まるで茹で上げられたタコのように。

「葬儀屋あ、リリオになあにを言ったのおおお。」

リリオの様子を不思議に思いながらリユネはミイラに質問をした。

「大人の嗜み、といったところだ。リユネにはまだ早い。」

リリオの反応を楽しみながらミイラは答えた。

「でもおおおお、リリオオも子供だああし、葬儀屋あも十七ああだあよねえええ。」

その言葉にカラカラとミイラは笑った。

「そうだったな、忘れてたよ。つと、迎えが着たようだ。」

その言葉と共に、白いスーツを着た丸刈りのヤクザみたいな男がきた。しかも目つきは鋭い。

「お迎えにありがとうございました・・・リリオ様、どうかいたしましたか。」
いぶかしむ外見ヤクザにミイラが変わりに答えた。

「いや、なんでもないさ。それよりロリ、二人を頼んだぞ。」

「分かりました。それと私の名前はロリではなくローリです。」

外見ヤクザはロリの意味が分からないようで、ただ名前を訂正するのみだった。

その様子をつまらなく思いながらミイラは外見ヤクザに手紙を渡す。
「これをラファイに。」

「分かりました、全力を持って恋文を届けます!!」

渡された手紙を大事に受け取りながら外見ヤクザは大声で宣言した。その様子に周りにいた人は奇異の視線を外見ヤクザに送りつけるが、外見ヤクザは気にした様子ではなかった。

「ある意味尊敬するよ。それと恋文ちゃう、映画のチケットだから。」

「そこではたとミイラは気づく、ラファイは誰と映画を見に行くのだろうか。いや、それよりも問題なのは」

「・・・こんな事言ってる場合じゃないって、そろそろ急がないと今日はこの世界に一日滞在する事になるぞ。」

その言葉に外見ヤクザは慌てて腕時計を見る。外見ヤクザらしく金ぴかの腕時計だった。

「本当ですね、ではお二人とも私について来て下さい。」

「あつ、はい。」

「はあああいい。」

リリオとリユネは返事をする、外見ヤクザの後を追っていった。

その様子を見ながらミイラは呟く。

「勝てよ、リリオ。・・・そして、ラファイは誰と映画を見に行くんだ?」

そう言いながらミイラは人前にも関わらず数百の灰色の蝙蝠になつて飛んでいく。驚く人が呆然と見上げるだけだが、そのあとは何事も無かったかのように歩き出す。

数百の灰色の蝙蝠の行列はまるで古の灰龍エンシエル・ローのようだった。

そして、偶然その場に居合わせた古の龍達エンシエルを味方に持つ男はその光景を見て一言呟く。

「あの蝙蝠の大群から感じる感覚・・・葬儀屋、転生者になったのか。嬉しいぞ、我が同胞。」

九番目の実力者《友愛を示す者》エンシエル・エローウィはポツキ

ーを口に咥えながら蝙蝠の大群が見えなくなるまで見続けていた。

《同時刻 夢の世界 宿舍》
ホープレス・ワールド

十二番目の実力者《生命に憧れる者》ラーフィン・ユーフェはこれから来る二人のミイラの仲間を迎える入れるための部屋の準備をしていた。

「ラーフィン、高い所の窓は私が代わりに拭いてあげようか。」

ラーフィンの隣りにはいつの間にか同じ宿舍の相部屋になっている中学生くらいの少女がいた。

「ありがとうアスナ。けど良かったの？ せつかくの休みだったんでしょ。」

アスナ アスナ・ウェスピーーナ・テオタナシア・エンテオフユシアはその言葉に無愛想ながらも少し笑みを浮かべて返事を返す。
「私が好きにやってる事だから気にしないで。」

そう言うのと布巾で高い所の窓を拭き始めた。窓を拭きながらアスナはラーフィンに声をかける。

「たまに思うんだ。もし私がここに拾われずに他の誰かに助けられたらどうなっていたんだろうなって。」

その問いにラーフィンは少し考えてから言葉を返す。

「少なくとも今よりはまっとうな人生を送れたかもしれないよ。」

「やっぱりラーフィンもそう思うのね。」

二人は少し沈黙した後、同時にくすりと笑った。

「でもアスナさんの能力だと、葬儀屋さんとエンシエルさんが紅き翼や完全なる世界の殲滅に行かなかったら変な団体に回収されて酷い事になっていたかもしれないよ。」

「そうだね。でも一つ言うならここも変な団体だけだね。暗殺や内

部崩壊の誘発を起こして国や組織を滅ぼしたかと思えば、弱い者の味方として戦場で一騎当千の働きをする人もいる。みんながみんなやりたい放題じゃない。」

拭かれた窓は本来の透明さを取り戻していく。空は綺麗な夕焼けだった。

「それがこの組織の善い所でもあり悪い所でもあるからね。組織のトップですら最近は秘境探しの旅に出ているし、葬儀屋さんは葬儀屋さんで旅をするみたいだし。」

葬儀屋という名前で思い出したのかラーフィンは嬉しそうに笑いながら手の届く位置の窓を拭いていく。

「そういえば、葬儀屋さんに映画のチケットをメールでお願いしたら買ってきてくれたんだ。アスナさん、明日も休みだから一緒に映画を見に行かないですか。」

「ジャンルによるけど、前みたいな恋愛物がいいわね。」

サウザントマスターを殺した男を思い浮かべながらアスナはラーフィンにOKの返事を返す。

気がついたら窓はすべて拭き終えていた。そして窓から見える階下から外見ヤクザのローリさんが女の子と男の娘を連れてやってきた。「アスナ、もう来ちゃったみたい。部屋の準備がまだだから少し待ってもらえるように言ってきてくれませんか。」

「うん、じゃあ行ってくる。」

アスナは暗殺者特有の無駄の無い静かで素早い動きで部屋から出て行った。

その五分後、ミイラの仲間二人とローリさんも掃除を手伝ってくれた。

葵井元樹は右肩からの深く穿たれた傷から出る血を押さえつけながら物陰で身を潜めていた。

というより・・・

（何が非殺傷設定かを教えてもらいたいです、アルフさん。）
死に掛けていた。

時間は少し遡る。

でかい木の化け物をなのはさんとフェイトさんが協力して倒しました。

葵井は正直フェイトさんをもう戦わせなくなかった。彼女を傷つけるだけの悲劇から遠ざけたかった。

だから高町なのはが着た時は、彼女と一緒にフェイトさんのジュエルシールド集めを止めさせようと思った。

だから、フェイトさんとアルフさんが着た時はチャンスだと思った。同時に胸が締め付けられた。

あんな仕打ちを受けたのに、必死でジュエルシールドを集めようとするフェイトさんを見た瞬間、言おうとした言葉が砂消しに紙ごと削られるように消えた。

そして、確信もできた。木の化け物との戦いを見て、高町なのはとフェイトさんは分かり合えると。

だから、ジュエルシールドを巡って戦う彼女達の戦いを止めようと走り出そうとした。

直後、魔法陣が現れてそこから一人の少年が空中でぶつかり合う二人の少女の間に割って入った。

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。ここでの戦闘は、危険すぎる。事情を話して貰おうか。」

完全に出ばなを挫かれた少年は事の成り行きを見る事しか出来なかった。

「まずは二人とも武器を引くんだ。」

そのまま空中から地面に降りていく。唐突な展開にどう動くかこまねいているとクロノに向かい魔力の弾が飛んできた。

「くっ！」

クロノは魔法障壁を張って魔力の弾を弾いた。

「えっ？」

葵井元樹は間抜けな声をあげてしまった。弾かれた弾の一つが葵井元樹の右肩を貫通した。

「フェイトツ、撤退だ。離れてッ！！」

（アルフさん、殺す気満々の攻撃の後に逃げるよって・・・）
右肩を左手で押さえつけながら木に寄りかかった。

そして現在に戻る。

フェイトさんのジュエルシールド集めの思いは強く、空中に浮かぶジュエルシールドを手にした。

それを防ごうとクロノが攻撃しようとした。

「ッ！！」

危険を知らせようとしたが声が出なかった。どうやら体の限界は予想以上に超えているらしい。

だから、泣きたくなった。自分の無力さに。だから誰でもいいフェイトさんを誰か守ってくれよ・・・待てよ俺、無力がなんだってんだ俺、他人任せしてるから救えるもんも救えねえんだよおおおおお
おお！！

「ッ！！」

もし、体を無理に動かすと内臓が破裂するかもしれない。医者にそういわれた。

だからプレシアと対峙したときも内臓が破裂してもおかしくない状態だった。いや、内臓が破裂しない事が不思議な状態だった。

そして今も死にかけの体を無理に動かしてクロノに向かい走り出し

た。

「なっ!？」

クロノにぶつかる事で弾の起動がずれた。フェイトさんも俺が突然現れたことに驚いていた。

だけどフェイトさんはすぐにジュエルシードへ向かい、そして回収した。

（それでいい、それでいいんだ・・・フェイトさん。）

今大事なのはジュエルシードを手に入れて逃げる事。やっぱりフェイトさんのジュエルシード集めを応援するよ。

俺が何とかプレシアを説得するから。だから頑、張れ・・・

意識はぶつりと途切れた。限界はとうに超えていた。当たり前前の結果だった。

フェイトは意識を失い執務官の少年に寄りかかる葵井元樹を見て助けにこうとした。

その右肩に手が置かれた。

「時空管理局執務官、ウェージ・バランサーだ。これ以上戦闘行為を続けるのなら強硬手段も辞さない。」

振り返るとそこには、バリアジャケットを纏った十代後半の少年がいた。

「フェイトから離れろ!!」

アルフが爪を振り上げ助けに来てくれた。けどフェイトは一瞬で悟っていた、アルフじゃこの執務官に絶対に勝てないと。

だからアルフに來ないでと言おうとした。そして、予想外の事が起きた。

「うわっ!？」

アルフの剣幕に圧倒されたかのように執務官は離れた。

そして、アルフと合流を果たした。そして転移魔法を使った。今の

状況では葵井さんを助ける事はできないと直感でわかった。
執務官が二人もいる時点で不可能な状況だった。
そして、転移した。

「ごめんなさい、葵井さん。」

（逃げてくれたか、まったく手間のかかることで。）

ウェージ執務官はため息を吐きながら空中から降りていく。

「すまないクロノ執務官、取り逃がしてしまった。今から俺は逃走者の追跡に入る。そちらは重傷者と二人を艦に乗せてくれ。」

「ウェージ執務官、艦長は私です。勝手な命令は困るのですが。」
突然空中に現れた映像になのはだけが驚いていたがウェージ執務官は冷静に返答した。

「そんなこと言ってる暇はないですよ艦長。それに、その少年は早くしないと死にますよ。」

「そうですね。今は細かい事を言ってる場合じゃない。」

二人の執務官に言われてリンディはやれやれと思いながら返事を返した。

「分かりました。ではウェージ執務官は逃走者の追跡、クロノは三人を連れてきてください。」

その言葉を皮切りにウェージ執務官は転移魔法を使い追跡を開始した。

置いてけぼりなのはとユーノは事の成り行きを黙ってみていた。

そんな二人にリンディは微笑みながら言葉をかける。

「そういうわけで御二人とも、ちよつとアースラまで来て詳しい話を聞かせてもらえるかな。」

突然振られたが、その言葉になのはとユーノは同意した。

「艦長、ちよつと良いですか。」

そこでクロノが声を上げた。

「なんですかクロノ、何か問題でも。」

別に艦に連れ込む事は問題ではなく、むしろ普通である。何も問題がないとはずだとリンディが思っているとクロノはこう言った。

「今、僕に寄りかかっている少年なんですが、息が止まっています。」

《時の庭園 五分後》

「何しに着たの、これ以上私に何を見せようとするの。」

プレシアの目の前にはいまだ蝙蝠が集まりきれてないミイラがいた。蝙蝠の大群になったミイラは、そのまま飛び続けて時の庭園に再び訪れたのであった。

「Reen・感想を聞きに着た。どうやらお気に召してもらえたようだな。」

プレシアは疲れきっていた。玉座に座りただミイラを見つめるだけだった。

「感想、ね。それはどちらの方。」

「本来の記憶の持ち主に対する感想は必要ない。お前の自身を感じた感想に興味がある。」

ミイラのその言葉に、プレシアは素直な感想を述べる事にした。

まるで目の前の灰色の神父服の包帯男に懺悔ざんげするかのよう。

喜劇と悲劇への準備（後書き）

『喜劇と悲劇への準備 完了』へ続く

喜劇と悲劇の準備 完了

《海鳴市 夕刻》

アースラに乗艦したなのは達と入れ替わりに紅美鈴と九番目の実力者《友愛を示す者》エンシエル・エローウィが現れた。

「奴隷商人がここに来るはずでしたが、誰かがここで暴れたみたいですね。」

周りを見渡しながら紅美鈴は呟く。手には情報屋から渡されたメモと写真が数枚握られていた。

「情報屋の依頼で着たが、無駄足は困るな。」

ポッキーを咥えながらエンシエルは上空を見る。上空にはすでに何匹もの古の龍^{エンシエル}が待機している。

「とりあえず、俺の友人達で上空から搜索してみるよ。」

「では私はちよつとこちらを見ている船に乗り込んでみます。」

艦橋にいるアースラのスタッフは凍りついた。

そして次の瞬間、モニターが砂嵐になると同時にリンディの目の前に最初からそこに居たかのように紅美鈴が降り立っていた。

「始めまして、紅美鈴と申します。」

刃物のような冷たい瞳に時間が止まった。艦橋にいるスタッフは一目で分かった、少なくとも今ここにいるスタッフ全員で挑んでも勝ち目がない事を。

そしてその状態で何分経つただろうか、扉が開く音が聞こえた。

「えっ。」

「あっ。」

女の子と男の子の驚く声が扉の所から聞こえてきた。

「なのはちゃんにユーノ君、こんにちわ。ジュエルシード集め^{はかど}っ

てますか？」

冷たい瞳から一転、暖かい陽気な瞳に変わっていた。

やってきたのはリンディが茶室に出来ない事を不審に感じて様子を見に行った女性スタッフも帰ってこなくて不安に感じ様子を見に行った高町なのはとユーノ・スクライアだった。

「まだまだなの。それよりも美鈴さんは何でここに。」

「怪しい船だと思ってちよつと立ち入り調査に。」

えっ？ なにっ？ この空気の変わりよう？

「怪しい船って美鈴さん、管理局の船ですよ。」

男の子はため息を吐きながら言った。そして、その言葉に紅美鈴は驚いていた。

「そうだっतんですか。あの、もしかして公務執行妨害になったりしますか。」

「多分、大丈夫だと思います。」

不安そうに尋ねてくる紅美鈴にリンディは敬語になっていた。そして、遅れてクロノがやって来た。

「ええと、これはいったいどういう状況なんですか。」

クロノの質問にスタッフは同じことを思った。こちらが知りたいと。

《フェイト達の滞在するマンション 同時刻》

「フェイト、管理局まで来たんだ。あんな石を集めるのを止めて一緒に」

「ごめんアルフ、一人にさせて。」

アルフの言葉を遮りフェイトは一人、部屋の中に入ると閉じこもってしまった。

「フェイト・・・」

無理も無い、葵井元樹が管理局の手に渡ってしまったのだから。

本当はフェイトもアルフも無理をしても葵井元樹を助けたかっただろう。それほど大切な家族だったのだから。

「クソッ、全部全部あの女のせいだ、あの女さえいなければ」

「葵井元樹には会えなかったと思いますよ。」

アルフは固まってしまった。聞き覚えのある声、幻聴であるか願いたかった。

「まあ、原作介入を考えていた俺としては美味しい所を持っているから、少し残念だけだな。」

アルフは恐る恐る振り返ると、そこには男がいた。

「時空管理局執務官、ウェージ・バランスーだ。」

アルフは目の前が白くなっていくのを感じた。管理局に居場所がばれた、すぐにここに多くの管理局員がくるだろう。

「フェウぐっ!？」

だけどとつさに判断し、フェイトだけでも逃げてもらおうと想い叫ぼうとして口の中に何かが高速で入り込んだ。

「うまい棒っていろいろな種類があって美味しいですね。」

執務官の手にはうまい棒チーズ味の包みだけが握られていた。

「そんな訳でとりあえず言っておくが俺はお前達の味方だ。72人で管理局に潜り込んで情報を集める情報屋の部下といえは分かりますかね。」

「ふぁ?」

うまい棒のせいでうまく言葉を発する事のできなかったアルフであった。

「とりあえず、情報屋からの伝言を申し上げますと、お役に立てなくてすいませんだそうです。」

《アースラ内部 数十分後》

「本当に至^{いた}って普通の少年ですね。」

リンディを呼びに言ったはずの若い女性スタッフはあごに手を当てて、ベットの上で包帯を巻かれ点滴と輸血をもらっている少年を見ていた。

「転生者でもないのに原作介入するのは稀ですが、社長は何を危惧しているのやら。」

葵井元樹の髪の毛や唾液、血液などのサンプルはすでに回収済みであるため、立ち去るだけとなっていた。

「う　あ。」

どうやら目覚めるらしい。女性スタッフは姿を見られると厄介な事になるため足早に立ち去った。

少年は夢を見ていた、少年にとって酷な悪夢を。

「どうしたんだ、一人でこんなところにいて。」

真っ暗闇の中、女の子に少年は声をかけた。振り向いた女の子は泣いていた。

「嘘つき、お兄ちゃんの嘘つき。もう、近づかないで。」

あまりの唐突さに少年は面食らってしまった。

「ちよつ、何のことだ。いつ俺が嘘をついたって・・・」

「嘘つき、守ってくれるって言ってたのに、お兄ちゃんなんて嫌い！！」

女の子は少年に背を向けると走り去ってしまった。

「待って、待ってくれ。お願いだ。」

少年は追いかけようと右手を伸ばし、肘から先が無かった。

「えっ？」

驚いて立ち止まる。視線を下に向けると床には血が流れていた。後ろからも、前からも。

ゆっくりと視線を前に向けるとそこにいた。

真っ赤に真っ赤に原形を何とか保てた女の子が立っていた。その子はおそらく泣いているみたいだった。

「嘘つき・・・」

「うあああああああああああああああつ!!」
息が乱れていた。それほど、今の夢は少年の心を大きく抉った。

「ハア、ハア、ハア、ああもうっ!!」

左手でベツトを本気で叩き付けた。点滴や輸血用の針が外れ振動だけが体に伝わってきた。

「なんでなんだ、なんで俺は力が無いんだ!!　なんで約束を守れなかったんだ!!」

込み上げてくる自分への怒り、少年はその怒りを自分にぶつけ叫ぶ。
「何より、なんであの夢を見たんだ!!　未練がましいんだよ、過去に囚われるなよ、いい加減前を見ようよ、葵井元樹!!」

暗示のように自分に叫ぶ。今は過去に囚われてる状況じゃない、まだ可能性のあるあの家族の未来を何とかしてやらなきゃならない状況なのだ。

「だから、今は過去を忘れる。前を向いて歩いてくれ。頼むよ、俺・・・」

どのくらい時間が経っただろうか、落ち着きを取り戻した少年はようやく回りを見ることができた。

服は病人が着るような服になっており、傷口には包帯が巻かれていた。

「ここはどこなんだ、というより誰かいないのか。」

今更ながら今いる場所を不思議に思いながらベツトから降り立ち、部屋から出て行く。

行くあても無く、怪我の痛みも感じずふらふらとふらふらと歩いた先に人は見つからず、少年は手近な部屋の中に入った。

「すいません、ここってどこですか。」

部屋の中は和風であり、そこに五人の人が正座で座っていた。そのうち三人が見覚えがあった。というよりさっきまで一緒にいた

人だった。

そして、部屋の中にいる人全員が少年に当然の如く視線を向けていた。

《五分前》

「率直に言わせてもらうと、ロストログアの回収は危険すぎる。後は管理局に任せてもらいたい。」

と言うはずのクロノが言ったのは意外な言葉だった。

「今まで危険なロストログアの回収、感謝します。これからはこちらと共に回収をしませんか。」

その言葉を聞いて、なのはとユーノは『はい!!』と元氣良く答え、リンディはいきなりの息子の申し出に驚いて目を丸くした。

「・・・一ついいですか。」

紅美鈴はクロノとリンディの二人を見つめて言った。

「公安の人が民間の協力を得るのは構いませんが、普通は民間人は危険な事に巻き込まないようにするのはないですか。」

「クロノ、私も美鈴さんと同じ意見ですが、何か考えがあるのですか。」

「ごもつともな二人の疑問にクロノはしっかりと自分の言葉を口にする。」

「彼女達はもう立派な当事者だ。なら最後まで結末を見る義務がある。なにより逃走した二人は君達と何かあるのだろ。ならしっかりと気持ちを伝えるべきだ。」

その後にクロノが気まずそうに『さっきは仲裁に入っただけ』とボソツと言ったが・・・

「そうですね。ならその言葉を信じます、でもその言葉が嘘なら私は貴方達を全力で潰します。」

紅美鈴の言葉にリンディは凍りつきそうになったがクロノは毅然と

していた。

「美鈴さん、潰すのはだめなの。」

なのはの言葉に紅美鈴は『冗談ですよ』と答えた。

「ごほんっ、話を」

「艦長は今黙ってお茶を飲んでいてください。絶対に話の主導権を持つていかれますから。」

その言葉にリンディはションボリお茶を飲むことにした。その様子になのはとユーノは苦笑いするしかなかった。

クロノがこのように言うようになったのは同じ執務官であるウェージの教育のおかげであるが、教育は思いのほかうまく具合に行っらしい。

「・・・なんていうか、お母さんは大切にしたほうがいいですよ。」
紅美鈴もリンディを憐れに思っあわたのかクロノに少し注意の言葉を投げかけた。

「ええ、大切にするのは時と場合によります。それよりも今は」

「すいません、ここってどこですか。」

突然の扉の開く音と共に、寝ていなければいけない重症者が姿を現した。

全員が視線を向ける最中、重症者は部屋の中を見渡しポツリと言った。

「違う、明らかに和が違う。」

そんな事を呟くとリンディに指をさして宣言した。

「和を勘違いしてんじゃねえっ!!」

「いきなり酷い言われよう!？」

リンディのリアクションを少年は無視してズカズカと中に入り左拳を血が滲むくらいの強さで握りしめる。

「俺が、この部屋を変えてみせる!!」

「とりあえず黙ろつか。」

クロノは冷静に少年の傷口をつついた。一同は激痛に顔を歪めてうずくまる少年をすぐに想像してしまったが、少年は何食わぬ顔で立

っていた。

「ああスマン、熱くなりすぎた。」

少年は冷静になった。そんな少年に対し、なのはは一つ気になることを聞いた。

「あの、包帯が滲んできてるけど大丈夫なの？」

クロノがつづいたためか包帯は赤く滲んできていた。だが、少年は予想以上の答えを返した。

「大丈夫大丈夫、俺は無痛症だから。」

その答えにその場全員が聞き覚えのないワードに疑問符を浮かべた。

無痛症 体の痛みを感じない病。無痛症患者は痛みを感じない事により自らの体の異常に気付くことがなく、取り返しのつかない状態になる場合もある。

葵井元樹がジュエルシードを右腕で殴り消し飛んでも平気そうだったのも、プレシアの雷を何度も受けて立ち上がったのも、この症状が原因であった。

《時の庭園 一時間前》

「あの記憶を見て、私がどれだけ愚かで滑稽だったかが分かったわ。」

「プレシアはミイラに己の罪を懺悔していた。」

「私は・・・母親失格だわ。」

「ああ、そうだな。お前は娘に対し取り返しのつかないことをした。だがな、まだ間に合う。」

その言葉にプレシアは悲しそうに首を振った。

「無理よ、あの子は私を恨んでいるわ。それに私の病はもうすぐ私を殺すわ。なら、せめて私を恨んだまま別れたほうがあの子のためになる。」

その言葉を聞き、ミイラは微笑んだ。

「そんな風に思えるのなら大丈夫だ。正直言つて、無理やり記憶を流し込んで人格崩壊するんじゃないかと思っていたが、逆に狂気が消えた。」

嬉しそうに、嬉しそうに笑いながらプレシアに語りかける。

「だからこそ言えるがあの子は恨んじやいない、あの子はお前のために今もジュエルシードを集めている。まあ、アルフは恨んでいるみたいだがゆつくり時間をかければ和解できる。今すぐにとはいかないが、俺は人の体の構造も弄^{いじ}ることができからあんたの病も治せる。時間もたつぷりできる。」

人を多く殺してきた男の、その希望的な言葉にプレシアはそれでも悲しそうだった。

「それでも無理よ。知ってるでしょ、私は何の力もない葵井元樹という男をも傷つけた。いえ、殺しかけたわ。あの少年は今頃フェイトに私のした話を話しているはずよ。だから」

「あの少年はそんな些細な事など誰にもしやべらんよ。それにアルフに引き渡したときには無傷の状態にしておいた。」

葵井元樹の事が分かつているかのようにミイラは言った。そして、プレシアの目の前で煙草を取り出すと口に咥えた。

「フェイトのために死に掛けてでもあんたに立ち向かったんだ、今頃少年はお前ら親子の関係を何とかしようと頑張ってるさ。」

今頃その少年は流れ弾で死に掛けていたりする。そうとは知らずにミイラは最後の押しを言う。

「だからさ、フェイトやフェイトのために頑張る少年の思いを受け止めてくれないか。」

「でも、今更あの子にどう接すればいいの。あんなに酷い事をしたのに。」

口に咥えた煙草に火を点けながら器用にミイラは答えた。

「そんなの決まってる、アリシアに接していた時と同じようにフェイトにも接すればいい。難しい事だが同じ娘なんだ、できるだろ。」

煙草の煙を肺に満たし、ゆっくりと息を吐く。不思議な事に煙は出なかった。

「だから次に彼女達が来たときは謝ることだ。その後に真実を伝えるのもよし、隠すのもよし。もしも隠すのなら俺も協力する。」

その言葉を聞いて、プレシアは幾分いくぶんか迷った後に、迷いを振り切ったかのように自らの答えを出す。

「そうね。私は酷い母親だったけど、あの子達のために心を入れ替えるわ。ありがとう。」

その言葉に照れくさそうにミイラはプレシアに背を向ける。

「別に、ただあんな事は二度とごめんだったから俺が勝手に御節介をしただけだ、感謝は無用だ。」

そして、ミイラは立ち去ろうとしたところでプレシアが呼び止めた。プレシアは憑き物が落ちたのか過去の優しかった頃の雰囲気を感じていた。

「最後に聞きたいのだけれど、なんで貴方は無関係な私たちのためにここまでしてくれたの？」

その問いかけに、ミイラは振り返って答える。

「そうだな、俺は」

顔の包帯に手を掛けながらミイラは言う。

はずだった。

「ハッピーエンドにはさせないってのよ、葬儀屋。」

首の中に冷たい鉄の感触が入り込んできた。

「な、ん？」

ミイラは首から異物を手で取り去る。入り込んできたのは果物ナイフだった。

「ああああああ あああああああああ

ああ

ああ
あああ！！！！」

プレシアの悲鳴が聞こえた。急いで振り返るとプレシアの中に赤い霧のような何かが入り込んでいた。

そして、赤い霧のような何かがプレシアの中に入り込むとプレシアは笑っていた。

「さすが無印のラスボス、この力は素晴らしい。これなら葬儀屋も葬る事ができるってのよ。」

「・・・復讐者か。」

ミイラは自分が嫌になった。どうやら自分がやった咎は関係のない者まで苦しめるらしい。

ミイラが知る由もないが、葵井元樹が時の庭園に来たときの赤い霧はまさに復讐者が展開した霧だった。そして、復讐者が展開していた霧はミイラが現れたことで一時的にその霧の色を無色透明にしてごまかしていた。

「なあ、そいつは関係ないんだ。すぐに解放してくれないか、でなければ無理やりにも引きずり出す。」

ミイラは体に乗っ取られたプレシアに対し、静かに殺しの思考に切り替える。

「嫌だね、俺は貴様に家族をすべて殺された。貴様を殺さんと気が済まないってのよ。」

プレシアの体に乗っ取った誰かは醜く笑う。

「だからさ、死んでくれよ葬儀屋。その後にジュエルシードを使ってアルハザードに行くからさ。家族が待ってんだってのよ。」

ミイラは懷から玩具の拳銃を二つ取り出し、銃口を一つ向けた。もう一つの銃口は何があっても対処できるようにどこにも標準を向けていなかった。

「なら、俺はお前を引きずり出す。」

ミイラは宣言をした。その宣言がおかしかったのか相手はプレシアの体で大きく笑いながら呟いた。

「地の底の人形共、相手を喰らえ、犯せ、蹂躪しろ!!」

その言葉と共に床に大きな穴が時の庭園中に現れ、そこから全身に人の皮膚を被ったビニール人形と血液を吐き出しながら頭を高速で回転させてる木の人形が次から次と這い出てきた。

「さあ殺し合おう葬儀屋。この体は病に侵されながらも魔力で満ち溢れている、今は素晴らしい気分だっ!!」

ミイラは圧倒的な戦力差に玩具の銃を床に落とした。

「そうだよな葬儀屋、いくら強かろうと勝てないよな、勝てないってのよな!!」

逃げる、どうやって? 霧になっても蝙蝠になってもこの人形の物量なら殆どの俺の体は捕まってしまうだろう。そうなると俺は回復するまで行動ができなくなる。そしたらプレシアの体に乗っ取った奴は好き勝手に動くだろう。

「さあどうする葬儀屋、それとも命乞いをするか?」

おそらくプレシアを攻撃した程度では引きずり出すのに意味が無いだろうし、周りの人形が邪魔をするのだろう。

やはり最後に残された手段は逃げるの一つしかないか。俺は力はあるってもチートじゃないんだ。人を操るにも一応時間がかかるし、そもそもプレシアに乗り移ってる奴はさっきから俺の空気感染が効いていない。

「この手はあまり使いたくなかったんだがな。」

ミイラのその呟きに相手は隠し玉があったことに身構える。

そして、ミイラは一瞬で狼化して人形を掻い潜るように疾走した。つまり分散しないで一つの塊になり逃げた。

「ちょっ 葬儀屋、逃げるつてのかよ!？」

狼化は素早い動きができるが武器を持てないのと他の能力が使えないという弱点がある。

まあ、ミイラの持つ能力は全てが長所と短所がある。なによりミイラは一对多数の戦いと範囲攻撃使いが大の苦手である。というか勝つことが珍しい。

思い返せばジュエルシードにより巨大な木が現れた時に、偶然の事故とはいえないのはの砲撃を喰らい体半分を持っていかれたし、温泉の時に襲撃者二十人を倒せたのは本当に相手が雑魚の雑魚なのと自らが暴走したからだ。

なによりミイラは不意打ちが一番得意なのだ。なので転生前は転生者をそれで倒してきた。

つまり何が言いたいのかというと、実際はミイラはそんなに強いわけではない。

「待てつてのよ葬儀屋つて病が!？」

吐血した体に乗っ取られたプレシアを振り返ることなく人形の無駄のない攻撃を避けながら逃げる。

体制を整えなくてはいけない。現状を打破するために。

そう思った狼化したミイラの背中に何かが突き刺さった。

《? 深夜》

情報屋は椅子に座りながらため息を吐いた。今日は色々ありました。まずは紅美鈴さんにきつい一撃を受けて映姫様に会いました。

エンシエルさんから無駄足じゃねえかと古龍達の集中砲火を浴びて映姫様に会いました。

転生者で部下であるウェージからあんだどんだけ役立たずなんだよと言われてへこみました。

泣きつ面に蜂でアースラのスタッフとして潜入させていた男性スタッフが行方知れずだとウェージから聞きました。

さらに泣きつ面にスズメバチで葵井元樹がアースラの中にとウエージから聞いて完璧に自分の無能さがわかってへこみました。

さらになんやかんやで管理局となのは達が協力することになり、そのあと葵井元樹がリンディに和がなんたるかを教えて大変だったと聞いて『あゝ』と口から白い何かが出ました。

さらにプレシアが体に乗っ取られたてミイラが行方不明になったという情報を聞いてもうどうにでもなれと思いました。

それを聞いた山猫がバイクにまたがり時の庭園に行こうとしたのを止めようとして轢かれて映姫様に会いました。

・・・

「ふふつ、ふふふふふふふふふふふふふふふふふつふ。」

疲れました。もう非常に疲れました。とんでもなく疲れました。ええ疲れましたとも。

「ふふふ・・・人生って素晴らしい。」

涙しか出ません。本当に今日は厄日ですって。これでなんかあったらもうブチ切れます。

「パパー。」

なんか娘が来ましたもうハハハです。

「どうしたんだシニス、何かあったのか。」

「私が出てきたときに一緒に出た緋色の花を片づけたよ。偉いでしょ、パパ。」

なんだろう、最後の最後で良い報告が来たああああああああああああああああ。

「それとママがバイクで轢いてごめんなさいだって。」

「別に気にしてないからいいですよ。さて、私も動きますかね。」

私は幸せ者だ。だからこの幸せが続くようにそろそろ私も動きます

か。

《災厄伝承》の二つ名は飾りじゃないんだからな。

「パパ、どこか行くの？」

娘が情報屋を見つめる。その娘に対し、情報屋は微笑みながら答える。

「すぐに帰ってきますよ。シニスも夜遅くなんだから早く寝るように。」

「分かった、お休み！」

さて、家族と恋人とその他多数のために頑張りますか。

情報屋は今知らない。緋色の花と共に現れた幼い少女が一つの事件の中心となることを今はまだ知らない。

喜劇と悲劇の準備 完了（後書き）

妖気「長文になってしまった。」

ミイラ「それどころか、いろいろな場所で色々起きてるな。」

妖気「いや、俺って群像劇が好きだからこんな構成に。」

ミイラ「そして一つ言えることは更新が遅い。」

妖気「それは言わんといてな。そう思うでしょ、今日のゲストの紅美鈴さん。」

紅美鈴「知りませんよ、そんなこと。」

妖気「そうですよー、俺に味方なんていませんですよー。」

ミイラ「次回に続く。」

ミイラ不在の物語進行

《アースラ》

唐突だが、とりあえず断言できることがある。

葵井元樹の料理は健康に良い。

それがアースラのスタッフとなのはとユーノの感想だった。

「鯖味噌定食いっちょあがり。」

そして美味しい。その腕を見込まれて、その少年はアースラの食堂で働いている。

最初は身柄を拘束していただけ。それが今では左手を器用に使い絶品料理を作りアースラ内での評判は上々。

「人生なにが起きるか分からないねユーノ君。」

「そうだね、なのは。」

かくゆう二人も葵井元樹が時間を掛けて作り出した自家製白味噌の味噌汁をすすった。

なのはは学校を休み親元を離れてユーノと一緒にジュエルシードを管理局の協力の下で回収に励んでいる。ちなみにフェイト達とは遭遇していない。

そして今、なのはは食堂エリアでユーノと共に白身魚定食を食べていた。ユーノは煮魚定食だった。

厨房からは料理を作る音と葵井元樹の指示の声が聞こえてきていた。

「葵井さん、食事の時間になると大変そうだね。」

「そうだね。けど葵井さん、なんだか輝いてるの。」

葵井元樹は怪我が完治してないのに生き生きして料理を作ってるのだ。何人かの人と協力して料理を作っているが、協力というより手

伝いの人に葵井元樹がこれまで培ってきた料理の腕を教えていると言ったほうがいいかもしれない。

その理由はメモ帳に記入しながら料理を手伝うなんて器用な事やっている人がいるためである。だが、それは一部で殆どほとんどの人がメモ帳に記入しながら料理を手伝うということを卒業している。

「本当にありがたい話だよ。今までの食事なんてマンネリ感爆発の味気無い物だったからな。」

なのはとユーノが食事している席の隣に鯖味噌定食を持ったウェージ・バルンサーが座った。

19歳のお兄さんの存在であるウェージは、なのはとユーノと出会ってすぐ打ち解けた。さすがは転生者、精神年齢34歳は伊達ではない。

「そうですね、私もあれを毎日食べるのはちよつと・・・」

あの味気ない料理は栄養価は高いのだが食べる側からすると不評である。せめて資本の企業が作っている様々な味のレーションが食べたいのである。

ちなみに資本の企業で働く兵隊さんは焼き肉味はあまり食べないこととで有名である。

「だろ、あの少年が来てから楽しみが増えたとスタッフ全員が喜んでるんだよ。」

鯖の身を器用に箸で取り口に運ぶ。実に美味しい、このために生きている。役立たずのボスからの給料と差し引いても割に合わない危険な仕事をやってるんだ。大体にして管理局の潜入で月給19万円ってふざけてるだろ、しかも管理局の方が給料高いしボスもつと金出せよ、というか支援も何もないのに正体バレたら俺は管理局に一生追われることになるつつの、味噌汁美味い。

「急に泣き出してどうしたんですかウェージさん？」

あれっ本当だ、ユーノの言うとおり俺の瞳から透明な液体が流れている。

「いや、人生は楽しいなって。」

その言葉になのはとユーノは顔を見合わせて不思議そうにウェージを見た。

「なにか、大変そうなの。」

「そうだよ、だから二人とも大人になったらストレスが少なくて安全な職を探すんだよ。」

さりげなく原作崩壊を促してみる。別に最後に将来を選ぶのは二人なんだから関係ないと自分の心に言い聞かせる汚い大人なウェージがいた。

そんな彼に天罰が下りた。突然警報が鳴り響いた。

『エマージェンシー、捜査区域の海上にて大型の魔力反応感知。』

「えっちよっと、俺食い始めたばかり・・・本当に人生は素晴らし
いよチクショウー!!」

海上でフェイトとアルフは暴走した複数のジュエルシード相手に苦戦していた。

モニター越しの映像を見てリンディはなのは達に言葉をかける。

「残酷なように見えるけど、私たちは常に最善の策を選ばなければ
ならないの。」

「艦長の言葉は無視してなのはとユーノはすぐに現場に向かってく
れ。」

クロノは食事を食べ損ねて落ち込んでいるウェージを慰めながら二人に指示を出した。

「最近、親というのが何なのか分からなくなってきたわ・・・」

「まあまあ艦長、子供は常に成長するんですからいつかは立派に巣立ちますよ。」

エイミイの慰めにならない慰めを掛けられたリンディは何とも哀愁を漂わせるオーラが・・・

「母さん、落ち込まないでください。それに感情論の方が世の中う

まくいくとウェージ執務官がいつていたので　　」

「クロノは私よりウェージ執務官を選ぶのね。」

クロノの言葉にさらに落ち込むリンディ提督。木枯らしが吹いているのは気のせいだろうか。

「艦長、お茶をお持ちしましょうか。」

「お願いするわエイミィ、砂糖は多めで・・・」

「とりあえず、モニターの向こうで非常事態が起きてるんだからしつかり仕事しろよ。」

ウェージは何とか立ち直りモニターを見る。なのはとユーノが転送されている。

「ん？」

画面の端で何か見えた。

「エイミィ、ちよつと左端にレンズを向けて拡大してくれ。」

二つ返事でエイミィが言われたとおりに作業をした。

「・・・時空管理局執務官ウェージ・バランサー、アホを連れ戻しに海上空域に向かいます。」

モニターには物凄い勢いで落ちていく葵井元樹の姿が見えた。

どうやって現場上空に現れたのか不明だが、このままいくと海にバチャンなので救いにいく。

（本当に割に合わない仕事だよ。）

その割に合わない仕事を受けているウェージは現場に向かうため、転送装置を使う。

そんな彼にエイミィが一言。

「あつ、転送先が別の場所になってる。」

「なんですと!?!」

ウェージ、時すでに遅し。

海上で戦うフェイトの魔力は底を尽きそうになっていた。そして、葵井元樹という支えを失ったフェイトはアルフの支えでここまでやってこれたが、もう限界だった。

「フェイトちゃん！」

そして、なのはが丁度着たのはフェイトにとって幸運だったのだらう。

「ジュエルシードと一緒に封印しよう。」

その言葉と共になのはのデバイスからフェイトのデバイスへ魔力が供給される。

「あつ、ありがとう。」

そして、ここからさらにフェイトに幸運が舞い降りた。

「フェイトオオオオオオオオオオオオ！！」

聞き覚えのある声、フェイトが上を向いた。

「えっえっ？」

拡声器を持った葵井元樹が上空から自由落下していた。

「えっあつ、葵井さん！？」

動揺するフェイトに葵井元樹は拡声器の音量を最大にして叫ぶ。

「元気にしてたかフェイト！ 少し痩せたようだがご飯はちゃんと食べていたか？ ちゃんと睡眠はとれていたか？」

拡声器越しに響いてきた声は田舎のお袋みたいな言葉だった。

一瞬、フェイトは気が抜けそうになったが現在進行形で少年は海面に向けて落下中である。

急いで葵井元樹を助けようとフェイトが動こうとした所で、変な場所へ転送されたウェージに代わり現場に急行したクロノが葵井元樹を掴んだ。

安堵したフェイトに向けて葵井元樹は叫ぶ。

「がんばれフェイトさん。これ、差し入れだ！！。」

「ちよつ、あぶないです葵井さん。」

葵井元樹が不安定な体制で投げ渡した物をフェイトが受け取るのとクロノが葵井元樹に文句を言うのは同じタイミングだった。

投げ渡された物、それはジュエルシールドだった。そして、ジュエルシールドが輝きフェイトの今までの疲労は吹き飛んだ。

「なのはさんから拝借した奴だ、それをお願いして上空から落ちる羽目になった。本来はフェイトさんの疲労が楽になるようにとお願いしたんだが、なんで空から落ちる羽目になるんだらうか。」

「にやつ！？ いつのまに！？」

驚いてデバイスを確認するのはに詫びを入れながら葵井元樹は最後の言葉を口にする。もはや葵井元樹は数回の接触でジュエルシールドの扱いに慣れたみたいだった。

「フェイトさん、今は管理局に拘束されて一緒にいけないが俺はいつまでもフェイトさん達の味方だ。だから頑張れ、そしてお節介としてだが、今暴走しているジュエルシールドを封印したら、なのはさんと一回話し合うことだ、以上。」

言いたいことを言い終えた少年はそのままクロノによりアースラへと回収された。その時、一切触れられなかったアルフが酷く落ち込んだのは言うまでもない。

と、そこでアルフの目の前にひらりひらりと紙が落ちてきた。

その紙には『尺の都合上言えなかったが、今まで俺がいない間もフェイトさんを支えてくれてありがとう。拘束から解放されたら特上のお肉を用意するから声を掛けなかったのは許してな。』という文章が書いてあった。

それを見てアルフは立ち直ったどころかフルパワー全開になった。ちよろいものだ。

「相変わらずだね、多分向こうでも今みたいな調子だったんだよね。」

葵井元樹と再会できて無事が分かったフェイトの表情は明るく見えた。

「うん、いつも周りに気を配っていてくれてたの。」

なのはのその言葉にフェイトは変わらぬ様子の葵井元樹の姿を思い浮かべ、そして

「お願い、ジュエルシードの封印に力を貸して。」

フェイトはなのはに協力を求めた。

「うん、うん！一緒に頑張ろうフェイトちゃん！！」

葵井元樹の与えた影響は本来の歴史をねじ曲げた。

本来なら、なのはとフェイトが和解するまでにはもう少し先になるはずだった。

「デイベイイインバスタアアアアア！！」

「サنداアアアレイジイイイイ！！」

それが今は二人は協力してオーバーキルを繰り広げていた。さりげなくユーノとアルフも協力してサポートをしている。

葵井元樹の登場はこの歴史に善い影響を与えたのだろう。

ただ、二人が和解したきっかけとして一番大きいのは、海鳴温泉だろう。

ミイラが死にかけて、ヒロイン二人が死に、そしてアルフとユーノが内蔵にトラウマになった事件。

あれが二人の距離を縮めた一番の要因である。

つまり何が言いたいのかというと・・・

「どうすれば友達になれるか分からないけど、友達になって、くれますか。」

見事に原作は崩壊した。決闘がする必要がなくなった。

フェイトの申し出を聞き、なのはは感極まっていた。

もし、空から葵井元樹が落ちてこなければ、さっきまでの暗い表情のフェイトならば辛うじて原作崩壊はありえなかった。

だから、このまま原作崩壊してハッピーエンドで終わる可能性もあった。

ただ、変な場所に飛ばされたのウェージの言うとおり人生は楽しくて素晴らしい物だった。

海上上空の雲行きが怪しくなり、辺りが暗くなってきた。

「ごふっつ、この体もそろそろ限界になってきたつてのよ。」

プレシアの体に乗っ取った奴は玉座に座りながら吐血した。

「もっ少しの辛抱ですよドルマスター。それよりも先ほどの雷の一撃は原作よりも強すぎたのではないですか。原作保守派としてはいただけない展開ですぞ。」

傍らの紺色のスーツを着崩した初老の男性が表情を変えずに非難の言葉を述べた。

「分かっているつてのよ。だがまだこの体は馴染めてないつてのと予想以上にプレシアの意識の抵抗が強いことで力を制御しきれないんだ。これくらい大目に見てもらいたいつてのよ。」

つまらなそうに呟くプレシアの体に乗っ取ったドルマスターを一瞥して紺色のスーツの男は文句を口にする。

「原作崩壊派には些細な事かもしれませんが保守派にとっては気になつてしょうがないんですよ。」

「んな事を言つたつてこれからやるのは原作を大きくぶっ壊すものだつての。お前も分かっているだろ。」

その言葉に紺色のスーツの男はそうだったと思ひだしこれからの方針を口にする。

「大部隊を使い時の庭園に来たアースラを落とし管理局に宣戦布告をする。そして管理局が管理している世界を次々奪い取り次元間の覇権を手に入れる。」

「その過程で妨害してくる奴らはぶっ潰すつていう予定だったが、その中で私怨も含めて潰すはずだった葬儀屋は仕留めたつての。」
「そう言つと、ミイラを仕留めた時を思ひだしドルマスターは醜く笑つた。」

「アルハザードへ行けば家族に会える。その後に家族を蘇らせて世界征服、面白いつてのよ。」

一人愉快に笑うドルマスターを特に何も思わず警告の言葉だけを言う。

「面白くてもいいので足元をすくわれないようにしてもらいたいも

のです。奴隷国家の王様。^{ドールマスター}」

《???》

「情報屋、俺もお前には世話になっている。だからお前に協力をし
てやろう。」

「御協力ありがとうございます。」

情報屋は畏まった状態で礼の言葉を述べた。その様子がおかしいの
かモニターの向こうの男は笑った。

「まったく世の中は金以上に分かん。あの【災厄流出】と言われ
た史上最悪最強のゲスの転生者が今じゃ偽善に走ってるのだ。一つ
質問するが今回の件は自分で解決した方が早いと思わんか？」

「ルシフィさんの悪口は言わないください。これ以上侮辱するの
なら許しませんよ・・・」

ルシフィの傍にいた山猫が剣呑な声でモニターの向こうの男に威圧
する。

「山猫、怒らなくていい。俺は今は【災厄伝承】だ、役立たずの平
和ボケの俺には遠い過去過ぎてとくに断ち切った過去だ。」

何ともなげに情報屋は言った。その様子を見てモニターの向こうの
男は興味深げに情報屋を見た。

「本当に変わったな、だが気を付けたほうがいいぞ。表向きはロス
トロギアの暴走として処理された旧暦462年の次元断層による複
数の平行世界の消滅事件も証拠を固められればすぐに懸賞金の上乗
せで再び指名手配されるぞ。」

「主に裏社会の賞金稼ぎにですよ。責任は全て自分にあるとはい
え昔の事件を根に持つとは管理局も黒いことで。」

「お前も昔は黒かっただろ。」

モニターの向こうの男は昔の情報屋を思い出し、懐かしむ。

『あまりにも悲惨すぎて管理局などが民衆が恐怖で恐慌状態にならないために隠し通した災厄。裏世界の賞金稼ぎに頼むしかできない、まったく俺が協力者だとばれたら殺される。頼むからこちらの組織に逃げ込んでくるなよ、確実にウチのボスはお前を匿って全面戦争をしそうだからな。そうなたらお前を管理局に突き出して俺は逃げるからな。』

山猫はモニターの向こうの男を睨むがモニターの男は気にすることなくいる。その様子に情報屋はハハハと苦笑いするしかできなかった。

「肝に銘じておきます。それでは貴方の軍隊に幸運があることを。」
『災厄から幸運を願われるとはな。では、こちらは国家攻めが一つあるんだ、この辺でお開きにしよう。』

その言葉と共にモニターはぶつりと切れた。

「はあゝひやひやした。山猫、よくもまああの男にたてついたな。」

「ルシフィさんがそばにいてくれれば怖い物なんてないですよ。」
屈託なく言われた言葉に情報屋は後頭部を掻く。

「そうだな、お前のことはずっと守ってやるよ。そのためならいくらでも強くなるし偽善も積み重なる。すべてはお前のためにな。」

「ルシフィさん・・・」

その言葉を聞き、山猫は頬を赤くした。なんとも甘い空間になりつつある部屋の中に扉が開く音が聞こえた。

「パパ、ママ、お客様がきた・・・よ。」

シニスが扉を開け、閉めた。

「空気、読まれましたね・・・」

「そ、そうだな・・・」

気まずい空気が流れる。すぐく、気まずい。

「お客様が来たみたいですね。」

「そ、そうみたいだな。」

固まっただけでも仕方がないので二人して部屋から出ると、廊下には

シニスが立っていた。

「パパ、ママ、邪魔しちゃってごめんなさい。」

「いや、気にしないでいいから。それでお客様はどんな感じなんだ。」

情報屋の質問にシニスはお客様の特徴を思いだしながら口にする。

「翼が生えた女の子とメイド服の女の子だった。」

明らかに奇妙すぎる特徴に情報屋は厄介な客が来たなと思う。どうやら山猫も同じ思いらしい。

「どうしたのパパ、ママ。」

不思議そうに首をかしげる娘に対して『何でもないですよ』と笑顔で言う山猫。

その様子を見ながら情報屋は心の中で思う。

（さっきの誓いは少し訂正だな。山猫やシニス、大切な家族のために頑張らないとな。）

そう誓いながらお客様の注文を聞きに歩いていく。

打てる手は打った。あとは新たな打てる手が増えるのを待つだけだ。全てはお客様のために。

ミイラ不在の物語進行（後書き）

妖気「今回は情報屋の裏の頑張りの一部が入っています。」

ミイラ「それと管理局に拘束された葵井の待遇だな。」

妖気「あれは拘束というのか？」

ミイラ「いや、アースラ内を自由に動いてるみたいだし拘束とは呼べないと思う。」

妖気「そうだな、そして本編でミイラが不在になってしまったがそれよりも重要なことがある。」

ミイラ「なんだ？」

妖気「高校の三期末考査の英語ライティングで25点を取ってしもった。」

ミイラ「・・・次回に続く。」

妖気「スルーしないで!!」

悲劇への一直線（前書き）

鬱になった。

自然と鬱になった。

悲劇への一直線

《アースラ》

「ジュエルシード、俺に力を貸してくれ。」

葵井元樹は誰もいない部屋の中でなのはから黙って拝借したジュエルシードを握りしめていた。拝借した方法は企業秘密である。

「今しかないんだ、頼む、俺をプレシアの下へ飛ばしてくれ。俺に奴と話す機会を作らせてくれ！！」

今、なのは達は集まっている。おそらく黒幕がプレシアであることに気付いたのだろう。

急がねばならない、このままじゃ彼女達は破滅の終わりになってしまう。

「もう誰かが傷つくのはうんざりなんだよ！！」

ジュエルシードは輝きを放つ。無論、この魔力反応ならアースラの中にいる人達全員に気付かれるだろう。

だが、気付いたところで少年を止められるわけがない。周りには誰もいないのだから。

「うおおおおおおおおおおおお！！」

この瞬間、葵井元樹はアースラから消えた。

《時の庭園》

時の庭園にたどり着いた少年が最初に見た光景は、床に横たわるロボロのフェイトだった。

人間は怒りの感情が臨界点を超えると、もはや怒りが湧き起こらな

らしい。

「ごめんな、もっと早くたどり着けばこんな目に遭わなかったのに、本当にごめんな。」

気を失っているのか返事はなかった。少年は奥の方を見据える。いるはずだ、大馬鹿者の母親が。

「すぐに戻ってくるから、待っててな。」

少年はそう言い残すと奥へ奥へと歩いていく。左拳にジュエルシードを握りしめて。

そして、タイミング悪かったとつくづく思わされた。

視界の先でアルフが吹き飛ばされていた。その光景を見て左手のジュエルシードに願う。

「アルフさんを、安全な場所に飛ばしてくれ。」

その声にアルフさんとアイツは俺の存在にようやく気付いたようだった。

「葵井、さん？」

アルフの声と同時に左手のジュエルシードは輝き、アルフの周りは輝きだしていく。

「管理局に助けを求めてくれ。彼らなら助けてくれるから。」

少年はアルフに微笑みながら言う。その微笑みは死を覚悟した表情だった。

「なんで葵井さんがここに・・・いや、それよりも逃げて葵井さ」

アルフの言葉は最後まで続かず、一瞬の閃光と共にどこかへ消えた。

「ふう。なんでこんな事になったんだろな。なあ、どうしてだと思っ。プレシアに化けているお前。」

その言葉にプレシアの体に移っているドールマスターは驚いていた。

「ほう、俺がプレシアじゃないと分かっているのだったのよ。ちなみに、化けているのではなく乗り移っているが正解だったのよ。」

その言葉に葵井元樹は首を横に振る。

「質問にはちゃんと答える、改めて聞くがどうしてこんなことにな

《海鳴臨海公園 二日後 早朝》

高町なのはとユーノ・スクライア、アルフは臨海公園に向けて走っていた。昨日、アルフから大体の事情を聞いたなのは達は、フェイトの事やプレシアの事、時の庭園に現れた葵井元樹について話していたらなのはの携帯電話にメールが届いた。

メールの内容は、指定された時間に双方全てのジュエルシードを賭けて真剣勝負をしるという内容だった。

なのは達は畏だと思いながらも受けることにした。プレシアの居場所も逆算できるように準備も整えた。

そして、そんな準備万端な状態で最後の決戦へ挑む。

なのは達が臨海公園にたどり着いた時には、フェイトはベンチに俯うつむいた状態で座っていた。

「フェイトちゃん、約束通り来たよ。」

返事はなかった、それどころかピクリとも動かない。

不思議に思いながら三人は近づくと、フェイトは虚ろな瞳でゆらりと立ち上がった。

「。。。。」

そのまま、前のめりに目の前にいたなのはに倒れこんだ。

「フェイトちゃん!？」

「フェイト!？」

なのはとアルフは驚いてフェイトの名を呼ぶが返事はなかった。

「とりあえずフェイトをアースラに収容しよう、急いで!!」

《アースラ》

艦橋にはなのはに支えられたフェイトを含め、主要人物全員が集まっていた。

フェイトは心が壊れたようで、喋れる状態ではなかった。

プレシアの居場所がわかると意気込んでいたアースラクルーに重い沈黙が降り注ぐ。

当然のごとくフェイトのデバイスの中にはジュエルシールドは一個もなかった。

相手からの行動もなく逆探できない。

八方ふさがりだった。

その状況を見て執務官、ウェージ・バルンサーは艦橋から出て誰もいない個室で携帯電話を取り出す。番号を押し目的の人物を呼び出す。

「もしもし、ボス、話がある。」

『ダメです。時の庭園の場所を教えてはいけません。』

自らのボスである情報屋の答えにウェージは怒鳴り返す。

「ああじゃあ敬語はやめて地で話す、もうこちらら限界なんだよ！
！　　なんであんな小さな子が心を壊されなきゃいけないんだよ！！

不条理すぎるんだよ！！」

『座標を話せばなぜ座標を知っていたのか怪しまれる。あなたの身が危なくなりますよ。』

「承知の上だ糞野郎！！　俺は情報こそが万能で最強だと思うからあんたの下についた、誰かを救えるからこんな割に合わない仕事をしてるんだよ！！　社員のニーズに応えろよ糞野郎！！」

『何度も言いますが、ダメです。これ以上事態を拗^{こじ}らせたら取り返しのつかないことになります。』

その言葉にウェージは携帯電話を床に叩き付けた。画面が割れパーツが飛び出して壊れた携帯電話を見ながらウェージは捨て台詞をいう。

「ああ分かった、じゃあこちらで勝手にやってるよ糞野郎。」

《時の庭園 五分後》

ウェージ・ balanサーは時の庭園で次元震を起こした。ウェージ・ balanサーの能力は重力制御、その能力の応用で重力を不安定にして本当に小さな次元震を起こした。

「こんな小さな次元震を起こすだけで俺の体はボロボロになるとは、本当に嫌になってきたな。脇役はいつつもこんな役回り、まあ良いか。」

異常を感じ取ったのか機械の兵隊の群が現れた。すでに力を使い果たしたウェージは座り込んで近づいてくる人形の群を見上げる。

「道は作った。あとは任せたぞ、みんな。」

大きな槌を持った機械の兵が得物を振り上げる。

「同じ槌ならヴィータに叩きつけられた方が美談として残ったかもな。」

その呟きに誰も答えない。喋るデバイスが欲しかったなと思いつながら、ウェージ・ balanサーは振り降ろされた槌に叩き潰された。真っ赤な水溜まりを広げながら。

《アースラ 艦橋》

「艦長、ごく小規模な次元震をキャッチ、それと微弱な魔力反応・

・ってなんで!？」

「どうしたのエイミィ？」

リンディの問いに信じられない物を見るかのようにエイミィは報告する。

「この魔力反応はウェージ執務管の・・・艦長、問題の空間に巨大建造物を確認、時の庭園です!！」

その言葉に艦橋にいた職員全員の目の色が変わる。

「武装局員を直ちに現場へ転送して、それから医務室にいるのはさん達をすぐにここへ。」

そして、リンディは最後にこう付け足す。

「それと、転送ポートで海鳴市に行ったウェージ執務官が今何処にいるのか調べて。嫌な気がするわ。」

その直感はずでに当たっていた。それが分かるのは少し後の事になる。

《????》

一度諦めかけていた糸口が仲間の死により作られた。

その事を能力により知った情報屋は息をゆっくり吸い、呟く。

「馬鹿野郎。」

正直言つて無駄死にだった。

敵はあと一時間もしないうちに行動を起こすことを情報屋は知っていた。

その事を伝える前にウェージは携帯電話を壊した。

そして、三十分も経たないうちに死んだ。

「馬鹿野郎。」

その呟きは誰にも届かない。

情報屋は部下であり仲間である者の死を悲しみながら、なすべき事をやる。

「頼むから、もう誰も死なないでくれよ。」

その呟きは届かない。どれだけの思いを込めても、誰にも届かない。

《????》

煙が空へ上がっていく。

狼煙は異常なしを伝えてくる。

その光景を見てその場にいる人達全員の士気が上がっていく。

彼らは手に武器を持ち始まりを待っている。

彼らには一貫して同じ特徴がある。犬耳に尻尾、ドッグナー犬人種と呼ばれる種族だった。

彼らは待つ、始まりが来るまで。

その始まりを栄光で終わらせるため。

【時の庭園崩壊まで、あと僅か】

悲劇への一直線（後書き）

妖気「葵井とウェージが死んで、書いてる自分が鬱になってしまった。」

ミイラ「なら生かせばよかったのに。」

妖気「それはそうだが、何故が無心で書いていたらこの文面になっていた。」

ミイラ「つまり無意識にお前は悲劇を望んでいるということになるぞ。」

妖気「ははは、鬱になる物語はたくさん読んできたからな。」

ミイラ「まあ、せいぜいハッピーエンドで終わるように頑張るんだな。」

妖気「・・・善処します。」

ミイラ「次回に続く。」

喜劇への上昇

《????》

ようやく管理局の武装局員が来たか、遅すぎるが彼らは肝心の所で噛ませ犬になることが多いからな。まあ興味が無いからどうでもいいが。

まあ、その前に執務官が一人来て次元震を起こした後に死んじまっただが、さてさて死体はぐつしより潰れて・・・思い出しただけで何とも言えぬこの気持ち。

これが欲に言う嫌悪感だとしたら、俺はこの嫌悪感を充分に堪能したい。

まあ、充分堪能する前に片付けられて残念だったがな。

ああ、この噛ませ犬達の死体が早く見たい。ほら、あいつなんて大人しく拘束されるなんて噛ませ犬特有の言葉を言ってるじゃないか。それにしてもあんな装備でよくまあ任務に励めるな。俺なら任務を放棄して逃げるところなのに。

あらら、武装局員がこちらに向かってきた。俺の姿を見てどんな反応をするか楽しみだ。

ふむ、扉を開けた瞬間やつぱり驚いてるな。中には俺の姿を凝視している奴もいる。

・・・そんなに見られると恥ずかしいんだが・・・えっ俺の事じゃない?・・・そうか。

それにしてもドールマスターはよくあんなに声を張り上げれるものだ。それにあの演技力はもはや達人レベルだな。

おーおー、武装局員が攻撃してるがドールマスターは完璧に防いでるよ。

おっと、広域魔法を使ったか。よくまあ俺には当たらなかったものだ。まあ、姿を現してないから当然だが。

だが残念だ。死体が一つもできていない。俺の期待を返してもらいたいものだ。

おっ、演説モードに入ったか。よくまあスラスラ言えるな。

というか、酷い物言いだな。フェイトの事を人形とかアリシアの代わりだとか、言って善い事と悪い事があるというのに。

というか今のフェイトの状況が分かって言ってるんだよな、フェイトが今どんな状態が分かっていつてるんだよな。

・・・なんか頭に血が上ってきたな、すごく頭に血が上ってきたな

ぶち殺されたいみたいだな。

《時の庭園》

武装局員は全滅した。プレシアの力は強大だった。

プレシアはモニターで見ているであろうフェイトに心無い言葉を浴びせかける。

心がすでに壊れたフェイトは自分の姉にあたるアリシアの姿を見て、

プレシアの気持ちを聞き、さらに壊れていく。

「フェイト、私は貴方の事が大嫌いだったのよ。」

なのはに支えられるように立っていたフェイトは、その瞬間に本当の意味で心が砂のように崩れていくのを感じた。

その光景を見て、ドールマスターに体に乗っ取られたプレシアは泣いていた。

もし、今の自分が包帯男と出会う前の自分だったらきつと同じことを言っていただろう。それが自己嫌悪に陥らせて、それを他人が勝手にあたかも今の自分の本心のように語っているのが許せなくて、それが悔しくて泣いていた。

（せっかくお前を目覚めさせてアースラの中の様子を見せてるのに何泣いてるんだってのよ、お前が言いたかったことを代弁してるつてのに感謝してもらいたいってのよ。）

（黙れ！！　今すぐ体を　　）

（怖い怖い、ちゃんと体は返してやるよ。すべて終わった後だがなまあ余命はわずかになるが気にするなつてのよ。それとおまけにお前は全てを失ってる状態にもなるつてのよ。）

そう言い捨てるのと強制的にプレシアの意識を眠らせた。そして能力でアースラの中を覗いてみて心の中で楽しく思う。

（暗い表情はそれだけで俺を癒してくれるつてのよ。葬儀屋の暗い表情も見たかったが、殺してしまったから仕方ないつてのよな。）

葬儀屋を仕留めた時を思い出してみる。狼になって逃げようとした葬儀屋を隠れていた傭兵が七支刀で背中に突き刺してそのまま床に縫い付けて、その後はドールマスターの人形が食い散らした。

その後、七支刀を背中に背負った傭兵が依頼達成の報酬を求めてきたから報酬を渡したらさっさと帰って行ったな。

さすがは元神狩り^{ヴェル・グルン}、今度会ったら俺専用の私兵として雇おうかなつてのよ。

そう思いながらアリシアの入った容器を見る。いつもと変わらない姿のアリシアがいた。

「私はアリシアと共にアルハザードへ……え？」

《アースラ》

「フェイト、私は貴方の事が嫌いだったのよ。」

その言葉はフェイトの心を完全に粉々にした。もう、立ち直れないほどに。例えるならば石は砕かれても接着剤を使えばくつつくし何とか元々の形にする事が出来る。だが、粉末にされたら元々の形にする事はできない。

もはや、フェイトはモニターを見るだけの人形と同じだった。

せめて、葵井元樹がそばに居てくれればフェイトはまだ大丈夫だったのかもしれない。

だが、葵井元樹はフェイトの目の前でグチャグチャになった。だからもうフェイトは感情を無くした人形を続けるしかない。

そして、モニターでは動きがあった。フェイト以外の人はモニターの一部を凝視していた。今までの暗い表情など軽く吹き飛ばされる事だったと言えるだろう。

『私はアリシアと共にアルハザードへ……え？』

ドールマスターでさえ今の現実に驚きの声を上げた。それ程までに、異質な光景と言えるだろう。

アリシアが、瞼を開けていた。そして、アリシアの入っていた容器はアリシアが右手で触ると割れた。

中の液体が外に流れ、アリシアは一糸纏わぬ姿で容器から外へ出た。そして、混乱して動けないドールマスターの腹に拳を入れた。

「なに、これ……」

なのはの呟きに誰も答える人はいなかった。リンディですら目を丸くしてモニターの様子を見てるのだから。

『ぐつ、なん、アリシア、なんで。』

腹を抑えながら言うドールマスターの言葉にアリシアは冷めた目つきで言葉を放つ。

『茶番はやめろ、ドールマスター。そろそろプレシアの体を解放したらどうだ。見ていて不愉快だ。』

女の子らしからぬ言葉使い、それよりも気になったのはプレシアが操られてるという物言いだった。

『・・・貴様は誰だつてのよ。』

ドールマスターは口調をプレシアのそれから自分の口調に直す。そんなドールマスターの顔にアリシアの膝ひざがめり込んだ。

『俺の事が分からないのか、少し悲しいな。』

そのまま流れるような動作でアリシアの回し蹴りが頭の側面に直撃してプレシアは倒れ伏した。

その様子をアリシアは冷めた目つきで見下ろしながら言う。

『なあ、そろそろ暴露しろよ。彼女の名誉のために、でなきゃお前を強制的に引きずり出すぞ。』

アリシアの右手には何か黒い物が集まりだし、そして一本の小ぶりのナイフが握られていた。

そのモニターの様子にアースラの中にいた人は付いていけてない様子だったが、そんな事はお構い無しにプレシアは立ち上がる。

『ククク、ククククク、クハハハハハハ。まさか最後の最後でこんなイレギュラーが起るとは一体誰が予想できるつてのよ。ああ、名乗ろうじゃないかってのよ。我が名はドールマスター、第54管理外世界の王と言った方がいかなつてのよ管理局の犬共。』
その言葉と共に次元震が起きた、ジュエルシードと時の庭園の動力炉の暴走が始まった。

『俺は次元断層を起こしてアルハザードに行くからせいぜい足掻いて見せなつてのよ、非力な者ども!!』

そこで何を思い出したのかドールマスターは何かを思い出したかのようになつて一つの質問をする。

『そういえばだが、お前たちが来る前にこちらにやってきた執務官
つてお前達の知り合いか。殺しちまったから名前が分かんつての
よ。』

「出ました、第54管理外世界、現地名称スラーヴェキングダム。
奴隷産業が盛んなこの世界は一つの王朝に統治されていて王は代々
ドールマスターと呼ばれているみたい。」

艦長の指示によりエイミーが調べた結果すぐにヒットした。現在モ
ニターの向こうではアリシアが子供とは思えぬ動きで縦横無尽に走
りドールマスターや傀儡兵の攻撃を避けながら逃げていた。

そして、別のモニターではクロノとなのはとユーノがちょうど現場
に転送されたところだった。

「代々ドールマスターは他者に移り移る事ができるみたい。つまり
プレシアは今は体を乗っ取られているようです。」

その報告を聞きリンディはなのは達に指示を出す。

「みんな聞いたわね、敵はプレシアじゃなくてドールマスターだけ
どやることは変わらないわ。次元断層の発生を阻止して。そしてウ
エージ執務官の仇を取って!!」

《時の庭園》

時の庭園はボロボロになっていた。床が抜けて虚数空間が見える部
分もあった。

その中をドールマスターとアリシアは対峙していた。

「逃げるばかりじゃつまらんつてのよ。その手に持つナイフは飾
りかっつてのよ。」

「これでも複数を相手にするのは俺が最も苦手としてね、さらに範囲攻撃は絶対に俺が苦手とする相手なんだ。」

その言葉を聞きドールマスターは顔を歪めて笑う。

「なら、お望み通り範囲攻撃の魔法を御馳走してやるつてのよ。」

ブレシアは周りの傀儡兵を巻き込む形で当たり全体へ雷を放つ。衝撃で煙が出て視界が見えなくなる。

そして、煙が晴れるとそこにはアリシアを守るように防御魔法を使っている頭から血を流しているクロノがいた。

「君、ここから先は僕たち管理局に任せてくれ。」

クロノはアリシアに向けて避難勧告を出したがアリシアは聞く耳持たずでこう言い返した。

「丁度良いタイミングで来たが一つ言わせてもらう。仲間一人死なせてしまったくせに任せるも何もないだろ。」

「黙れっ!!」

クロノは怒鳴るとアリシアに言う。怒りの感情を堪えるかのように「それとこれとは話が別だ。君がどうやって蘇えたか知らないけど、それでも君は民間人だ。すこし戦える程度で」

「お前の説教なんか興味ない。それに俺はお前よりも強いと思うが。」

「もういい、邪魔だけはするな。いいな!!」

そう言い、クロノは眼前の敵に集中する。クロノは信頼を寄せる先輩を殺されても決して怒りに全てをゆだねない。

ウェージはクロノの先輩として戦いのイロハを教えていた。その中の一つにこんな言葉があった。

『決して、感情を押し止めるな。その感情を自分を見失わず制御して力に変えてこそ一人前だ。』

その言葉をクロノは守る。そしてクロノはドールマスターに突撃しようとしたところで異変に気付く。

突然、紅い霧が後ろからクロノの周辺に漂い始めた。冷静にクロノは周りを見ると後ろにいるアリシアの口から紅い霧が吐き出されていた。

「ちよつ、嘘だろ、まさか!？」

動揺しながらドールマスターが後ずさる。そして紅い霧がアリシアの口から全て吐き出されたと同時にアリシアは糸が切れたかのように倒れた。

紅い霧はドールマスターとクロノの中間の位置に集まりだすと人の形になっていく。そして、色が紅から灰に変わりそこにはアリシアの死体に移っていた一人の男が立っていた。

「そうだよな、いちいち他人の体で戦うよりも自分の体で戦った方が感覚は掴みやすいよな。」

何が『そうだよな』か分からないが、そこには灰色の神父服を着たミイラが立っていた。そのミイラはクロノに振り向いて言う。

「さあクロノ、一緒にぶつ倒すぞ。」

「親しげに言っているがちよつと待て、名乗ってもないのに何で僕の名前が分かるんだ!？。そもそも今のは一体なんだ、あの子は蘇っていたんじゃないのか!？」

軽く混乱するクロノ、その様子にやれやれと首を振りながらミイラは答える。

「吸血鬼は肉体という機械を魂というコントローラーで動かす、そういう事にしといてくれ。」

「いや、訳が分からないし。てつちよつ、ということは君はアリシアの魂なのか。」

クロノは混乱しているのでミイラは一言口にする。

『理解しろ。』

低く重圧感のある声が響くと同時にクロノは理解した。頭の中に無数の情報が流れ込みクロノは溜息を吐く。

「無茶苦茶だ、とりあえず君の非常識さが分かったよ。それと、この戦いが終わったらあの子に謝るべきだ。」

「言われなくても。さて、じゃあ行きま」

「お前は殺したはずだあああああああああああああ
あああああ！」

恐怖に引きつるドールマスターはミイラに向けて魔法を放った。狙いが甘くミイラの顔の側面を掠り^{かす}そのまま後方にある壁で爆発を起こした。

そして、ミイラの顔の包帯は一部が破けて、それをきっかけとして緩んで顔からずれて床に落ちた。

「あーあ、せっかく顔を隠していたのに。」

《アーセラ 医務室》

フェイトは医務室のベッドの上で虚ろな瞳で複数のモニターの光景を見ていた。だが、どれも何も感じない。

母さんが体に乗っ取られていたと知っても他人事のように感じる。
あの白い子の呼びかけに応じようと思うけどやっぱり他人事のように感じる。

アルフが私に何かを言ってるけど音だけしか分からない。ううん、本当は分かっている。

いつも通りに戻ってほしいと言ってるくらい。だけど、戻り方が分からない。

私は壊れたみたい。そんな私を今も他人事のように感じている。モニターからの様子だとアルフは白い子達と合流できたらしい。アルフは葵さんが死んだ事を知らないから戦えるんだよね。

アルフが葵さんが死んだ事を知ったら私みたいに壊れるのかな。けど、薄々感じてるかもしれない。アルフも白い子も他の人たちも

私の壊れた状態を見て。

でも、どうしようもない。すべてが他人事のように感じるから。

ああ、モニターで見える光景で、あの黒い人は頭から血を流しながらお姉ちゃんを守っている。痛くないのかな、あつ、お姉ちゃんが何か言って黒い人に怒られてる。

あつ、お姉ちゃんの口から紅い霧が出てる。紅い霧が集まりだして灰色になっていってる。あつ、人の形になった。

あの姿はいつぞやのミイラさんだ。懐かしいな、何でこんな場所にいるんだろう。

あつ、母さんがミイラさんに攻撃した。ん、この場合は母さんをつ取ったドールマスターがミイラさんを攻撃したが正解かな。

ミイラさんの顔を掠^{かす}って包帯^{ほど}が解けていってる。あの顔の下には何があるのかな。

あれ、あの顔、どこかで見たことがあるかな。あれ、もしかしてあれって……

「葵井……さん？」

フェイトの目に感情の明かりが宿っていく。砕かれた石は、接着剤でくっつけることは不可能でも鉄鉱石ならば磁石で鉄を集めて熱で固める事が出来る。

その熱で固められた鉄はもはや生半可な事では砕くことはできない鋼となるか簡単に砕ける屑鉄になるか。

それを決めるのはベッドから身を起こし自らのデバイスを握りしめるフェイトのみ。

「この瞬間、灰色の吸血鬼、葵井元樹は時の庭園に再び姿を現した。」

喜劇への上昇（後書き）

妖気「生きてたんだな。」

ミイラ「しぶとく、それでいて読者の予想を裏切る方法として。」

妖気「あれは誰しも予想を裏切られたと思うが、アリシアファンに怒られるんじゃないか。」

ミイラ「怒られたら怒られただ。」

妖気「お前の開き直りはすごいよ、葵井元樹。」

ミイラ「ミイラと呼んでくれ。ミイラという名前が気に入ってるから。」

妖気「そうか。ちなみに国の説明どうしよう。」

ミイラ「あのドールマスターの国か。設定を考えてなかったのか？」

妖気「もちろん。まあ、後で考えよう。」

ミイラ「後でと言って絶対に考えないパターンだな。」

妖気「次回へ続く。」

喜劇と悲劇の終着（前書き）

今回はPCで見ることをお勧めします。

喜劇と悲劇の終着

《???? ???? ????》

それぞれの思いが渦巻く最後の戦い。本来居るはずもないイレギュラー達のおかげで話はややこしくなっていく。

この物語の主人公はもはや白い魔法少女だけではなくなった。いや、白い魔法少女ですら脇役に等しいだろう。

なにせ、この物語は全てが主役であり全てが脇役である。

そんな話にあなたは何を求めますか？ ハッピーエンドですか？

バッドエンドですか？ それとも両方ですか？

私ですか？ そうですね、私は語り手、語るだけで十分です。

《時の庭園》

「どうやら片方の暴走は片が付いたようだな、さあどうするドールマスター。」

クロノと二人がかりでドールマスターをジワジワと追いつめながらミイラ 葵井元樹はナイフを振り切る。

「くっ、だがもう少しで配置は終わるってのよ。ちょうどアースラの艦長もここに来てるみたいだし形勢逆転だってのよ。」

ナイフを杖で防ぎながら余裕の表情を取り戻したドールマスターは嘲笑いながら言う。その言葉に反応したのはクロノだった。

「また傀儡兵を出すつもりか、だがその程度で僕達を止められると思っているのか。」

『Stinger Ray』

クロノは言葉と共に魔力弾をドールマスターの後ろから撃ち放つ。

ドールマスターは当たる直前で無理にその場から横に離れる。葵井元樹は自分に迫る魔力弾をナイフで弾いてドールマスターに当てた。「ぐっ、今の攻撃を防げないとは本当に病の体は使えないってのよ。まあいい、使い捨ての体だ、次は調度良い死体があるしそれに乗り移させてもらおうってのよ。」

ドールマスターの視線の先には横たわるアリシアの死体があった。その死体を守るように葵井元樹が立ち位置を変える。

「まったく、家族を失った痛みが分かるならアリシアに乗り移るとか止めてくれないか。」

「お前が言っかったのよ、俺の家族全員殺したくせに。」

睨みながら言うドールマスターに悪びれた様子を見せずに葵井元樹はナイフを逆手に持ち走り出す。

「いくらでも言ってやるさ、今の時点ではお前が悪いんだからな。」魔力弾を喰らい動きが鈍っているプレシアの鳩尾みそおちにナイフの柄の部分を優しく当てる。

「これでチェックメイトだ。クロノ、俺ごとバインドを掛ける。」

「ああ、決めてくれよ葵井さん。」

『Bind Open』

ドールマスターは葵井元樹ごとバインドに掛けられた。

「くっ、何をするつもりだったのよ!!」

もがこうとするがバインドが邪魔して動けない。魔法を使おうとすれば鳩尾に当たるナイフが魔力を拡散させる。

「簡単だ、俺の体と一緒にだってもらう。強制治療だ!!」

その言葉と共に葵井元樹とドールマスターの体は蝙蝠となっていく。

「まさかプレシアの体を再構築させる過程で不純物である俺を追いつつもりかっつてのよ!? させんぞ葬儀屋、うおおおおおおお おおおお!!」

その瞬間バインドが解けて葵井元樹は吹き飛んだ。その反動で蝙蝠は元の宿主へと帰っていく。

「ちっ、Anti-Magical-Link Field。AMFか、

厄介な物を出してきたもんだ。というか何で使えるのか不思議だ。」
舌打ちをしながら空中で体勢を立て直す葵井元樹。クロノはそんな葵井元樹に言葉をかける。

「どうするんだ葵井さん、魔法が効かないんじゃないでしょうか。」

見た感じドールマスターは限界に近づいてきているみたいだったが不用意に近づくとか何を受けるか分かったものではない。

「仕方ない、じっくり攻めていくぞ。」

その瞬間、絶望的な状況が襲いかかってきた。

エイミーからの通信で動揺した言葉がかけられる。

『なにこれ！？ アースラ、所属不明の大型艦に囲まれてます、その数二千隻・・・まだ増えてるってどういうこと！？』

「ようやく配置されたか。ここまで俺を苦しませた褒美だったのよ、教えてやろう。これは俺の国の最大にして唯一の戦力、『ティンダロス』の獵犬」だったのよ。」

勝ち誇ったように言うドールマスターに艦橋にいるアースラのスタッフは恐怖したかもしれない。

「質と量だったのよ、今まで隠し続けていた分もすべて投入している。アースラを沈めた後はそのまま管理局そのものを叩く。我々は栄光を宣言するってのよ！」

『よろしいならば戦争だ。』

そう、絶望的な状況が訪れた。ドールマスターに圧倒的な力を持つて。

ドールマスターの言葉にスピーカーで響いたような声が聞こえると外の方で何かが撃ち落とされたような爆発音が聞こえた。

「なっ、何だったのよ！？」

スピーカーから聞こえたかのような声を聴き、葵井元樹は懐かしむように目を細める。

「五番目の実力者《軍を統率する者》シュリー・イタカ。所有戦力が多すぎて所属する組織でも計算が面倒で把握できていない実力者

ドールマスター、本当に観念して投降した方がいいぞ。」

葵井元樹の言葉を裏付けるかのようにエイミィが新たな正体不明の艦隊が出現して撃ち合いを開始したと言っていた。そして、スピーカーの声も葵井元樹の声に應えるかのように名乗る。

『いかにも、俺は五番目の実力者である。管理局の者よ、俺はある者の要請によりこの場に参った。共に状況の打破をしてもらえると助かる。』

懐かしい声に葵井元樹は要請してくれた誰かさんに感謝をしながら、同時にこんな大体的に姿を現して組織の存在とかばれないか疑問に思いながらシュリーにお願いを口にする。

「シュリー、頼みがある。ドールマスターにこいつの国の今の映像を見せてくれないか。」

『今気づいたが、その声は葬儀屋か。懐かしいな、ここしばらくの事を話し合いたいがその時間も今はないのが残念だ。よかるう、映像を今だしてやろう。』

シュリーは快くドールマスターに見えるように映像を出してくれた。葵井元樹はドールマスターの心を揺さぶるためのお願いをした。そして、実際にドールマスターの心は揺さぶられた。

「なんだ、なんだこれはつてのよ。」

空中に映し出された映像にはどこかの国で戦争が終わったかのような凱旋の行進をしている兵隊たちの映像が映し出されていた。

「あそこに映ってるのはリリオとリユネか、どうやら勝ったようだな。それと、もとからいた国民も革命軍を笑顔で迎えてれてるようだな・・・ドールマスター、国民からも信頼は薄いと見える。」

「黙れつてのよ、あの国の国民は俺の物だ。奪われたら取り戻すまでだつてのよ。」

その言葉とは裏腹にドールマスターの言葉は震えていた。

そして、ドールマスターは魔法を放つ。その行為に葵井元樹とクロノは目を見開いた。

「な、何をやってんだ!？」

そして二人の砲撃が敵を飲み込む。

「『ぎゃああああああああああ！』『』『』」

壁を貫通した砲撃の直線上にいたドールマスターの艦隊の悲鳴が轟いたが誰にも届かなかった。

「フエイト！　良かったあ、本当に良かったよう。」

戦闘が終わった後、アルフがフエイトに抱きつかれた。

「今まで心配をかけてごめんねアルフ。ちゃんとこれから終わらせて、それから始めるよ、本当の私を。」

「なら、お客様はこれから急いでプレシア様の所へ行くべきです。

お客様の声でプレシア様を目覚めさせてあげましょう。」

どこから現れたのか山猫を引き連れた情報屋がボロボロになって歩いてきた。

「フエイトちゃん、知り合い？」

「うん、何回かお世話になった人。」

「お世話になったただなんてとんでもない、ほとんど役に立たなかったのですから。」

疲れたように言う情報屋に対してアルフは睨みながら言う。

「そうだね、フエイトが苦しんでる時も何もしないで傍観していただけのお前が、こんな場所で一体何をやってたんだい。」

その言葉に情報屋はただ淡々と告げる。

「今更のアフターサービスですよ。本来ならなのはさんが何とかするはずだった暴走の奴を止めてきただけです。ちよつとなのはさんには一緒にプレシアさんを説得してもらいたかったので。」

「にやつ！　　何で私の名前が分かるの！？」

その驚きに情報屋は懐ふしの中に手を入れる。

「それが情報屋クオリティですよ。それよりも早く行った方がいいですよ、時の庭園がいつ崩壊してもおかしくないのです。それとこれが私が止めてきた代物しろものです、よろしく願いします。」

言い終えると共に情報屋は本来なのはが止めるはずだった物を引き渡すのだった。

情報屋はフェイト達を見送りながら呟く。

「彼らには伝えなかったが、リンディさんが次元震を止めることはできないか、最悪のパターンだな。」

後ろにいる山猫はただ黙って情報屋の呟きを聞く。

「俺はこの原作を良くしたくて裏方として動いた。何か余計なことが起こるたびにその対処に動き回った。具体的にはフェイトさんと接触して、葵井元樹をプレシアさんに送りつけて、シュリーさんに軍隊を出せるように協力を取り付けて、私は役立たずを演じた。他にも数えればきりが無い。」

情報屋の言葉には疲労の他にも感情が混じり合っている。そのほとんどは悔しさや悲しみが占めていた。

「その結果がこの戦争まがいの現状と私の部下の死、本当に、何なんだろうな。俺は誰も死ななくて、誰もが笑って終わり、誰もが満足して終わる、そんな結末を描いていたのに。」

原作よりも酷くなってしまった。その事実が重くのしかかる。

「本当にハッピーエンドって難しいよな。昔の災厄を振りまいていた頃の俺じゃ絶対にぶち当たらない壁だよ。」

そしてそのまま沈黙が流れた。いつまで続いただろうが、最初に沈黙を破ったのは山猫と呼ばれる女性だった。

「私は、本来の歴史がどんな終わり方をするか分かりません。けど、ありがとう。」

山猫は深くかぶったフードを取り外す。露わになった表情は、真面目そうな雰囲気^{かも}を醸し出していた。

「ルシフィさんがあの場に来てくれたおかげで私は今も生きていることができます。それに、ルシフィさんはまだやるべきことがあります。だから、こんな場所で立ち止まらないでください。」

そう言いながら山猫はルシフィに後ろから抱きついた、強く強く。「だから、悔やまないでください。私は苦しむルシフィさんの姿を

見るのが一番嫌なんですから。」

その言葉に情報屋は目を閉じて答える。

「こんな俺を好きでいてくれてありがとう、最低な俺を真っ当にしてくれてありがとう。」

再び目を開けた情報屋の目はただ強くどこかを見つめていた。

「だから、これからよろしく頼む、リニス。」

情報屋は山猫の本当の名前を口にした。そしてふと思う、本当の名前を言ったのは今この瞬間が初めてじゃないのかと。

「もちろんです、ルシフィさん。」

嬉しそうに答える山猫　リニスの声を聞き、情報屋は思う。

ああ、俺は戦い続けることができるよ。守りたい大切な人がいる限りずっと、ずっと。

《現在より少し先へ》

フェイト達が目的の場所にたどり着いたと同時にプレシアは虚数空間に落ちて行った。

それは理解できていた、だから聞きたい。俺は何をしていた？ 気が付いたら俺は一人で暴走しているジュエルシードの目の前に立っていた。

たしか、プレシアを救えなかったことをフェイトさんに全力で謝って、許してもらえたんだっけか？

『葵井さんは、悪くないよ。それに、最後に母さんは、私に愛してるって、言ってくれ・・・』

思い出した。フェイトは今まで無理をしていた反動でぶっ倒れたんだっけか。最後まで言い切る前に気を失って、意識を失う直前まで無理をしてたっけな。

いっそ罵ってもらった方が気が楽だったと思う。私の母さんを返し

てと言ってもらった方が楽だったと思う。

まあ、その後、俺はなんて言っただけかな。確かなのはには

『なのは、お願いがある。これからずっとフェイトさんの友達でいてくれ。』

その言葉にあの子は真剣に答えてくれたな。答えの内容なんて思い出さなくても分かる。

クロノにはなんて言っただかな。

『アースラの俺の弟子に伝えてくれ。料理人は食べる人が幸せになれば幸せだ、だから食べる人の幸せを願って作るんだ。そう伝えてくれ、一般人としての俺としてな。』

その言葉にクロノは黙ってうなずいてくれたな。

アルフさんにはなんて言っただかな。

『アルフ、今まで通りずっと家族としてフェイトを支えてやってくれ。それと特上肉の約束を守る事が出来なくてごめんな。』

その言葉にアルフは目に涙を浮かべていたな。

ユーノにはなんて言っただかな。

『俺がこの世界で初めて認めたフェレットがまさか人間だったとはな、本当に人間なのが残念だよ。』

そう言ったら、別れの挨拶なんだから別な事を言えないのかと突っ込まれたな。あれ、なんで別れの言葉なんだ？

それに最後にフェイトに何を言っただけ？

「ごめんな、つらい思いをさせてしまつて。俺がもつと強くなくてごめんな。そんな俺が言うのもなんだが、育ち盛りだから体には気をつけるよ。それとこれからは自由に生きろよ。」

全て思い出した。俺は死ぬんだつた。ドールマスターが置き土産として残した暴走したジュエルシードによる次元断層を防ぐために。

だから俺は最後にこう言い残したんだつたな。

『今まで騙^{だま}ってきて済まなかった。そんな俺が言うのも何だが、俺はこれからお詫びとして世界を救う。葬儀屋という次元犯罪者はこ

こで死ぬ。これほどのお詫びは多分他には無いな。』

自虐的な言葉に予想していたように引き止める言葉が来たよな。

『葵井さんが死ななくても他に方法があると思うの。だからやっぱり待つて、葵井さん!!』

『そうだよ、この子の言うとおり葵井さんが死んでいい理由なんてあるはずがないんだよ。それに葵井さんが死んだらそれこそフェイトが可哀想だよ。』

その言葉に俺はフェイト達に背を向けて言葉を言ったんだよな。

『眠れ』

その呪縛の言葉になのはとアルフは一瞬で眠ってしまったっけな。

そして、クロノとユーノをお願いしたっけか、早く転送してアースラの中に行けと。

その時に今着ている神父服を脱いでクロノにフェイトが起きた時に形見の品として渡してくれと言って託したっけな。だから俺は今灰色の包帯しか着てないんだっけな。

そして、つらい顔をしてアースラに転送されていったな。そんな一人きりになった状態で俺はなんて言ったっけ。

『行ったか、あの場所では言えなかったが俺は殺しすぎたんだ。最高評議会に目を付けられてるし、今は組織を抜けてる身だからもし死ななくても、ここまで派手に動いた俺は捕まって処刑されて終わりなんだよな。』

脳みそ共を思い出してつい笑いそうになってしまった。あんな滑稽な連中は殺すにも値しないからな。

「つと、そろそろ全部思い出したから最後の仕上げをするか。ハハッ、吸血鬼になって最初に飲む血が自分の血とはな。」

そう言うとうちの右腕に牙を突き立てて血を吸う。力が湧いてくるが酷い吐き気や激痛が体を襲う。

「やばい、視界がグニャグニャだ。やっぱり自分の血は吸ったらあかんもんだな。」

だが、泣き言も言ってられないか。俺の命一個で世界が救われるん

だ、本当に安いもんだ。

「あの世への片道切符、こんな居心地のいい旅は他にはないし、せいぜい楽しむとしますかな。」

そう言くとタバコを口に咥え火を点けて久々に執事のようなお辞儀を試してみる。やっぱりこのポーズは大きなことをする前にやると全てうまくいきそうな気がする。

『汝、満足であつたか。』

久々に俺を転生させた奴の声が聞こえた。

「ああ、満足だよ。なあ、これから俺は旅立つが景気のいい言葉を一つ言ってくれねえか。」

お辞儀のポーズのまま一つ尋ねるとすぐに景気の良い言葉が返ってきた。

『吸血鬼は旅をする。理由など特に無い。ただ、旅を続ける。それが吸血鬼の日常なのだから。』

その言葉に葵井元樹は笑みを浮かべると時の庭園から莫大な蝙蝠が生み出された。

「あつ、約束守れてないや。あの病院の前で集まることとか。まあ、来世があつたら思い出して自力で行くのも良いかもな。」

時の庭園が莫大な数の蝙蝠となつて虚数空間に落ちていく。それに巻き込まれるように暴走したジュエルシードも虚数空間に落ちていく。

「思えばフェイトを俺の妹と重ねてしまつて罪滅ばしで動いていたが、最後は違うように感じる。」

時の庭園があつた場所には何も無くなつており最後の一匹が虚数空間に入る直前にこう呟いた。

「本当の妹の様に思つたんだっけな。」

【この日、転生者の少年は虚数空間に落ちて消えた。空域では艦隊による撃ち合いが続いていたがドールマスターがプレシアと共に虚数空間に落ちたためすぐにドールマスターの艦隊は降伏した。この日、全てが終わった。】

《???? ???? ????》

今回は葵井元樹が主人公のように見えますが、今までの話を通してみると色々な人がその時その時の主人公として描かれています。

そんな物語を読み貴方は満足ですか。そんな貴方に質問です。世界は救われましたが貴方はこの物語をどう思いますか。

葵井元樹は満足して虚数空間に落ちたからハッピーエンドですか？それとも結局最後にフェイト・テストロッサはつらい目に遭うからバッドエンドですか？

けど、それを判断するのはもう少し先になります。

知ってますか、アリシアって実は虚数空間に落ちないでどこかの誰かにこっそり回収されたのですよ。

知ってますか、虚数空間の向こう側には何があるのか。

知ってますか、フェイトは周りにいた人達のおかげで立ち直れたのですよ。

知ってますか、実は世界は残酷であると同時に優しいのですよ。

喜劇と悲劇の終着（後書き）

妖気「というわけで旅をする気はなかった。つまりあらすじの一文はここに来ます。」

ミイラ「つまりタイトル詐欺だな。このダメ作者。」

妖気「返す言葉もありませぬ。それと伏線回収をどうしようか悩み中。」

ミイラ「回収しないのも一つの手だぞ。」

妖気「それもそうだが、まあ何とかするか。」

ミイラ「何とかするのもいいが、もうすぐで完結するだろ。」

妖気「そうだな、長いようで短いような。」

ミイラ「それより最後に目覚めた後のフェイトの描写は書かなくて良かったのか？」

妖気「俺程度の力ではうまく書けないと判断。それ故に読者のご想像にお任せしたいと思います。」

ミイラ「この作者はダメだな。」

妖気「面目ないです。ちなみに次回に続きます。」

後日談と未来への繋ぎ

《????》

「どうぞ座ってください。」

個室の中で情報屋はソファにお客様を座らせると、珍しく私服姿のリニスが情報屋には紅茶を、お客様にはジュースを差し出した。

「あ、ありがとうございます。」

お客様　高町なのはは緊張しているらしかった。

「そんなに緊張しないで楽にしてください。別に取って食うわけではないのですから。」

その言葉に緊張が解けるわけでもなく、仕方がないので緊張を解くために世間話をすることにした。

「先日、翠屋という店でお食事しましたけどとても美味しかったですよ。」

「なるほど、お客様のご友人の屋敷には沢山の猫がいるんですね。」

「うん、里親が見つかるかと寂しくなるってすずちゃん言ってるけど、それと同じくらいとても嬉しそうなの。」

だいぶ緊張が解けてきたみたいだ。いつの間にかリニスがクッキーを焼いて持ってきていてくれた。

「何の話をしているんですか？」

「お客様のご友人についての話ですよ。リニスは知ってるんじゃないか、月村邸の事なんだけど。」

その言葉にリニスは少し考えてから思い出す。

「ええ、とても素敵な場所だと猫達から聞いています。」

「えっと、猫たちからですか？」

その言葉にクスリと笑いながらリニスは自らの素体となった山猫の

姿になった。

「えっ、ふええええええええええ！？」

「私はルシフィさんの使い魔ですよ、だからこちらが本当の姿だったりします。」

コーノインパクトの再来になのはは驚いていた。その光景を見てさらになのはを驚かせる言葉をリニスは放った。

「ちなみにネタ晴らしですけど以前はこの姿であったこともあるんですよ。」

そう言うと、リニスは再び人の姿になる。そこには高町なのはが以前会ったフード姿の女性がいた。

「時の庭園で会った時に言うべきだったけど、あの子と友達になってくれてありがとう。」

「本題に入りましょうか。お客様の今回のお求めの情報は一つ。今回の事件のあらまし。では話しましょうか。」

今回の事件はジュエルシードを巡る争いにどっかの管理外世界の王様が目を付けたことで歴史的な大事件となってしまった。

「ミッドでは大騒ぎでしたからね、自分達の世界よりも格下だと思っていた世界が実は自分達よりも格上で、危うく滅ぼされかけたのを何とか努力して追い返して、またその後に関手側で革命が起こったことにより九死に一生を得たということで報道されてましたからね。」

実際は管理局は戦っていなかったり、革命の他にも第三者の介入や次元断層が起きかけたりしていたが、ちょうどいい程度に情報を捏造しないと管理局の信頼とかがガタ落ちになるのでほとんどの人は事実を知らない。

「捏造でしたけれど、管理局艦隊とスラーヴェキングダム艦隊の戦闘は迫力物でしたね。事実を知っているお客様としてはどう思いますか。」

その言葉になのはは顔を曇らせる。

「あの戦いは、とてもつらい物なの。多くの人が死んで、フェイトちゃんは大切な人を失って」

「そうでしたね、ただしあの戦いは悪い事ばかりではありあせん。あなたとフェイト様の絆もその一つです。」

目の前の情報屋は優しく語りかけるように言う。

「それにフェイト様の未来はきっと明るい物です。私の見立てでは十年後にはフェイト様にサプライズがあると思いますよ。今現在も私が無償で勝手にフェイト様に裁判を有利に進めてもらうために頑張っているますので。」

今現在フェイトは裁判でなのはと離れた場所にいる。その裁判では驚くほどフェイトに有利な展開になっている。それは情報屋が賄賂や改竄かいざんなど人には言えない様々な手を使って裁判の流れを有利に進めているからである。

「そうですか。あの、頑張ってください!。」

まさか汚い手を使っているとは思わないのはは純粹に応援した。その純粹な言葉に心を痛める情報屋。

実はそんな姑息な手を使わなくても裁判は上手くいくと思っていた情報屋だが、フェイトの実質育ての親であつたり二スがあまりにも心配しすぎているために情報屋が動くこととなつた。

（だつてな、夜に眠つてる時に唸りながら『有罪』やら『管理局を敵に回してでも』とか言っているからな、それでいて起きてる時はその不安をおくびにも出さずにいつも通りにしてるから何とかしてあげたくなるつてのよ・・・ドールマスターの口調になつてしまつた）

ふとり二スを見る。裁判が始まつた当初に比べ心なしか落ち着いたように見える・・・気がする。

「まあ話を元に戻しますが、その辛い戦いの最中に起きたスラーヴエキングダムの革命は一人の少年の思いから起きました。お客様も知っている人、ミイラ・・・葵井元樹ですよ。」

「・・・葵井さん。」

その言葉になのは今回の戦いで虚数空間に落ちた少年であり、フ
イトのために動いていた少年の名をポツリと言った。

「彼は革命の中心となった種族、ドッグナー犬人種の少年の思いを聞き届けて
とある組織の力を借りました。そして革命は成功しました。」

それが、今回の第三勢力であるシユリー・イタ力率いる艦隊であつ
た。

「葵井元樹も表には出さなかったようでしたけど驚いていたでしょ
うね。まさかドールマスターの世界の艦隊のほとんどが自分の目の
前に現れたのですから。まあ、それと同時に革命も上手くいくと喜
んだのでしょうか。」

そして情報屋はあの時のモニター越しの交渉を思い出しながら言う。
「そして、私はあのいけ好かないドールマスターが管理局に攻撃す
る事を事前に察知していたので、葵井元樹が頼んだ組織の上役の人
にスラーヴェキングダムスラヴの艦隊の撃破をお願いしました。その時の
私は革命の事は知りませんでした。偶然とは恐ろしい物ですね。そ
して、あの場所に革命とは別働隊で動いた艦隊が来たというわけ
です。」

苦笑しながら言う情報屋の言葉になのはは疑問点を一つ言う。

「あのつ、その組織って一体なんなんですか。」

「ええと、死にたくなければ知らない方が身のためですよ。といっ
てもそれを言わないと先に進みませんのでその組織の名前を言いま
すが。」

一呼吸おいて情報屋はその組織の名前を口にする。

ホープレス・ワールド

「夢の世界、それがかつて葵井元樹が所属していた組織です。まあ、
組織と言うよりは大学サークルみたいなところですね。みんながみ
んな好きな事をする、そんな場所です。」

『ただし』、と区切って情報屋はサラリと言う。

「その組織の場所を知った一般人のほとんどは死にます。物理的な
意味ではなく社会的な意味で。知られたくないんでしょうね、自分

達の帰る場所を。」

その言葉に、かつて葵井元樹がユーノに対して自分の事を調べるなと忠告したことを思い出した。

「まあ、組織について詳しく知りたい時はまた後日。もちろん場所は教えませんが。」

《????》

なのはが情報屋から今回の事件のあらましを聞いてるとき、隣の部屋では情報屋とリニスの娘となっている少女、シニスが自分より小さい女の子の面倒を見ていた。

「……。」

「アリシアちゃん、一緒に散歩に行こう。」

「……。」

シニスの言葉に時の庭園から情報屋に保護されたアリシアが表情に笑みを浮かべて頷いた。

情報屋とリニスが脱出しようとしたら上から崩落と一緒にアリシアが落ちてきた。死体だと思いつつも抱き留めたら心臓の鼓動が伝わってきた。情報屋もリニスも驚きながらも時の庭園からアリシアを連れて脱出した。

ただ、アリシアが目を覚めたのはそれから二日後だった。

目覚めたアリシアにリニスは複雑な気持ちで話し掛けた。けどアリシアは何もしゃべらなかった、いや、喋る事が出来なかった。

失語症。言葉がしゃべれなくなる精神的な症状である。治す有効な手段は無いこの病気に情報屋が下した決断は時間が治してくれるのを待つという事だけだった。

そして、アリシアが蘇ったことはなるべく他の人には知られないように隠し通そうという事だった。理由は言わずもなである。

そして、情報屋とリニスはアリシアの保護者となった。シニスは姉妹ができたと喜んでいた。

そして、ほぼすべてを失ったアリシアはそれでも明るく生きている。情報屋はこう言った。『プレシアさんは恐らく旅に出た。だからそこへ通じる道を作るからそれまで俺たちと一緒に過ごさないか。』と。

だからそれを信じてアリシアは明るく生きる。ただ、情報屋の言ったことは夢物語ではない。

情報屋は自身の能力のおかげで歴史や知識もすべて分かる。そして、プレシアが落ちて行った場所の下に有人世界が繋がっていることも分かっている。

だから、情報屋はアリシアの約束を守るために行動してる。時間はたっぷりある、あの世界なら病に倒れたプレシアを保護して治療をしてくれるだろう。そして、フェイトに謝るためにその世界から帰還しようとするだろう。

だから、その手伝いさえすれば多少はハッピーエンドに近づけるかもしれない。そう思い情報屋は今も部下を総動員して準備を進めている。

ただ、その中にアースラに執務官として乗っていた情報屋の部下、ウェージ・バルンサーは入っていない。

【???】

「まあ、これが今回の事件の全貌です。ここまでの疑問はありますか。」

「えっと、温泉の時に私とフェイトちゃんは一回死んだんだよね。ならどうして今もこうして生きてるんですか。」

なのは当然の疑問を口にした。ちなみに温泉とは海鳴温泉の時の

襲撃事件の事である。この時の葵井元樹を狙った復讐者はドールマスターと繋がっていたりする。

「それは葵井元樹が能力を使い蘇らせたからです。細胞一つ一つを自在に操るといって凄い技ですよ。」

サラリと言った情報屋の言葉になのはは驚きを隠せない。ちなみにその能力のおかげでアリシアが蘇ったりもしている。

「そんなに驚くことはないですよ。すぐ隣の管理局未発見世界、まあ私共は第18管理局未発見世界と呼んでいる世界の地球ではギヤルドという吸血鬼が同じ事が出来ますし。」

「きゅ、吸血鬼？」

疑問の声に情報屋は軽く説明をした。愉快的吸血鬼が多いので今度その世界にご案内しましょうかという言葉になのは是非と答えた。「まあ、そういうわけで葵井元樹さんは実は吸血鬼だったという落ちです。それと面白い事に葵井元樹は体を二つ同時に操り生活してたんですよ。人間の重要な内臓器官をすべて除いた包帯を巻いた姿と本来の姿の二つで、器用ですよ、同じ時間に違う行動をするのですから。」

「えっと、なんでそんな事をしてたんですか。」

「それは本人に聞かないと分かりません。こればかりはどうしようもないです。」

本当に情報屋は知らない。どんな考えて二つの体を操り生活していたか、どんな気持ちで生活していたかを。

「では、今回はここまでです。御代は要りませんよ、いつも翠屋で美味しい料理を頂いているので。」

その言葉に嬉しそうにお礼を言うなのは。そこで一つ思い出したかのように質問する。

「あの、バイトで働いていた人がいたんですけれども最近どこかへ行っちゃって、」

なんとなく情報屋はなのは何を言いたいのか分かったので情報を言う。

「ああ、紅美鈴さんですね。彼女は今は旅行に出ていますよ。」
その言葉になのはは情報屋に尋ねる。

「旅行、ですか？」

「そう、彼女にとつて有意義な旅行です。まあ、他の理由としては管理局に捕まるのが嫌だったんじゃないですかね。彼女、時の庭園での戦いの間にプレシアさん家族の人生を潰した男をボコボコにして管理局に自首するように仕向けたので。」

「あはは・・・そうなんですか。」

苦笑いしかできなかった。

《幻想郷》

紅美鈴は管理局から逃げるように久々に幻想郷に帰ってきた。だが自分を覚えている者はいない。だから情報屋の言つとおりこれは旅行となる。

（他の人から見たら私は幻想入りした人になるのかな。）

寂しそうに紅魔館を見る。情報屋の事故により私はこの世界から忘れられた。知ってる人に気付かれないというのはショックで最初は情報屋を憎んでいた。

だけど、今はどうでもよくなった。それに情報屋は罪滅ばしなのか住む環境や仕事まで与えてくれた。

ただ、憎んではないないが信用はしていない。もしも情報屋が目の前で自分の知ってる一般人に接触するようなら阻止するつもりだ。

（結局、あいつは危険な存在に変わらない。それにいつまで偽善者を続けるかも分からないから。）

紅魔館のベランダではレミリアがティータイムを楽しんでいる。そ

の傍らには執事の男が立っている。

「ん、執事？」

目を凝らしてみる。遠くからなのでばんやりとしか見えないが眼鏡をかけたらしき執事が恭しく立っていた。

新入りだろうかと思いつながら紅美鈴はその場を後にする。久々に来た幻想郷の変わらぬ姿を楽しもうと思いつながら。

《十年後 機動六課》

十年という月日は色々あり、フェイトも立派な執務官として活躍していた。

現在は新設された機動六課のライティング隊の隊長として仕事に励んでいる。

そんな彼女は男物の純白のコートを着ることなく大切に持っている。最初は灰色の神父服だったが何故か徐々に白く形が変わっていき、最後には純白のコートになったのだ。

その事にフェイトは本当に葵井元樹が死んでしまったんだと再確認してフェイトは涙を流した。

そんな時は周りの人が慰めてくれたし一緒に泣いてくれる人もいた。だからフェイトは前を向いて歩き続ける事が出来た。

「ほな、紹介よろしく。」

今日は八神隊長の部隊長室で隊長と副隊長全員が朝早くから召集されていた。なんでも本人の強い希望による転入者が来るらしく、今日はその挨拶があるらしい。

ガチャリと扉が開く音がして、そこから小学生ぐらいの少年が現れた。

「かつ、管理世界12番『ゾテイク』担当、自然保護隊しょ、所属、葵井遥希三等陸士であります。よ、よろしくお願いします!!」その紹介に八神はやては微笑ましそうに言う。

「見ての通り遥希君はまだ子供やけど、担当世界の密猟者ひみつぎを一月で23人も摘発したスーパースーパーボーイや、しかも一人でやで。」

その言葉を聞き気恥ずかしげに照れる少年。そんな少年を驚きながらも一部除いて暖かい眼差しで見守る隊長達。

「えつと、足手まといにならないように、が、頑張ります。だから訓練ではビシバシ扱しいてください、お、お願いします!!」

緊張しているのが丸わりの少年の様子に拍手で迎える一部を除いた隊長達。そして八神はやてはある事に気づき質問する。

「どうしたんなのはちゃんとフェイトちゃん、幽霊でも見たような顔をして。」

そう呼ばれた二人は呆然と転入者を見ている。

「おい、なのはにフェイト。大丈夫か?」

ヴィータが声を掛けて二人はようやく我に返った。

「えつ、あつ、大丈夫大丈夫、それよりよろしくね、葵井遥希君。」

「うん、私も大丈夫だから。それより葵井遥希君、困ったことがあったらすぐに相談してね。」

そう言い、その後この場はお開きとなった。そして、はやてからの

御達しでボーとしていた罰としてなのはとフェイトが隊舎を案内することになった。

案内しながらなのははフェイトに念話で会話をする。

（フェイトちゃん、遥希君の事なんだけど。）

（それはないと思う、だってあの時に葵井さんは虚数空間に落ちたから生きてるはずがない。）

（だけど、あれはどう見ても。）

なのはとフェイトは葵井遥希を見た瞬間驚いていた。なにせ顔つきがどことなく十年前に死んだ葵井元樹に似ているのだ。葵井元樹の息子みたいなように。

それに苗字まで一致している。

そんな二人の事を驚かせた少年は緊張しながら二人に言葉を掛ける。

「あの・・・」

フェイトとなのはは念話をいったん切り上げて少年に向き直る。

「何かな、遥希君。」

フェイトは優しく声をかける。少年は緊張しながらも意を決して言う。

「いつ、今までお二人に憧れてました！！ そんな御二人に案内して貰えるなんて、かつ、感激です！！」

『Strange Vampires' Journey
end』

Next to The life by
six movement of Donne peel
『

後日談と未来への繋ぎ（後書き）

妖気「ようやく完結へ導けた。」

ミイラ「つまり今度は機動六課が主軸の話になるんだな。」

妖気「まあね、だがミイラは主人公じゃないからな。」

ミイラ「それは分かるが、なら主人公は最後に出た遥希が勤めるのか？」

妖気「まあ、そうなるな。まあそんなわけで今回でこの話は完結を迎えました。」

ミイラ「終わりが、これで本当に虚数空間の底で眠れる。」

妖気「いままでご苦勞様だったなミイラ。」

これにて『Strange Vampires Journey』は終わります。

後は物語の補完を三つほど書いて終了だと思います。

今まで拙い文章を読んでいただきありがとうございました。

補完 シニス

《????》

「シニス、アリシア様。お留守番よろしくね。」

「分かった。ママ、行ってらっしゃい。」

「・・・。」

リニスの言葉に元気に返事をするシニスと明るく笑いながら無言でうなづくアリシア。

その様子を見てリニスは出張中の情報屋の下へと行く。玄関の扉が閉じた音がした瞬間に爆音が聞こえて女の子二人は両耳に手を当てた。

爆音の正体は山猫の愛機^{バイク}、『F e l i s s i l v e s t r i s』

から発せられるエンジン音である。なんでも情報屋印のモンスターマシンであり、情報屋がリニスのために作ったバイクでもある。

そんな近所迷惑な代物^{しろもの}にまったくシニスは触れることなくアリシアに笑いかける。

「じゃあ、一緒にお絵かきしよう。」

その言葉に嬉しそうに無言でうなづくアリシアだった。

その様子を見ながらシニスはお絵かき道具を取り出すのだった。

《過去 思い出》

アルフが情報屋を殴り飛ばした日、情報屋の店で魔導書が暴走した。

魔導書はドイツ語で書かれていて、その中の一文が光った。

《Eine Blume versprochenen Scharrlaches【約束された緋色の花】》

情報屋とリンスが冷や汗を流して見ていると、魔導書を中心に大小様々な緋色の花が咲き乱れていく。

「Der dringende Halt der Verfallsger Yog-Sothoths Hauptgotte s , den ihm Azathoth eine Reihe n folge f ? r und ein wieder - Stem pel gibt .」

ドイツ語の命令により徐々に魔導書の暴走は収まっていくがまたすぐに勢いが元に戻る。

「あの、ルシフィさん、今なんて言ったのですか？」

情報屋の言葉の意味が何だったのか気になったリンスは率直に質問してみた。

「主神アザトースの眷属ヨグ＝ソトースが命じる、緊急停止及び再封印、って言ったんだがヤバいな。」

花卉は吹き乱れ始め、一種の幻想空間を生み出していた。

「Sagen Sie eine Forderung , und ich bin eine Person , die alles ablehnt【要求を言え、我は全てを拒むものなり】」

情報屋の言葉に反応するかのように魔導書はさらに吹き乱れる。その時に、リンスは聞こえた。

『Ic……b……ne……sam』

寂しそうな、悲しそうな声だった。情報屋は聞こえてないのか命令という名の呪文を紡いでいく。

「Ich erwarte Leben mehr als ein Leben . Ich erlaube es nicht a

ufzuwachen.【我は一の命より多くの命を望む。目覚めることは許さん。】」

「I h... in ein m」

また聞こえた。寂しそうな思い、その思いに触れるかのようにリニスは魔導書に向かい歩いていく。

「ch b... sam」

助けなくては。あの魔導書は寂しいだけ、悲しいだけ。なら封印を解いてあげないと。

「止まれっ！！山猫！！」

後ろからかかった怒声に驚いて後ろを振り向くと、そこには情報屋が真剣な顔で立っていた。

「もうすぐ信頼できる引き取り手が現れるから商品棚の場所に置いていたが、あの本は危険なんだ。すぐに戻ってくれ。」

「I c... sam」

「でも、聞こえるんです。あの本から寂しそうな、悲しそうな子供の声が。」

リニスの甘い考えに情報屋は現実を叩きつける。

「あの魔導書はルルイ工異本ドイツ語版の写本、毒物だ。」

情報屋は真剣な表情で淡々と説明する。その間にも魔導書からは花弁は吹き乱れる。

「分かりやすく言うとエクリプスウイルスと同等、それ以上の毒を含んでいる。あるファミリーは世界を殺す毒になると無理な幻想を言っているが、それが出来てしまうほどの幻想をあの本は持っている。」

「だからどうしたんですか。」

リニスは魔導書に向き直り、歩みを進める。

「悲しむ子に手を差し伸べて何が悪いんですか！　そんなの、間違ってます。」

そして、魔導書に近づき手を伸ばして、そして見た。魔導書の中の文字を、その文字を見た瞬間に気が狂いそうになった。

「ルルイ工異本は閲覧者を廃人にさせるか狂人にさせるか死亡させる毒を持っている。だから毒だと言ったのに。」

リニスに近づいた情報屋が肩に手を掛けて引き戻そうとした。

「離してください!!」

その手を振り払いリニスは魔導書を手に取った。

「があっ!?!?・・・私は、大丈夫です。それにもう同じ過ちは犯したくない!!」

「・・・。」

リニスはフェイトを救う事が出来ず、今現在もフェイトは苦しんでいることを知っているし後悔もしている。だからだろうか、リニスはこの魔導書が一人で寂しく苦しんでいることを知る事が出来た。

「だから、この子を助きたい!!」

リニスは魔導書を抱きしめた。緋色の花卉はさらに勢いを増して吹き乱れる。

「・・・。」

情報屋はリニスの言い分を聞いてドイツ語の命令文を出す。

「Ich bereue von einem Verbrechen, ihm da für eine Reihenfolge zu geben und bin in vollem Ruhm. Eine Blume versprochenen Scharachas. 【命じる、罪を悔い改め咲き誇れ。約束された緋色の花。】」

その瞬間、魔導書は咲き誇った。幻想的な光景だった。

「ふう、一人で突っ走りやがって、毒ぐらいなら一緒に喰らってやるよ。だからお前一人が抱え込むな、山猫。」

リニスに流れ込んでいた魔導書の毒素を情報屋は自らに移しながら言う。

「それと、今はその子を強く抱きしめてやった方がいい。目の前の女の子を救えないんじゃ、あの娘も助けられないぞ。」

魔導書はいつの間にか長いブロンドの髪の少女になって抱きしめら

れていた。

その魔導書だった少女はリニスの胸の中で泣いていた。震えるように泣いていた。リニスは魔導書だった少女に向かい強く抱きしめる。

「もう、大丈夫。大丈夫だからね。」

「D , D a n k e」

情報屋はその光景を見ていた。

（やっぱ俺も甘くなったな。さて、こうなったら仕方ないし名前はどつするか。リニスが母親になるから・・・リニス、りにす、しにす、シニス・・・ちようどぴったりだ。）

遊び心で名前を決めた情報屋は魔導書だった少女に向かい言葉を掛ける。

「今日から名前はシニスだ。」

『シニス』、ギリシア神話の怪力の盗賊の名前。

名前の意味はちょっとした遊び心と、今まで多くの人を破滅に導いてきた魔導書は死んで生まれ変わったという意味を込めて。

（あつ、もうすぐ来る引き取り手に連絡と説明しないと。）

《現在》

アリシアとシニスはお絵かきをしていた。アリシアはクレヨンで一回死ぬ前のピクニックに行った時の楽しい思い出を。

シニスは鉛筆でリニスと情報屋の似顔絵を描いていた。シニスの絵は意外と写実的である。そして、似顔絵の下にはそれぞれパパ、ママと書いてあった。

補完 シニス（後書き）

さりげなく魔法戦記リリカルなのはForceへの繋ぎを作っていたり

さて、エクリップスウィルスとルルイエ異本、どちらが世界の毒になるのか・・・

補完 プレシア

愛機^{バイクラ}、『Felis silvestris』を降りながらリニスはフルフェイスのヘルメットを脱ぎ去った。

「ここが・・・」

目の前の総合病院を見上げながらリニスは呟く。『夢の世界第三総合病院』、管理局に見つかってない組織が運営している世界で創設された病院。

その一室に目的の人がいる。因縁深く忘れることのできない人がいる。

《夢の世界第三総合病院 三階西病棟》

その病室は個室だった。

真っ白なベッドの上には一人の女性がいた。その女性は時の庭園での戦いの時に体に乗っ取られていた、そして最後には虚数空間に落ちて行った女性。プレシア・テストロッサだった。

そんな女性と情報屋は会話していた。

「つまり、ドールマスターは虚数空間に落ち切る前に貴方の体から抜けてどこかへ逃げてしまったという事ですね。」

「ええ、そして気が付けば私はこの病院にいた。一つ尋ねていいかしら。」

「ええ、良いですよ。」

プレシアは外の光景を見ながら尋ねる。外では雀^{すずめ}がせわしなく飛んでいた。

「フエイトは今どうなってるの。」

「裁判で有利な状況ですね。まあ、元気にしてますよ。」

「そう・・・その裁判では私は悪者となってるのかしら。」

「否定はしませんよ。なんならどんな悪役になっているのか詳しく教えましょうか。」

「いいわ、別に。違法研究の事故で娘を殺して管理局に娘をけしかけた愚かな母親として裁判で言われてるのでしょ。」

「そんな事ありません!!」

突然部屋に乱入してきた女性にプレシアは目を見開き驚いていた。

「り、リニス？」

プレシアの目の前には死んだはずのリニスが立っていた。それも、いつも着ていた服ではなく落ち着いた感じの服を着て。

「貴方は自分で自分の過ちに気付いたんです。だから自分の事を悪く言わないでください!!」

突然現れたリニスにプレシアは驚いていたがすぐに反論を返す。

「いいえ、私は悪人よ。それに娘が死んだのも私があのに」

「あ、あー。それなんですが、ひとつ貴方に報告したいことがあります」

プレシアの言葉を遮^{やぶ}って情報屋は微妙に笑いながら言う。

「蘇^{よみがえ}ってますよ、アリシアさん。」

その言葉にプレシアがどんな顔をしたかは想像に難しくない。

「では、時期を見てアリシアさんを連れてきますのでそれまでに少

しでも治療に専念してくださいね。」

「ええ、分かってるわ。それとお酒、次に来る時に忘れずに持ってきたさいよ。ここ、病院だからお酒が出ないのよ。」

「病人なんですからお酒は控えた方がいいと思いますよ。」

「リニス、貴方は黙ってなさい。」

「ルシフィさん、次に来るときはイソプロピルアルコールを持っていきましようか。」

「ちよつと、それは消毒液!!」

「リニス、工業用エタノールが良いかと思うが。」

「ちよつと待つて!？ そんなの飲んだら死ぬわよ!!」

「「だつたら早く病を治すことです。」」

二人してそう言うつとサツサとプレシアの病室から出て行つた。もはや確実にリニスはプレシアを主とは認めてはいない模様。まあ、嫌つてもないのだが。

「・・・アリシア、生きているのね。」

青空を見ながらポツリと呟いた。それと同時に病室に新たな人がやつてきた。

「プレシアさん、検診の時間ですよ。脈を測りますね。」

そう言いながら、この病院の院長がやつてきた。

「もうそんな時間なのね。それにしても院長がわざわざ一個人の脈を測るために本来の仕事を放り出してよかったの。」

その言葉に苦笑いしながら院長は脈を測る。

「ドールマスターに体に乗っ取られたんですから何が起こるか分かりませんからね。」

「そうね。だけど最初に貴方を見たときは驚いたわ。」

「何がですか?」

院長は脈を測り終わつた後にカルテに書き込む。

「あの灰色の包帯の少年を奇妙な形の剣で突き刺した傭兵がここで院長をしてることよ。最初に貴方が現れた時は殺されると思つたわ。」

「

院長のペンの動きが止まる。実は院長は傭兵をやっており、葵井元樹を七支刀で地面に縫い付けた人だったりする。

「それにしても冷静でしたよね。」

「当たり前よ、私は一度死ぬ覚悟をしたのだから。今は死ぬ覚悟より生きる覚悟だけだね。」

プレシアには二つの目的がある。一つはアリシアと再会を果たすこと。そしてもう一つはフェイトに謝ること。

「生きる覚悟があるという事はリハビリにも繋がる良い事です。その気持ちを忘れないくださいね。」

「言われなくてもそうするわ。」

優しく語る院長にプレシアはそっけなく返した。

「では一つ言いますが、術後経過も良さそうですし、しばらくすればリハビリに移れるかと思います。」

「リハビリね・・・その中に魔法に関するリハビリはあるかしら。」

「難しいですね。ドールマスターに乗っ取られた影響が魔力ランクがFランク。これでは満足に魔法のリハビリはできませんね。」

現実を叩きつけるがプレシアの表情は暗くはならなかった。ただ分かり切っていたかの表情で窓の外を見続けた。

眼下には退院した女性が女の子二人と一緒に病院から去って行った。家族だろうかと思うと同時に、自分もいつかこのような日々が訪れるのだろうかと思ひ描くプレシアだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7065r/>

StrangeVampire's Journey

2012年1月10日20時52分発行